南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第32集

山梨県南アルプス市

DOUDOU UEHATTA SITE

百々・上八田遺跡

畑地帯総合整備事業　白根地区農道１号線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１２．３

南アルプス市教育委員会

DOUDOU UEHATTA SITE EXCAVATION REPORT

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第32集

山梨県南アルプス市

DOUDOU UEHATTA SITE

百々・上八田遺跡

畑地帯総合整備事業　白根地区農道１号線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１２．３

南アルプス市教育委員会

例　言

1．本書は山梨県南アルプス市上八田に所在する「百々・上八田遺跡」の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は畑地帯総合整備事業　白根地区農道1号線の建設事業に伴って実施した。
3．調査は平成22年8月2日から9月4日、および平成22年10月18日から12月24日にかけて行い、実質調査日数は57.5日であった。
4．調査範囲は本調査に先立って行われた試掘調査結果に基づき、実質調査面積は1360㎡であった。
5．調査は山梨県中北農務事務所の委託を受けて、南アルプス市教育委員会が主体となって行った。発掘調査に従事したのは以下の方々である。
　秋山高之助　飯室めぐみ　市ノ瀬政次
　加藤由利子　小林素子　桜井理恵　清水勇希
　真道みゆき　醍醐三郎　高畑美和　中川和哉
　中澤　保　名取　茂　早川榮蔵　穂坂美佐子
　山路宏美　山村隼人
6．整理調査は平成23年度に行い、以下の方々が参加した。
　飯室めぐみ　加藤由利子　小林素子
　桜井理恵　塩澤宏紀　高畑美和　中込夢実
　新津大地　山路宏美
7．本書の編集・執筆は田中大輔（南アルプス市教育委員会　文化財課）が行った。
8．本書に掲載した地図は国土地理院発行1/25000「甲府」・「小笠原」、南アルプス市発行1/10000「南アルプス市全図」である。
9．発掘調査に伴う基準点の設定は昭和測量（株）、本報告書に使用した航空写真の撮影は（株）スカイサーベイ、出土遺物の実測およびトレースの一部については（有）松風ツールアート、出土遺物の保存処理については、（財）山梨文化財研究所にそれぞれ委託した。
10．発掘・整理調査に際しては以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（敬称略・50音順）
　山梨県教育委員会学術文化財課
　山梨県埋蔵文化財センター
11．本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

凡　例

遺構凡例

1．遺構の縮尺は調査区全体図1/500、遺構配置図1/250、竪穴住居址・土坑1/40、竈1/20・1/40、溝1/40・1/80を基本とした。同一挿図中の平面図に対して断面図の縮尺を2倍としたものがある。
2．遺構断面図中の「323.5」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。
3．挿図中の北方位はすべて国家座標を基にした座標北である。磁北は6°10′西偏する。遺構挿図はすべて座標北もしくは座標東を上に組んだ。
4．遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、頻繁になる場合は省略した。これ以外に用いたトーンは以下のとおり。
　火床・焼土範囲：
　撹　　乱：
5．本書においては、便宜上遺構に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。
　SI（住居址）プランが方形又は方形に類する形状をとるもの。
　P（ピット）柵列、掘建柱建物址の柱穴等、遺構に伴う坑。
　SD（溝址）プランが溝状を呈するもの。
　SK（土坑）土に穿たれた穴で上記以外のもの。
6．遺構の名称は、原則として種類別に確認順に付したものを基本とするため、その所属時期、位置とは無関係である。
7．土坑計測表の規模、標高の単位はmである。

遺物凡例

1．遺物の縮尺はすべて1/3で示した。
2．土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で左側1/2に外面、右側に1/2に断面及び内面を記録した。残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図した。また、状況によっては外形・断面等を任意の回転で付したものもある。
3．須恵器は断面を黒く塗りつぶした。灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施した。これ以外に用いたトーンは以下のとおり。
　黒色処理：　　炭化物の付着：
　施釉範囲：
4．回転体にならない遺物、また破片資料であるため推定径の算出不能な土器の実測に際しては、側面（断面）を中心に左側に外面、右側に内面を示した。拓影図に関しても同様の作図に依った。
5．遺物観察表における計測単位はすべてcmである。また、括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大値である。
6．遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』に準拠して付与した。
7．挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

目　次

例言・凡例
目次

第１章　調査に至る経緯と経過 ―― 1

第２章　遺跡の立地と環境 ―― 5

第３章　検出された遺構と遺物 ―― 9

第４章　総　括 ―― 51

参考引用文献
図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　調査区の位置　— 3
第２図　遺跡の立地と環境　— 4
第３図　周辺の調査と調査区全体図　— 7
第４図　基本層序　— 8
第５図　調査区１区・２区
・３区遺構配置図　— 14
第６図　調査区４区・５区遺構配置図　— 15
第７図　ＳＩ０１測量図　— 16
第８図　ＳＩ０２・ＳＫ１９測量図　— 17
第９図　ＳＩ０３測量図　— 17
第10図　ＳＩ０４測量図　— 18
第11図　ＳＩ０５測量図　— 18
第12図　ＳＩ０６・ＳＫ０６
・ＳＫ０７・ＳＫ０８測量図　— 19
第13図　ＳＩ０７測量図　— 20
第14図　ＳＩ０８測量図　— 21
第15図　ＳＩ０９測量図　— 22
第16図　ＳＩ１０測量図　— 23
第17図　ＳＩ１３測量図　— 23
第18図　ＳＩ１１測量図　— 24
第19図　ＳＩ１２測量図　— 25
第20図　ＳＩ１４測量図　— 26
第21図　ＳＩ１５測量図（１）　— 27
第22図　ＳＩ１５測量図（２）　— 28
第23図　ＳＩ１６測量図　— 29
第24図　ＳＫ０２測量図　— 30
第25図　ＳＫ０３測量図　— 30
第26図　ＳＫ０４・０５測量図　— 31
第27図　ＳＫ０９～１８
・ＳＤ０４・ＳＤ０５測量図　— 32
第28図　ＳＫ０１・ＳＤ０１測量図　— 33
第29図　ＳＤ０２測量図　— 33
第30図　ＳＤ０３測量図　— 34
第31図　ＳＩ０１出土遺物　— 35
第32図　ＳＩ０２出土遺物　— 35
第33図　ＳＩ０３出土遺物　— 36
第34図　ＳＩ０４出土遺物　— 36
第35図　ＳＩ０５出土遺物　— 36
第36図　ＳＩ０６出土遺物　— 37
第37図　ＳＩ０７出土遺物　— 37
第38図　ＳＩ０８出土遺物（１）　— 37
第39図　ＳＩ０８出土遺物（２）　— 38
第40図　ＳＩ０９出土遺物　— 38
第41図　ＳＩ１０出土遺物　— 38
第42図　ＳＩ１１出土遺物　— 39
第43図　ＳＩ１２出土遺物　— 39
第44図　ＳＩ１３出土遺物　— 40
第45図　ＳＩ１４出土遺物　— 40
第46図　ＳＩ１５出土遺物　— 41
第47図　ＳＩ１６出土遺物　— 42
第48図　ＳＫ０２出土遺物　— 42
第49図　ＳＫ０３出土遺物　— 43
第50図　ＳＫ０４出土遺物　— 43
第51図　ＳＫ０５出土遺物　— 43
第52図　ＳＫ０６出土遺物　— 43
第53図　発見された遺構の分布　— 52
第54図　想定さる遺跡のひろがり　— 53

表目次

第１表　土坑計測表　— 13
第２表　遺物観察表（１）　— 44
第３表　遺物観察表（２）　— 45
第４表　遺物観察表（３）　— 46
第５表　遺物観察表（４）　— 47
第６表　遺物観察表（５）　— 48
第７表　遺物観察表（６）　— 49
第８表　遺物観察表（７）　— 50

図版目次

図版１　調査地点遠景（南より）　調査区遠景（南より）
図版２　調査区１区全景（南より）　調査区３区全景（南より）
調査区２区　東側トレンチ調査状況（北より）
調査区２区　東側トレンチ土層堆積状況
図版３　調査区４区・５区全景(上方が北)
図版４　ＳＩ０１（西より）　ＳＩ０１竈（北西より）
図版５　ＳＩ０２（西より）　ＳＩ０２遺物出土状況（西より）
図版６　ＳＩ０３（西より）　ＳＩ０３竈（西より）
図版７　ＳＩ０４（西より）
図版８　ＳＩ０５（西より）　ＳＩ０５竈（西より）
図版９　ＳＩ０６・ＳＫ０６（西より）　ＳＩ０６竈（西より）
図版10　ＳＩ０７（北より）　ＳＩ０７竈（西より）
図版11　ＳＩ０８（北より）　ＳＩ０８竈（西より）
図版12　ＳＩ０８遺物出土状況（北西より）
図版13　ＳＩ０９（西より）　ＳＩ１０（北より）
図版14　ＳＩ１１（南より）　ＳＩ１１竈（南より）
図版15　ＳＩ１２（西より）　ＳＩ１２竈（北西より）
図版16　ＳＩ１３（北より）　ＳＩ１４（西より）
図版17　ＳＩ１４遺物出土状況（西より）　ＳＩ１５（西より）
図版18　ＳＩ１５竈（西より）
図版19　ＳＩ１６（西より）　ＳＩ１６竈（西より）
図版20　ＳＫ０２（東より）　ＳＫ０３竈（東より）
図版21　ＳＫ０４・ＳＫ０５（北より）
ＳＤ０４・０５／ＳＫ０９～１２・１５～１６（西より）
図版22　ＳＫ０９（西より）　調査風景　ＳＤ０２（東より）
図版23　ＳＤ０１（西より）　ＳＤ０３（南より）
ＳＤ０３土層堆積状況（南より）
図版24　出土遺物　SI01-2　SI05-1 SI05-5 SI06-1 SI06-2 SI07-1 SI07-2
図版25　出土遺物　SI07-3　SI07-4 SI07-6 SI08-1 SI08-2 SI08-3 SI08-4 SI08-6
図版26　出土遺物　SI08-8　SI08-9 SI08-11 SI08-13 SI08-15 SI08-16 SI09-2
S11-2
図版27　出土遺物　SI11-3　SI12-2 SI12-3 SI12-8 SI13-1 SI13-2 SI13-3 SI13-7
図版28　出土遺物　SI14-1　SI15-1 SI15-2 SI15-5 SI15-6 SI16-2 SI16-4 SI16-9
図版29　出土遺物　SI16-10　SI16-12 SK02-1 SK02-2 SK02-4 SK03-3 SK03-7
図版30　出土遺物　SI06-5　SI07-11 SI07-12 SI08-27
SI08-28 SI08-29 SI09-4 SI10-2 SI16-15 SK04-6

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成21年９月８日、南アルプス市教育委員会は、南アルプス市上八田地内における畑地帯総合整備事業白根地区の農道１号線建設に際して、山梨県中北農務事務所長から埋蔵文化財の有無について照会を受けた（中北農第2243号）。

これを受け、南アルプス市教育委員会は平成21年９月15日～17日、当該計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認するため、文化財保護法第99条第１項に基づく試掘確認調査を実施した。

その結果、平安時代前半の遺構・遺物の検出を確認。平成21年９月28日、工事着工に際しては、埋蔵文化財について記録保存等保護措置が必要な旨、結果を山梨県中北農務事務所長に回答した（南ア教文9-23号）。

これに基づき、南アルプス市教育委員会と山梨県中北農務事務所は、本調査を行うべき範囲について協議し、最終的な本調査予定範囲の確定のため11月24日に補足調査を実施した後、平成22年６月30日に協定書を締結し、後述の日程で埋蔵文化財の記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査の方法

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように５ｍメッシュを基本とする国家座標Ⅷ系に即したグリッドを設定した。基準点の設置はＧＰＳに拠った。

調査は重機により表土を除去した後、人力により確認面を精査し、遺構確認作業を行なった。表土から遺構確認面までの深さは概ね30～50ｃｍ程であった。

竪穴住居址の調査に際しては原則として四分割法を採り、２本の直交するセクションラインを設定、市松模様状に土層観察用のベルトを残して覆土を除去した。土層観察用のベルトは土層断面図を１／20で作成後取り除いた。遺構平面図は主に光波測量による遺構測量システムにより、１／20で作成した。竈についても同様としたが、一部ラジコンヘリコプターによる空中写真測量により補完した。

土坑については覆土を二分割し、まず半分の覆土を除去した。その後、覆土の半裁によって生じた覆土断面の観察を行ない、土層断面図を１／20で作成した後完掘した。また、必要に応じてエレベーション図を１／20で作成した。平面図の作成要領は竪穴住居址と同様である。正し、土層の観察、平面図の作成後に土層断面図・エレベーション図の作成を行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに替えた場合もある。溝に関しては土坑に準じて処理した。

第３節　調査の経過

調査に際しては、便宜上調査区を５区に分けて実施した。調査地点の現況は、ブドウ畑・カキ畑・サクランボ畑といった果樹園であったが、調査はまず、既に果樹等の撤去が終了していた１区並びに３区から着手した。両区の調査は、平成22年８月２日に開始し９月４日に終了した。

調査の開始にあたり、８月３日には文化財保護法第99条第１項に基づく発掘調査に着手した旨、山梨県教育委員会に報告した（南ア教文第8-8号）。

１・３区の調査終了後、他の調査区についてはブドウ、カキ等の収穫を待ち、果樹の伐採、ブドウ棚の撤去を行った後に調査を実施することとし一旦機材等を撤収した。なお、この間を利用し、基礎的な図面の整理作業等を実施している。

残る調査区のうち、４区ならびに５区の調査は、ブドウの収穫、ブドウ棚の撤去を待って10月18日に着手した。その際、遺構を精査したところ、５

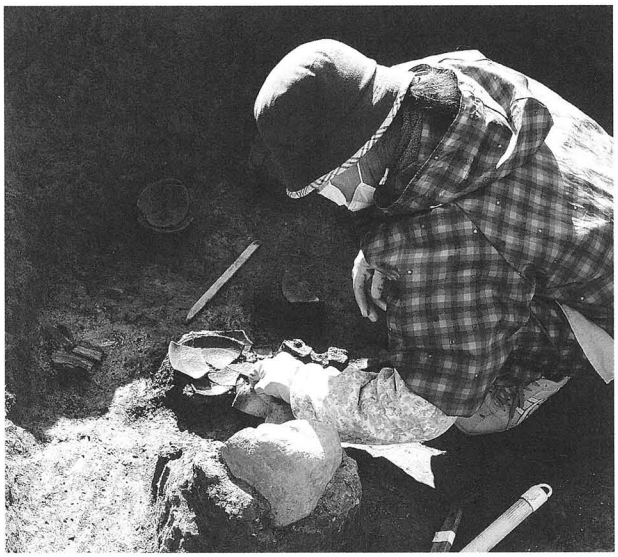


写真１　調査風景

区の北半で遺構の検出が途絶えたため、これ以北の試掘確認調査で遺構・遺物が検出されていないことに鑑み、５区北半以北の調査は行わなかった。

これと平行して、これまで果樹により試掘調査の行えなかった２区において確認調査を行ったところ、明確な遺構の検出がみられず、この部分については、試掘トレンチにおいて土層堆積状況を記録し調査終了とした。

４・５区の調査は、12 月 24 まで継続し、同日終了した。

後述するとおり、今回の調査において最終的に検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

出土遺構：平安時代前半　竪穴住居址　16 軒

平安時代前半　溝５条

平安時代前半　土坑 19 基

出土遺物：平安時代前半　土師器・須恵器・鉄製品（刀子、紡錘車等）

調査終了後、平成 22 年 12 月 27 日には、山梨県教育委員会に終了報告をおこなうとともに、遺物保管証の提出をおこなった。（南ア教文第 12-23 号）、また同日南アルプス警察署長に対し、遺失物法第４条第１項に基づく届出をおこなった。

その後、１月末まで、機材の撤収、洗浄、出土遺物の整理確認作業等を実施した。

整理調査は平成 23 年度実施し、本報告書の刊行に至った。

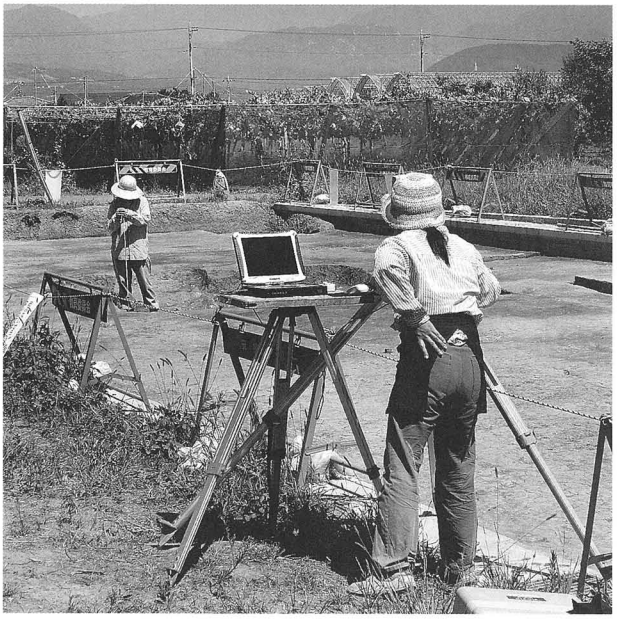
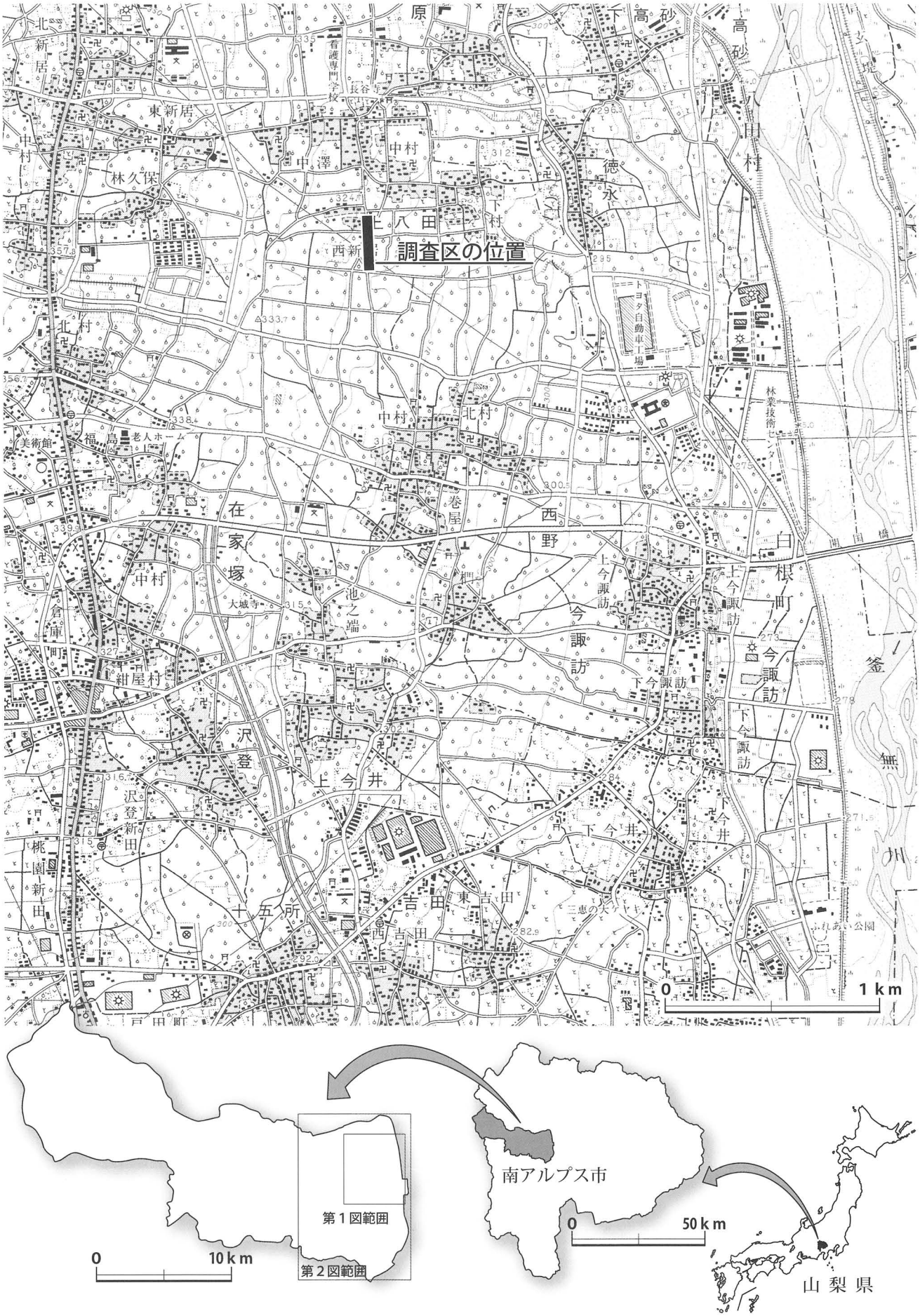


写真２　調査風景



第１図　調査区の位置

第２図　遺跡の立地と環境

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

本遺跡は、平成15年４月１日、山梨県の釜無川（富士川）右岸地域６町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積264.06平方ｋｍ、領域は東西29.6ｋｍ、南北11.8ｋｍの範囲に広がり、山梨県の総面積の約5.9%を占める。市の東端は、釜無川左岸に占地する市域の飛地部分にあり、西端は、大仙丈ケ岳（2975ｍ）であり長野県に接する。市の北端は、駒津峰（2752ｍ）付近で、南端は、釜無川に滝沢川、坪川等が合流する地点となる。市の最高点は北岳山頂の3193ｍ、最低点は市の最南端にあたり標高約241ｍを測る。

市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占める。これは、概ね山梨県の最西部、所謂峡西（きょうさい）地域、西郡（にしごおり）地方などと呼称されてきた地域に相当し、町村合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

市域西部は、国内第２位の標高(3193ｍ)を誇る南アルプス連峰（赤石山脈）の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰との間には、所謂「糸魚川-静岡構造線」が市域を縦断する。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の営為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御勅使川の河川作用によって形成された御勅使川扇状地は、日本有数の扇状地として著名である。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由来の複合扇状地群が到達し得なかった市域南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。

本遺跡が占地する御勅使川扇状地は、面積約4000ha、東西約7.5km、南北約10kmに及び、その規模と美しい扇形から日本有数の扇状地として知られる。この広大な扇状地上、砂礫の厚く堆積したその扇央部は地下水位が極端に低く、砂礫土壌で排水がよいため、古来から俗に「月夜でも焼ける」といわれるほどの広大な旱魃地帯を形成してきた。

扇状地の西辺は、南アルプスの前衛、巨摩山地によって規定され、東辺はその時々の釜無川の流路とせめぎ合う。

御勅使川は、その流路を変遷し、現在は扇状地の北辺に沿うように東流しているが、歴史的に見れば、扇頂を視点としてダイナミックな流路の変遷があったことが明らかとなってきており、現在も扇状地の上にはいくつかの旧川道を確認することができる（今福2004a）。

遺跡の立地する南アルプス市上八田は、隣接する南アルプス市徳永や榎原の一部とともに、古代の御勅使川本流であったとされる、いわゆる【御勅使川南流路】と、武田信玄の治水伝説が残り、近代まで河道として機能していた、いわゆる【前御勅使川】とに挟まれた広大な中州状の空間に占地する。この領域の東辺は、御勅使川扇状地を釜無川が浸食してできた侵食崖に画され、釜無川氾濫原と御勅使川扇状地上との比高は約20ｍに及ぶ。このように周囲を河川・河道に囲まれた上八田、および崖線上に位置する部分の徳永、榎原は、地理的にも歴史的にもひとまとまりの地域としてとらえることができる。

この領域の東端からは、縄文時代後期および古墳時代後期～奈良時代の集落跡が発見されており、まだ水田を志向しない時代、または集落の規模が小規模な場合にあっては、崖線下の水場に湧水を汲みに

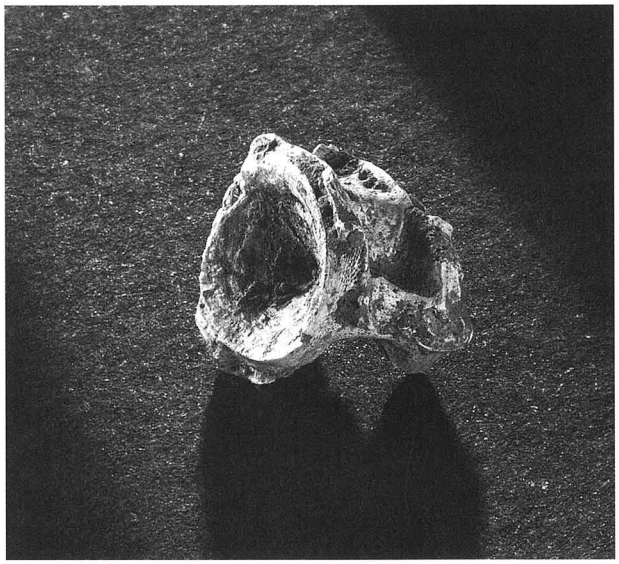


写真３　タイの椎骨
百々・上八田遺跡（縄文時代後期）

いくことができれば、御勅使川の流路からはずれ、釜無川の浸食崖の上に立地するこの領域は、水害に遭い難い、当時の人々にとってはむしろ安定して集落の営める場所だったといえる。

釜無川の浸食崖に沿った 上八田下村遺跡①※や上八田堂前遺跡②では、古くから縄文時代前期の配石遺構や遺物が出土することが知られてきた。近年の調査でも、同領域の東端に位置する徳永・御崎遺跡④・⑨から、縄文時代後期の遺物や配石遺構が検出され、また百々・上八田遺跡の東端域からも個人住宅の浄化槽設置に伴って実施された調査⑭により、同じく縄文時代後期の配石遺構や敷石住居が検出されており、この領域の東半域に広く該期の遺跡が分布することが明らかとなっている。なお⑭地点の調査では敷石住居に伴って海洋魚であるタイの椎骨が発見され、先史時代の流通や地域間交流を考える上で注目を集めた。

また、徳永・御崎遺跡の別地点⑧からは、釜無川（富士川）西岸地域では検出例の少ない、古墳時代後期の集落址が検出されているほか、坂ノ上姥神遺跡⑥では奈良時代の遺構・遺物が発見され、ここまで点々と人の営みの痕跡をたどることができる。

その後、平安時代（9世紀後半）になると集落は、同領域において突如としてインフレーション的に展開をはじめ、第3図に示したとおり、榎原・天神遺跡③や坂ノ上・姥神遺跡⑰をはじめとして、上八田を中心とするこの領域のほぼ全域で該期の遺構や遺物を見つけることができるようになる。

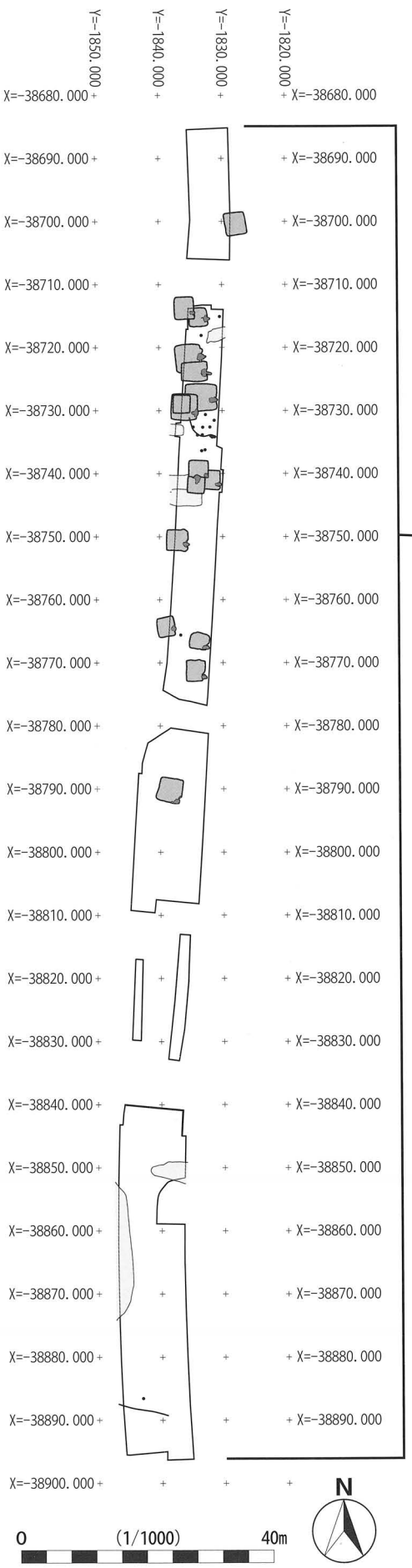
特に、甲西バイパス（中部横断道）の建設に伴って行われた発掘調査⑤では、遺構が南北840 mの範囲に途切れなく連なり、調査した範囲内だけでも、平安時代の竪穴住居址253軒、そのほか掘立柱建物址、溝跡など多くの遺構、また土器などのほか、緑釉陶器、鉄製品、鉄滓、錘、銅鏡（八稜鏡）といった多彩な遺物が発見され、古代甲斐国でも屈指の大遺跡であることが明らかとなっている。

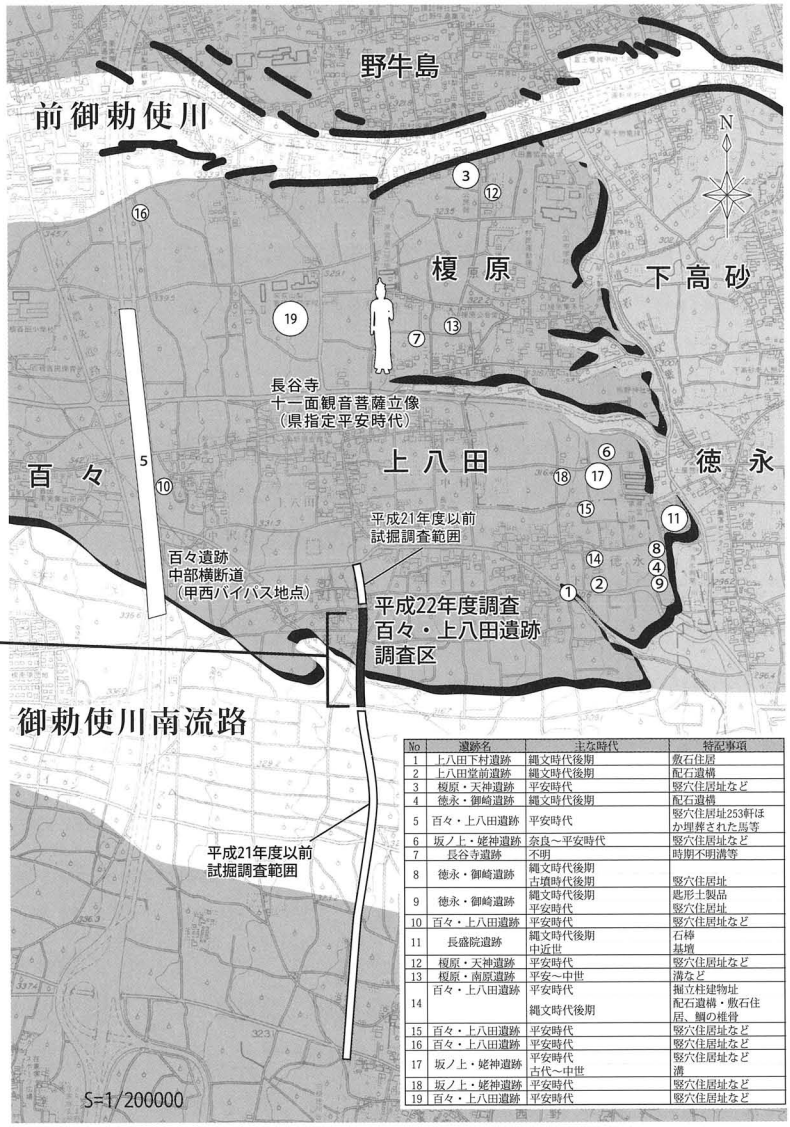
さらに、この調査では100頭を越すと推定される牛馬骨が発見され、中には馬が丁寧に埋葬された状態で発見されるなど注目を集めた。この地域には、高尾穂見神社の男神鏡像の銘文から、遅くとも中世には成立していたことが明らかとなる「八田牧（はっ

※ 番号は第3図にプロットした調査地点の番号に対応する。以下同様。

写真4　木造十一面観音立像
（長谷寺　平安時代）

写真5　男神鏡像
（高尾穂見神社　鎌倉時代）
天福元年（1233）の銘とともに、「八田御牧北鷹尾」とみえる





No	遺跡名	主な時代	特記事項
1	上八田下村遺跡	縄文時代後期	敷石住居
2	上八田堂前遺跡	縄文時代後期	配石遺構
3	榎原・天神遺跡	平安時代	竪穴住居址など
4	徳永・御崎遺跡	縄文時代後期	配石遺構
5	百々・上八田遺跡	平安時代	竪穴住居址253軒ほか埋葬された馬等
6	坂ノ上・姥神遺跡	奈良～平安時代	竪穴住居址など
7	長谷寺遺跡	不明	時期不明溝等
8	徳永・御崎遺跡	縄文時代後期 古墳時代後期	竪穴住居址
9	徳永・御崎遺跡	縄文時代後期 平安時代	匙形土製品 竪穴住居址
10	百々・上八田遺跡	平安時代	竪穴住居址など
11	長盛院遺跡	縄文時代後期 中近世	石棒 墓墳
12	榎原・天神遺跡	平安時代	竪穴住居址など
13	榎原・南原遺跡	平安～中世	溝など
14	百々・上八田遺跡	平安時代 縄文時代後期	掘立柱建物址 配石遺構・敷石住居、獣の埋骨
15	百々・上八田遺跡	平安時代	竪穴住居址など
16	百々・上八田遺跡	平安時代	竪穴住居址など
17	坂ノ上・姥神遺跡	平安時代 古代～中世	竪穴住居址など 溝
18	坂ノ上・姥神遺跡	平安時代	竪穴住居址など
19	百々・上八田遺跡	平安時代	竪穴住居址など

第３図　周辺の調査と調査区全体図

たのまき)」と呼称された「牧」が設けられていたことが知られるが、八田牧の先駆けとなるような施設の中核をなすような集落のあり方が注目された。

なおこのような、領域の平安時代の隆盛を示すように、領域の中心という象徴的な位置には、現在も長谷寺の木造十一面観音立像（11 世紀）が安置されている。

今回、発掘調査を行った範囲は、甲西バイパス地点の南東約 550 mに位置する。調査地点の標高は概ね 324 mを測り、現在本調査区との比高 3 m程の谷状の地形として確認できる古代の御勅使川、所謂御勅使川南流路に南面する。後述するように、今回の調査では、平安時代の集落が 9 世紀前半から半ばに出現し、少なくとも 10 世紀後半まで継続することが明らかとなった。検出された領域と遺構の時期に鑑みれば、このような本遺跡のあり方は、おおむね甲西バイパス地点と同様といえるが、御勅使川南流路は本遺跡が営まれた時期には、まさに御勅使川の本流であったことが指摘されており（今福 2004a）、本遺跡が同流路の存在を意識して選地されたことをうかがわせる。

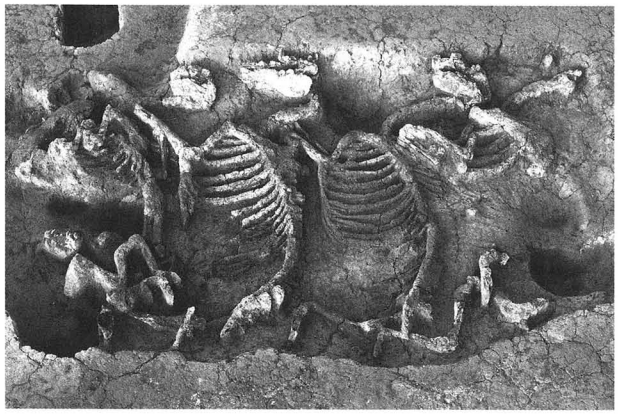


写真６　土坑から発見された４体の馬
（百々遺跡　甲西バイパス地点　平安時代）
山梨県埋蔵文化財センター（2002）

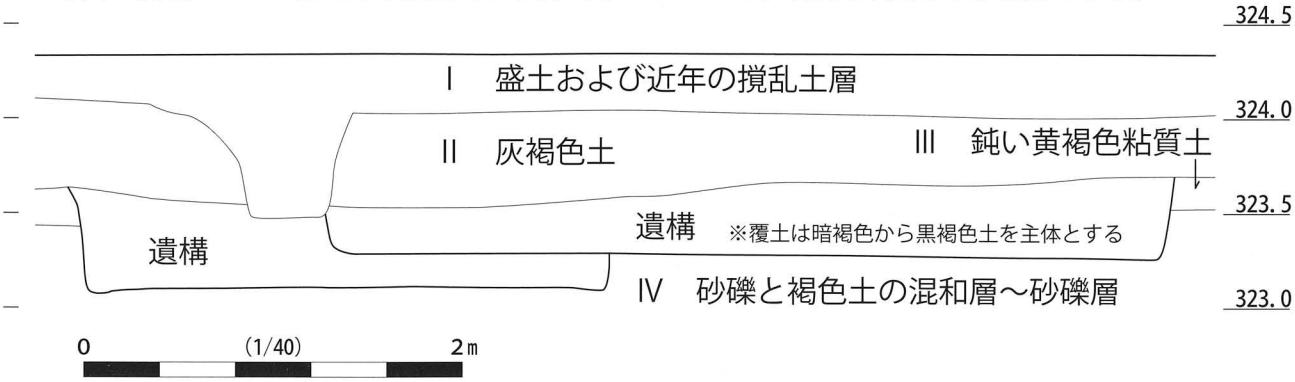
第２節　調査区の土層

今回の調査実施以前、遺跡の現況はブドウ、カキ、サクランボを栽培する果樹畑であった。

そのため、表土は、所によって耕土の入れ替えや客土が行なわれ、剪定した枝などを焼却するために穿たれた穴によって撹乱される。またブドウ畑では、設置したブドウ棚の支柱を固定するために地中深く埋設されたアンカーによる撹乱が多く見られた。

今回の調査区によって確認された基本層序は下図のとおりである。第Ⅰ層とした表土および近年の撹乱土層下に第Ⅱ層とした灰褐色土が堆積する。通常本遺跡周辺では、この直下に暗褐色～黒褐色を呈し、古代の遺物を包含する土層が確認できる場合が多いが、今回の調査区では一部を除き安定的な堆積が見られず、下に例示した部分のように全く確認できない個所も多くあった。ただし、今回検出された遺構覆土の主体は、基本的にこの黒褐色系の土層を出自とするものに占められる。

次に堆積する第Ⅲ層とした鈍い黄褐色粘質土層上面が今回の調査の遺構確認面となっている。本層下には第Ⅳ層とした砂礫と褐色土の混和層～砂礫層が堆積するが、第Ⅲ層の堆積も特に調査区４区南半から以南では不安定となり、この部分では第Ⅳ層上面が遺構確認面となっている。調査区では、南面する御勅使川の旧河道（御勅使川南流路）に向け５～１区へと順次標高を下げ、１層以南（＝旧河道）においては、現在も表層から砂礫層となる。



第４図　基本層序

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　竪穴住居址（ＳＩ）

ＳＩ０１　３区、x＝-38790.3、y＝-1838.6を中心に検出された。遺構の北西隅を撹乱により失うが、他の遺構とは切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－101°00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西3.74 m、南北3.80 mを測る。床面における規模は、東西3.36 m、南北3.58 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.25 m、床面標高は323.10 mを測る。竈は、住居址南東隅において１基確認され、規模は主軸方向0.77 m、横幅1.79 mを測る。覆土は自然堆積で３層に分けられる。遺物の総量は少ない。竈付近から検出した甕、羽釜のほか杯を図示した。今回の調査範囲で検出された中では、最も新しい様相を呈し、唯一10世紀後半代の年代が与えられる。

ＳＩ０２　４区、x＝-38764.2、y＝-1838.3を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－82°00′－Ｅにとり、大部分が調査区外にあるが、確認面での規模は東西0.88 m以上、南北3.12 mを測る。床面における規模は、東西0.62 m以上、南北2.99 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.20 m、床面標高は323.32 mを測る。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向0.78 m、横幅0.96 mを測る。また竈右側には浅い皿状のピット（P01）を有する。覆土の最下層は、竈の崩壊によって生じたと推察される火床由来の焼土を主体とした層が広範に堆積する。竈右脇P01から、甕２個体以上が集中して検出された。図示し得るような杯類は検出されなかった。

ＳＩ０３　４区、x＝-38751.0、y＝-1837.2を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－92°00′－Ｅにとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西2.00 m以上、南北3.26 mを測る。床面における規模は、東西1.68 m以上、南北3.00 m。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。確認面から床面までの深さは0.21 m、床面標高は323.31 mを測る。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向1.02 m、横幅1.14 mを測る。また竈右側には浅い皿状のピット（P01）を有し、全体に周溝が廻る。覆土は自然堆積で５層に分けられる。遺物の総量は少なく、破片資料が多い。

ＳＩ０４　４区、x＝-38770.9、y＝-1834.5を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－87°00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西2.90 m、南北3.28 mを測る。床面における規模は、東西2.87 m、南北3.24 m。確認面から床面までの深さは0.05 m、床面標高は323.33 mを測る。床面は地山の礫混層で平坦でなく、硬化面等も認められない。竈は、住居址南東隅付近において１基確認され、規模は主軸方向0.92 m、横幅1.52 mを測る。遺構の遺存状況が悪く、遺物は少ない。

ＳＩ０５　４区、x＝-38766.5、y＝-1833.6を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－103°30′－Ｅにとり、確認面での規模は東西3.13 m、南北2.64 mを測る。床面における規模は、東西2.97 m、南北2.44 m。確認面から床面までの深さは0.09 m、床面標高は323.32 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址南東隅付近において１基確認され、規模は主軸方向1.14 m、横幅1.36 mを測る。覆土は自然堆積で４層に分けられる。遺物の総量は少ない。

ＳＩ０６　４区、x＝-38715.2、y＝-1833.7を中心に検出された。SI13及びSK06に切られる。主軸をＮ－86°00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西2.92 m、南北2.97 m以上を測る。床面における規模は、東西2.77 m、南北2.69 m。確認面から床面までの深さは0.34 m、床面標高は323.22 mを測る。床面に貼床は認められないが、付近を中心に顕著な硬化面が認められる。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向1.05

m、横幅 1.26 mを測る。覆土は自然堆積を呈し、覆土上半には基本層の流入が看取される。竈火床から図示した甕が出土したほか、南側周壁沿いで須恵器杯２個体が検出された。

ＳＩ０７　４区、x = -38721.9、y = -1834.7 を中心に検出された。SI15 を切る。主軸をＮ－ 83° 00′－Ｅにとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西 2.60 m以上、南北 4.38 mを測る。床面における規模は、東西 2.10 m以上、南北 4.22 m。確認面から床面までの深さは 0.26 m、床面標高は 323.34 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向 1.43 m、横幅 1.15 mを測る。遺構の北東隅において不明瞭ながら周溝状の落ち込みを確認できる。また、竈左袖外側に、半円形の突出部が認められる。本址と切りあう土坑であった可能性も指摘できる。覆土は自然堆積で４層に分けられる。SI15 を切るため、覆土に本址よりやや古い様相の破片群が混入する。

ＳＩ０８　４区、x = -38727.6、y = -1833.5 を中心に検出された。SI09 に切られ、SI14 を切る。主軸をＮ－ 87° 00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西 4.99 m、南北 4.32 mを測る。床面における規模は、東西 4.46 m、南北 3.88 m。確認面から床面までの深さは 0.38 m、床面標高は 323.11 mを測る。床面に貼床は認められないが、竈周辺を中心に顕著な硬化面が認められる。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向 1.34 m、横幅 1.10 mを測る。竈右側に、浅い皿状のピット（P01）を有するほか、本址床面において、いくつかのピット（P02 ～ 04）を確認することができる。浅い周溝を南壁に沿って検出した。また、本址北壁付近で、一部被熱した床面が検出されている。なお、当地域の該期の竪穴住居址においては、竈右側（＝住居址南東隅）に浅い皿状のピットを伴うことが多いが、本址においては、このピット（P01）の西端にさらに２基の小穴を伴うことが特出される。遺構覆土は自然堆積で５層に分層できる。遺物は、竈右脇から住居址南壁沿って集中して検出された。多くは、出土状況写真に示したとおり、想定される所謂棚状遺構や壁外屋内空間から「転落遺棄」されたような状況であることが看取される。

ＳＩ０９　４区、x = -38729.5、y = -1835.3 を中心に検出された。SI08 及び SI14 を切り、SD04 に切られる。主軸をＮ－ 91° 00′－Ｅにとり、遺構西半が調査区外にあるが、確認面での規模は東西 2.50 m以上、南北 4.20 mを測る。床面における規模は、東西 2.44 m、南北 4.00 m。確認面から床面までの深さは 0.25 m、床面標高は 323.36 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向 1.12 m、横幅 1.40 mを測る。遺構覆土は自然堆積で３層に分けられる。遺構の遺存状況が悪いためか、遺物の総量は少ない。

ＳＩ１０　５区、x = -38700.3、y = -1828.7 を中心に検出された。検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。主軸をＮ－ 82° 30′－Ｅにとり、遺構の大部分が調査区外にあり、確認面での規模は東西 1.02 m以上、南北 3.60 mを測る。床面における規模は、東西 0.90 m以上、南北 3.23 m。確認面から床面までの深さは 0.35 m、床面標高は 323.12 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、調査区外にあるものと推察され検出されなかった。本址西壁から南壁に沿って不明瞭ながら周溝を検出した。覆土は自然堆積で５層に分けられる。主要な部分が調査区外にあるため杯１点、鉄製品１点を図示したに留まる。

ＳＩ１１　４区、x = -38741.9、y = -1834.1 を中心に検出された。SI12、SI16、SK04、SK05 を切る。主軸をＮ－ 3° 00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西 2.70 m、南北 2.60 mを測る。床面における規模は、東西 2.58 m、南北 2.50 m。確認面から床面までの深さは 0.09 m、床面標高は 323.36 mを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址北壁中央付近において１基確認され、規模は主軸方向 1.43 m、横幅 1.12 mを測る。遺物は竈付近を中心にまとまって検出される。

ＳＩ１２　４区、ｘ＝-38739.2、ｙ＝-1833.9を中心に検出された。SI11に切られ、SI16及びSK05を切る。主軸をＮ－91°00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西3.10ｍ、南北2.80ｍを測る。床面における規模は、東西2.99ｍ、南北2.74ｍ。確認面から床面までの深さは0.19ｍ、床面標高は323.28ｍを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址南東隅において１基確認され、規模は主軸方向0.78ｍ、横幅0.92ｍを測る。遺構覆土は自然堆積で３層に分けられる。遺物の総量は少なく、破片資料が主体となる。

ＳＩ１３　４区、ｘ＝-38714.6、ｙ＝-1834.9を中心に検出された。SI06を切る。主軸をＮ－86°00′－Ｅにとり、遺構の大部分が調査区外にあるが、確認面での規模は東西1.06ｍ以上、南北1.60ｍ以上を測る。床面における規模は、東西0.83ｍ以上、南北1.46ｍ以上。確認面から床面までの深さは0.14ｍ、床面標高は322.32ｍを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向0.72ｍ、横幅0.56ｍを測る。覆土は自然堆積で６層に分けられる。甕底部と１・２として示した杯が、本址南東隅付近から転落したような出土状況を呈す。

ＳＩ１４　４区、ｘ＝-38729.0、ｙ＝-1836.2を中心に検出された。SI08、SI09、SD04に切られる。主軸をＮ－92°00′－Ｅにとり、遺構の大部分が調査区外にあり、また他の遺構に切られ判然としないが、確認面での規模は東西1.24ｍ以上、南北2.88ｍを測る。床面における規模は、東西1.15ｍ以上、南北2.70ｍ。確認面から床面までの深さは0.15ｍ、床面標高は323.20ｍを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、他の遺構に切られるためか、確認し得なかったが、床面においてピット３基を検出した（P01～03）。

この内P01からは焼土の混和した粘質土とともに、土師器杯が複数破砕し、上部に径20㎝程の礫が乗せられた状態で検出されている。遺構覆土は自然堆積で２層に分けられる。P01出土の遺物２点を図示した。

ＳＩ１５　４区、ｘ＝-38723.7、ｙ＝-1834.4を中心に検出された。SI07に切られる。主軸をＮ－88°00′－Ｅにとり、遺構の一部が調査区外にあるが、確認面での規模は東西3.49ｍ以上、南北3.11ｍを測る。床面における規模は、東西3.38ｍ以上、南北2.94ｍ。確認面から床面までの深さは0.40ｍ、床面標高は323.12ｍを測る。床面に貼床は認められないが、竈周辺を中心に顕著な硬化面が認められる。竈は、住居址東壁中央付近において１基確認され、規模は主軸方向1.72ｍ、横幅1.20ｍを測る。竈の煙道は本址外に0.8ｍ程延びる。煙道の側壁には顕著に被熱の痕跡がみられるが、煙道の底面では被熱して土壌が赤変した状態はほとんど看取できない。また、煙道の先には、本址竈に伴うと推察される径0.25ｍ、深さ0.06ｍ程の規模で、覆土に焼土、炭化物を含有するピットが１基検出される。このような煙道と浅いピットの関係は、平成16年に調査が実施された本遺跡の別地点において検出事例がある（南アルプス市教育委員会2005）。周溝は調査区南壁に沿って一部確認された。また、竈の右側には、棚状の施設を確認することができる。竈左側については、半円形のプランを有するやはり棚状の施設が確認できるが、こちらについては、SI07のケース同様、本址と切りあった土坑であった可能性も指摘できる。遺構覆土は自然堆積で８層に分けられる。遺物は竈周辺において集中して検出される。今回の調査範囲で検出された中では、もっとも古い様相を呈する遺構のひとつであり、９世紀前半から中ばの年代が与えられる。

ＳＩ１６　４区、ｘ＝-38741.30、ｙ＝-1830.90を中心に検出された。SI11及びSI12に切られる。主軸をＮ－89°00′－Ｅにとり、確認面での規模は東西2.42ｍ以上、南北2.99ｍを測る。床面における規模は、東西2.38ｍ以上、南北2.89ｍ。確認面から床面までの深さは0.18ｍ、床面標高は323.26ｍを測る。床面に貼床や顕著な硬化面は認められない。竈は、住居址東壁南寄りにおいて１基確認され、規模は主軸方向1.40ｍ、横幅0.74ｍを測る。竈の右袖脇には、解体された竈の構築材と推察される礫が集積される。また竈左袖外側におい

て長径 0.65 m、短径 0.79 m、深さ 0.13 m程の楕円形のピット（P01）を1基検出した。遺構の遺存状態は必ずしもよくないが、出土状況写真に示したとおり、竈周辺から多くの遺物が出土した。

第2節　溝（SD）

SD01　1区南端付近、x=-38850.6、y=-1839.1 から x=-38888.0、y=-1845.1 にかけて検出された。検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、N－78°30′－W をとり、確認された規模は長さ 6.20 m、幅 0.39 m、深さ 0.17 mで、最深部の底面標高は 322.74 mを測る。断面U字状を呈し、覆土は砂礫を多く含む暗褐色粘質土に占められる。平安時代の土師器片が検出されたが小片のため図示し得なかった。

SD02　1区南端付近、x=-38889.3、y=-1839.2 を中心に検出された。検出された範囲では、他の遺構と切り合わない。主軸は、ほぼ東西方向をとり、確認された規模は長さ 4.20 m、幅 2.59 m、深さ 0.30 mで、最深部の底面標高は 323.35 mを測る。断面は浅いU字状を呈し、覆土は黒褐色粘質土を主体として2層に分けられる。遺物は検出されなかった。

SD03　1区調査区西壁に沿って、x=-38853.8、y=-1845.9 から x=-38872.8、y=-1845.9 かけて検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、検出された範囲ではほぼ南北方向をとるものと推察され、確認された規模は長さ 18.76 m、幅 1.45 m以上、深さ 0.80 m程で、最深部の底面標高は 322.50 mを測る。覆土は、遺構下半は水成堆積と見られる砂礫やシルトに占められ、上半は砂礫を含む黒褐色土に占められる。底面および側壁は、水流による侵食を受けたことが強く看取され、一部オーバーハングしている部分等が確認される。遺物は、10世紀前半を主体とする土師器、須恵器片が主に覆土上半から検出されたが、小片のため図示し得なかった。

SD04　4区中央付近、x=-38730.4、y=-1834.9 から x=-38734.7、y=-1831.1 にかけて検出され、SI09 を切り、SK11・15・16・18 に切られ、屈曲しながら調査区を横切る。確認された幅は 0.32 m、深さ 0.07 mで、最深部の底面標高は 323.48 mを測る。遺物は検出されなかった。

SD05　4区中央付近、x=-38735.2、y=-1830.9 を中心に検出された。検出された範囲では他の遺構と切り合わない。主軸は、検出された範囲ではほぼ東西方向をとるものと推察され、確認された規模は長さ 0.88 m、幅 0.42 m、深さ 0.13 mで、最深部の底面標高は 323.36 mを測る。遺物は検出されなかった。

第3節　土　坑（SK）

SK01　1区、x＝-3886.6、y＝-1843.0 を中心に検出された。切り合い無く単独で存在する。形状は不整形を呈し、検出された規模は東西 0.90 m、南北 2.29 m。確認面からの深さは 0.09 m、底面標高は 322.81 mを測る。断面形は不整な皿状の落ち込みとして検出される。底面に顕著な被熱の痕跡は認められないが、2層に分けられる覆土には焼土を含む。

SK02　4区、x＝-38733.1、y＝-1837.3 を中心に検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。形状は方形乃至長方形を呈するとみられ、検出された規模は東西 1.15 m以上、南北 1.88 mを測る。底面は平坦で、硬化面等は見られない。確認面からの深さは 0.27 m、底面標高は 323.35 mを測る。

SK03　4区、x＝-38718.1、y＝-1830.6 を中心に検出された。遺構の一部が調査区外にあるものと推察されるが、検出された範囲では切り合い無く単独で存在する。不整形を呈し、検出された規模は東西 2.99 m以上、南北 2.21 mを測る。確認面からの深さは 0.29 m、底面標高は 323.27 mを測る。断面形は不整な皿状の落ち込みとして検出される。底面に顕著な被熱の痕跡は認められないが、4層に分けられる覆土には焼土、炭化物を含み、特に遺構東半では、底面に炭化物が層を成して検出された。

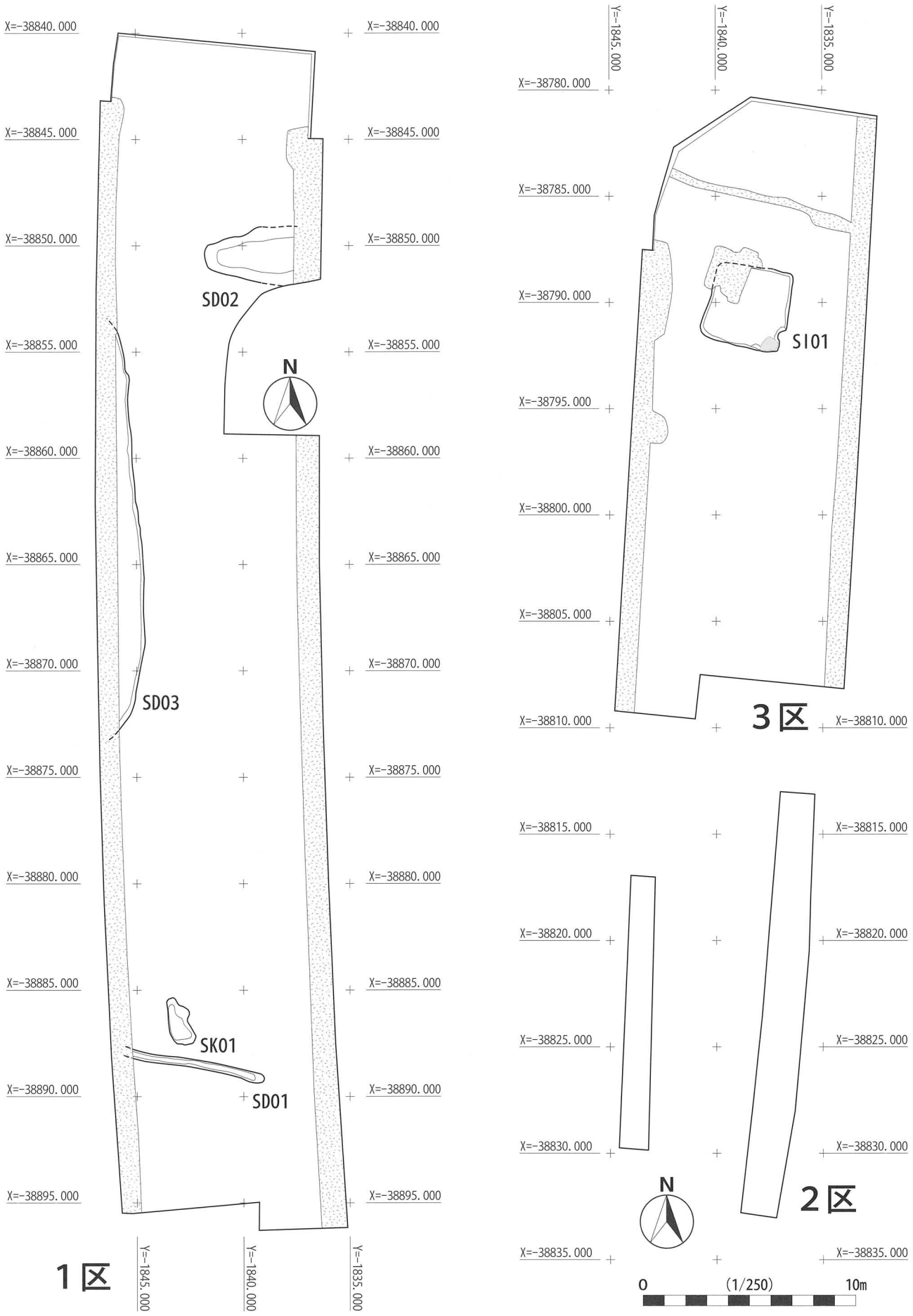
ＳＫ０４　４区、x = -38744.0、y = -1835.3 を中心に検出された。遺構の一部が調査区外にあり、SK05 を切り SI11 に切られる。形状は長方形を呈するものと推察され、検出された規模は東西 4.00 m以上、南北 2.21 mを測る。確認面からの深さは 0.20 m、底面標高は 323.20 mを測る。底面は北半においてはほぼ平坦、南半においては南に向かって傾斜する。硬化面等は認められない。

ＳＫ０５　４区、x = -38740.7、y = -1836.9 を中心に検出された。遺構の大部分が調査区外にあるものと推察され、SK04・SI11・SI12 に切られる。形状は方形乃至長方形を呈するものと推察され、検出された規模は東西 1.55 m以上、南北 2.85 m以上を測る。確認面からの深さは 0.08 m、底面標高は 323.35 mを測る。底面は平坦で、硬化面等は見られない。

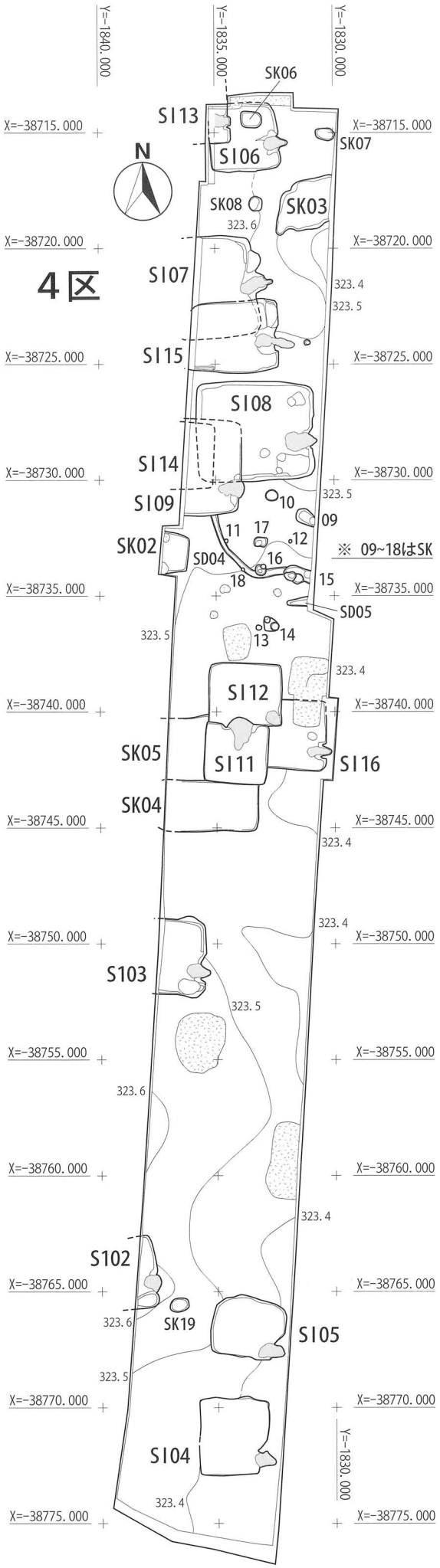
その他の土坑　検出されたその他の土坑の概要は以下の表のとおり。

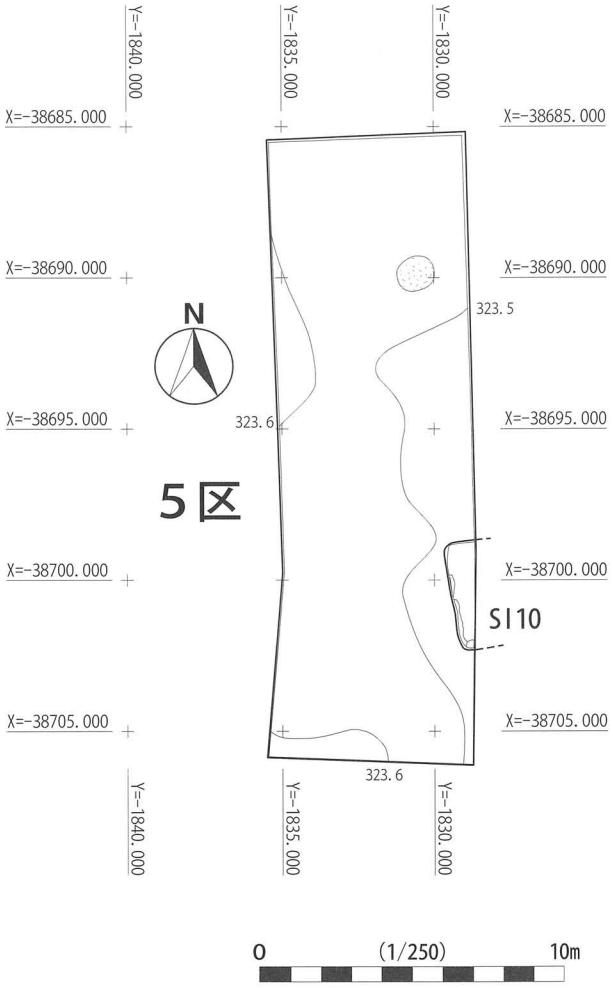
遺構名	位　置	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	底面標高	切り合い	遺　　物
SK01	1 区	不整形	2.29	0.90	0.09	322.81	なし	土師器片
SK02	4 区	長方形？	1.15 以上	1.88	0.27	323.35	なし	土師器・須恵器
SK03	4 区	不整形	2.99 以上	2.16	0.29	323.27	なし	土師器
SK04	4 区	長方形？	4.00 以上	2.21	0.20	323.20	SI11 に切られ、SK05 を切る	土師器・須恵器 鉄製品
SK05	4 区	長方形？	1.55 以上	2.85 以上	0.08	323.34	SI11、SI12、SK04 に切られる	土師器
SK06	4 区	楕円形	0.88	0.69	0.47	323.08	SI06 を切る	鉄滓
SK07	4 区	楕円形	0.82	0.54	0.10	323.46	なし	なし
SK08	4 区	楕円形	0.64	0.56	0.57	323.06	なし	土師器・須恵器片
SK09	4 区	楕円形	0.88 以上	0.64	0.53	322.99	なし	土師器片
SK10	4 区	円形	0.52	0.49	0.26	323.25	なし	土師器片
SK11	4 区	円形	0.16	0.17	0.21	323.31	SD04 を切る	土師器片
SK12	4 区	円形	0.12	0.11	0.02	323.54	なし	なし
SK13	4 区	円形	0.23	0.21	0.04	323.35	なし	なし
SK14	4 区	不整円形	0.75	0.60	0.42	323.00	なし	土師器片
SK15	4 区	楕円形	1.12 以上	0.72	0.33	323.16	SD04 を切る	土師器片
SK16	4 区	円形	0.46	0.45	0.30	323.20	SD04 を切る	土師器片
SK17	4 区	楕円形	0.56	0.40	0.49	323.01	なし	土師器片
SK18	4 区	円形	0.14	0.13	0.06	323.43	SD04 を切る	なし
SK19	4 区	楕円形	0.83	0.59	0.10	323.44	なし	なし

第１表　土坑計測表

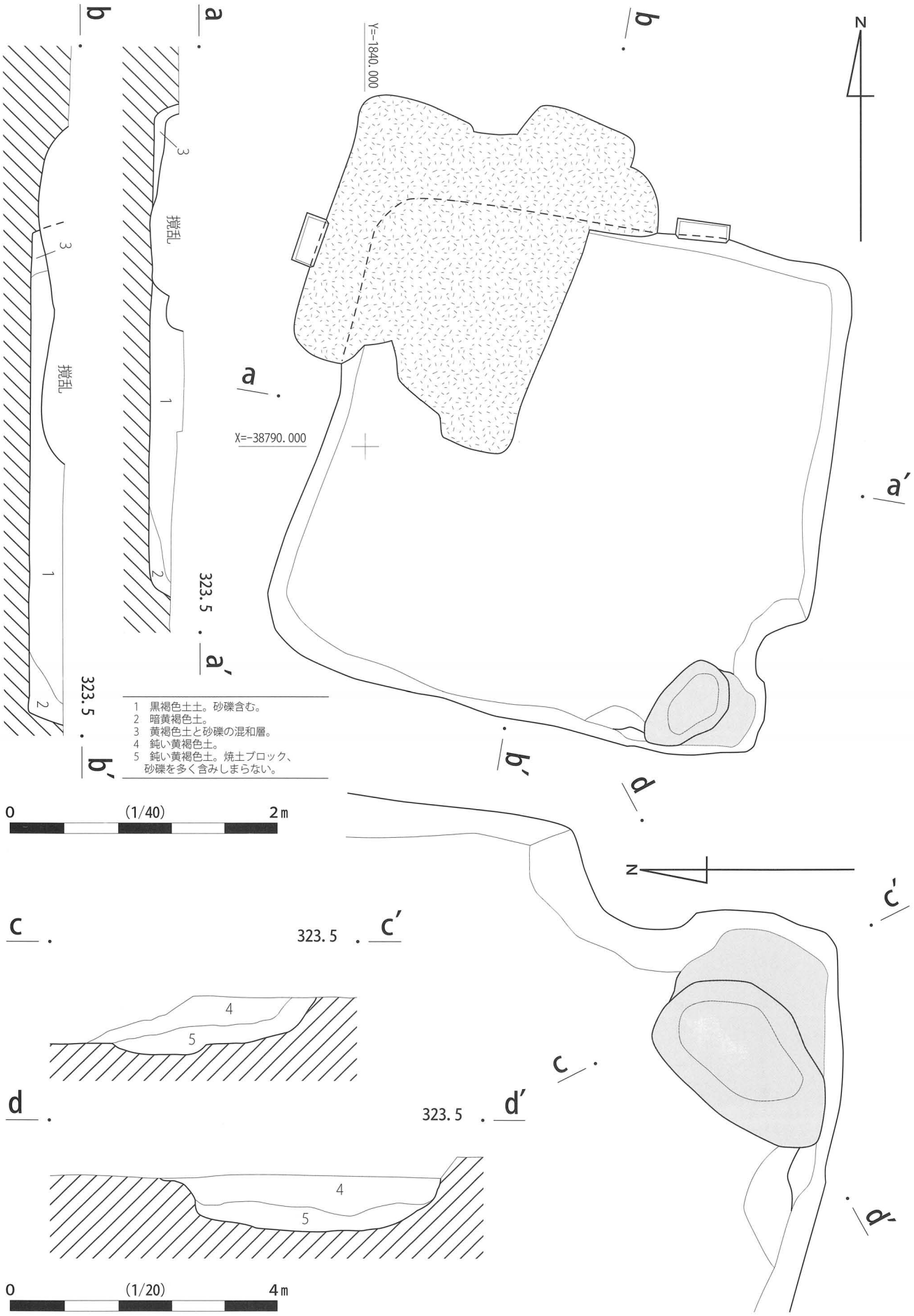


第５図　調査区１区・２区・３区遺構配置図

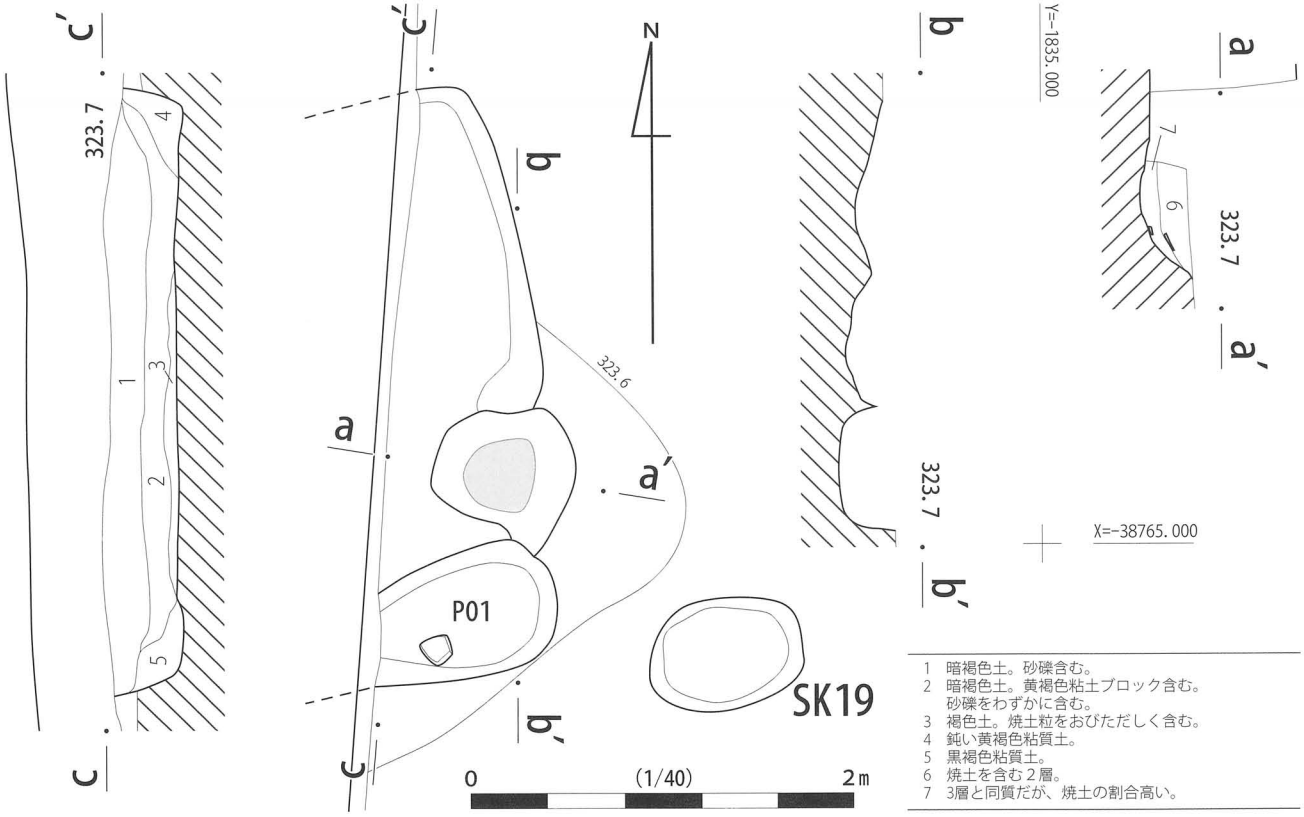




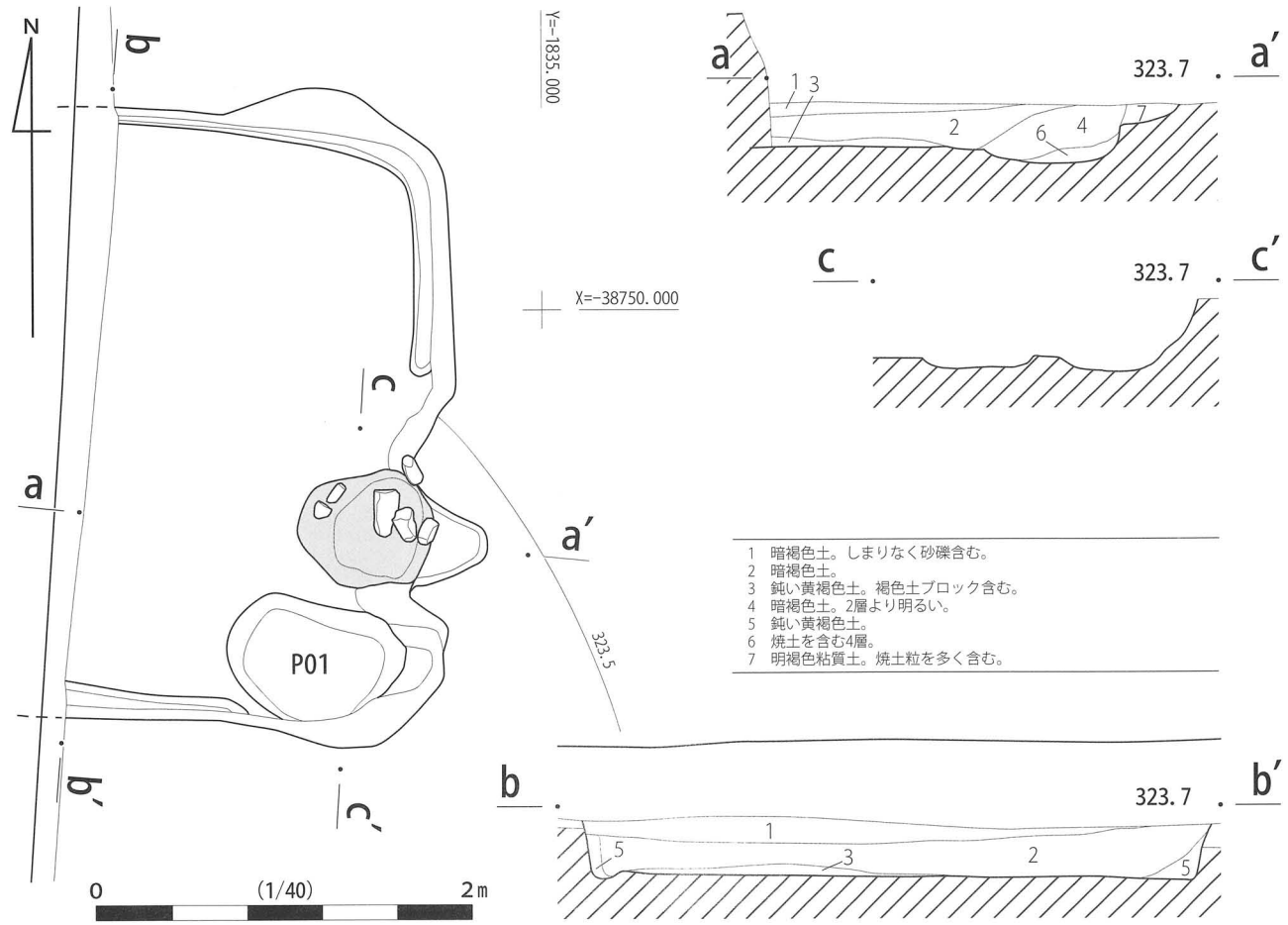
第６図　調査区４区・５区遺構配置図


N
Y=-1840.000
X=-38790.000
a
a′
b
b′
c
c′
d
d′
323.5
撹乱
1 黒褐色土土。砂礫含む。
2 暗黄褐色土。
3 黄褐色土と砂礫の混和層。
4 鈍い黄褐色土。
5 鈍い黄褐色土。焼土ブロック、砂礫を多く含みしまらない。
0 (1/40) 2m
0 (1/20) 4m

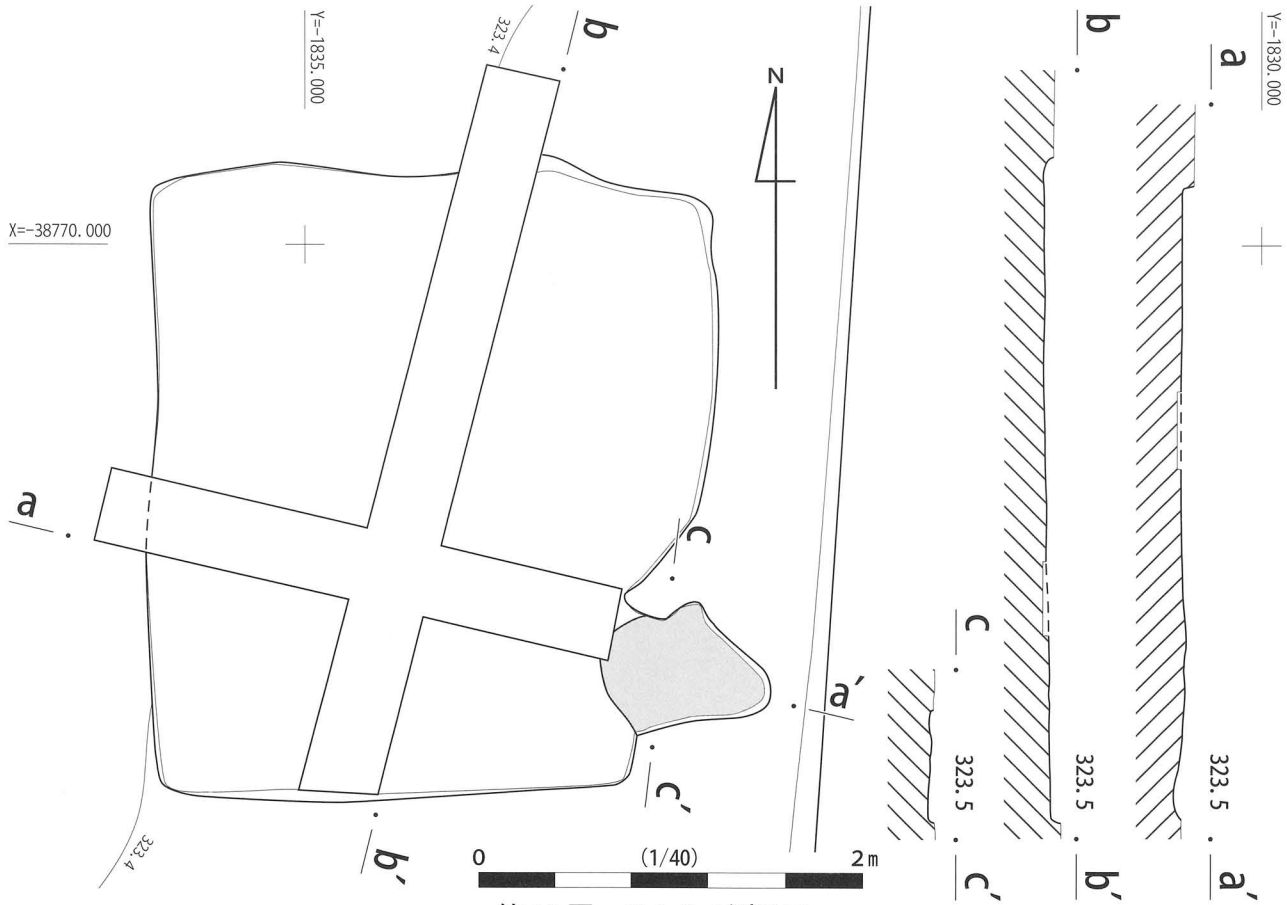
第7図　ＳＩ０１測量図



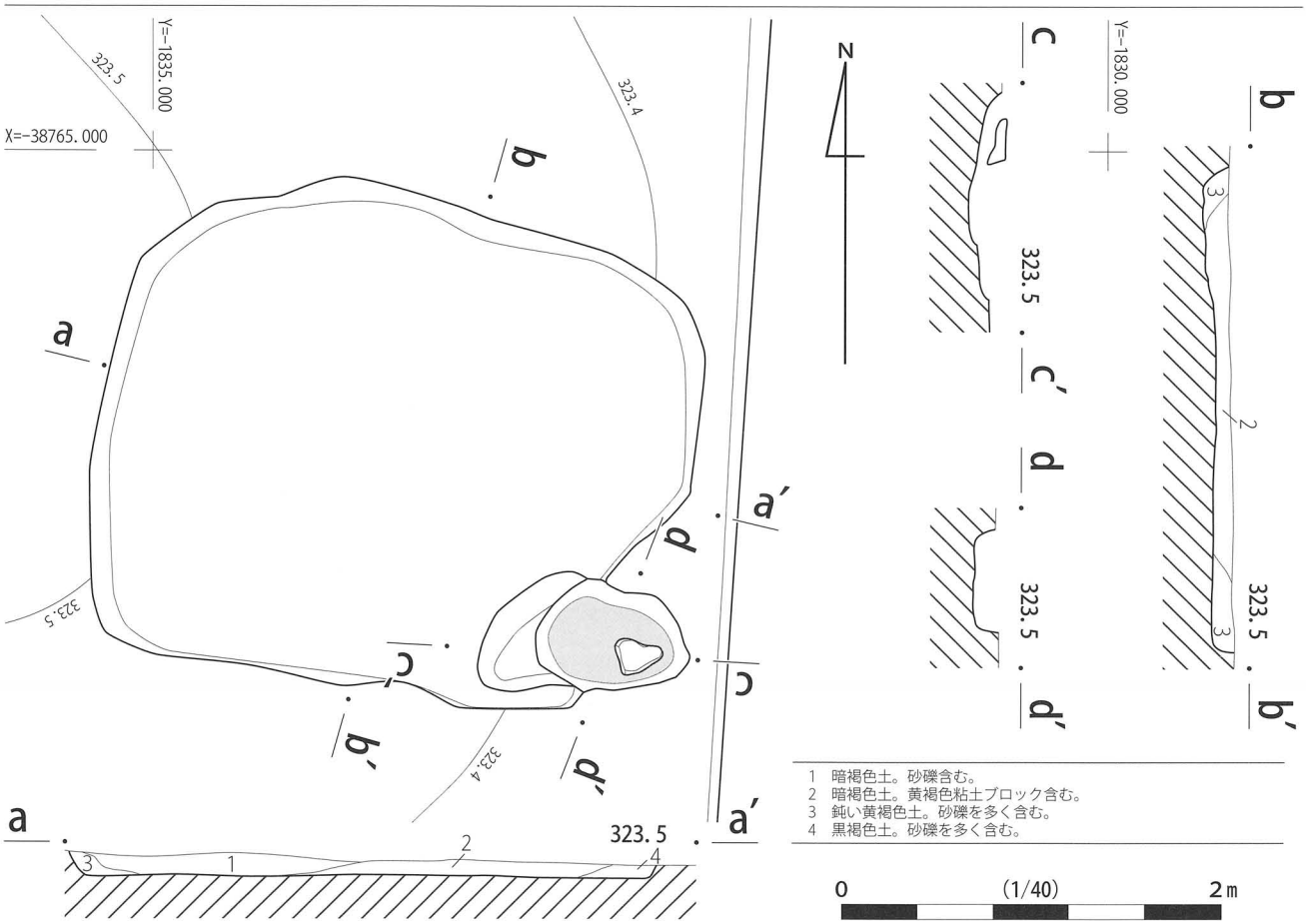
第８図　ＳＩ０２・ＳＫ１９測量図



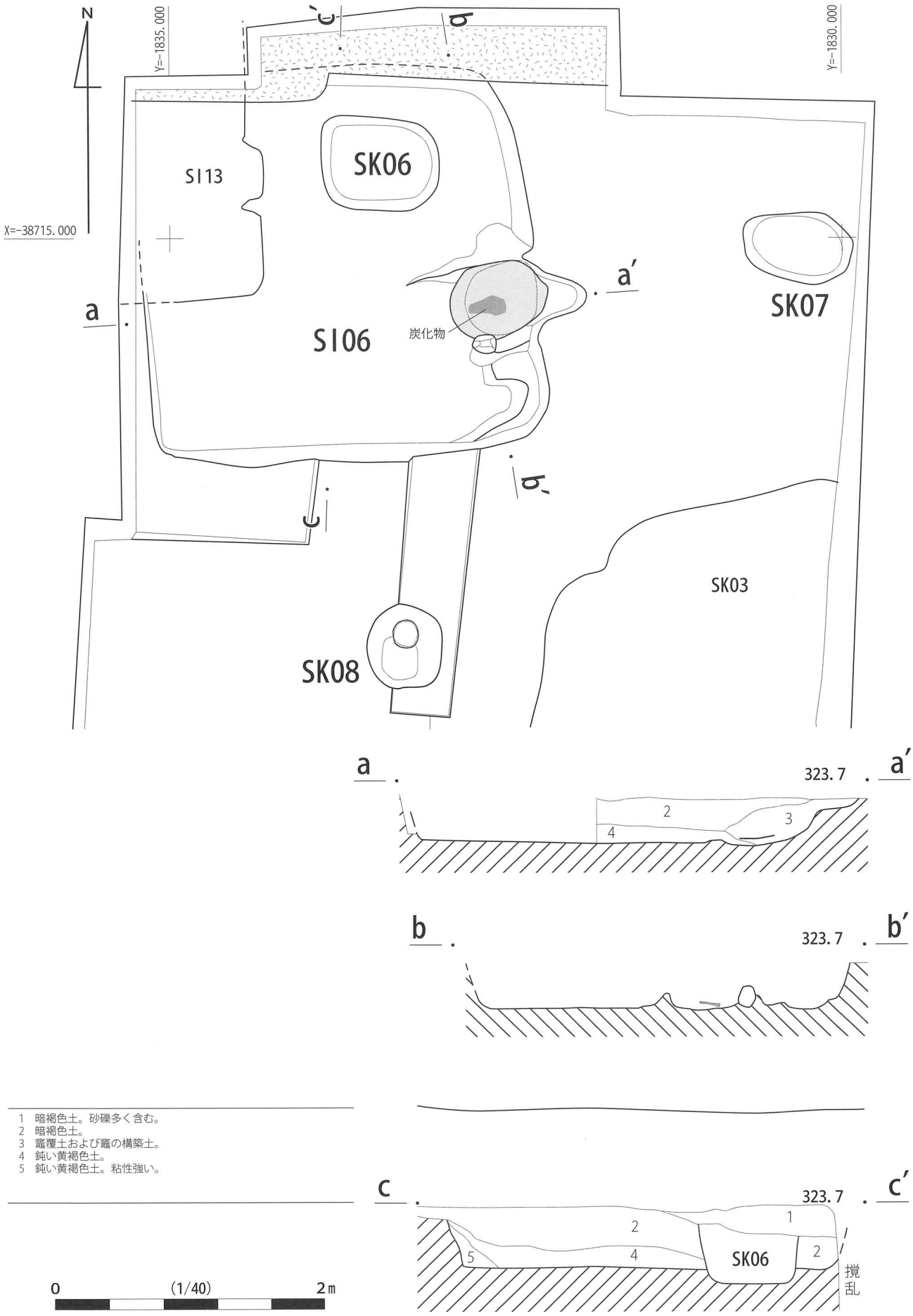
第９図　ＳＩ０３測量図



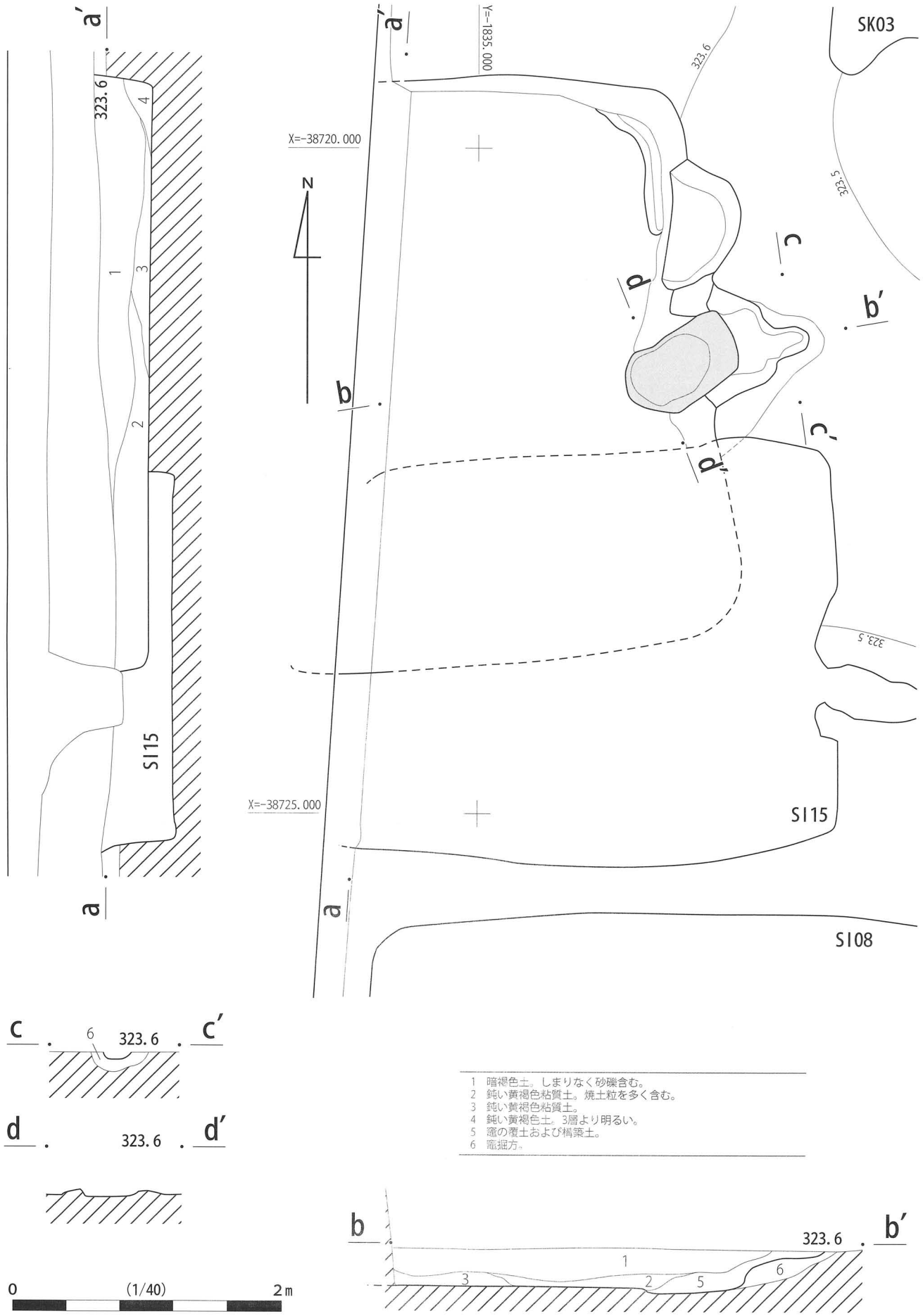
第10図　ＳＩ０４測量図



第11図　ＳＩ０５測量図

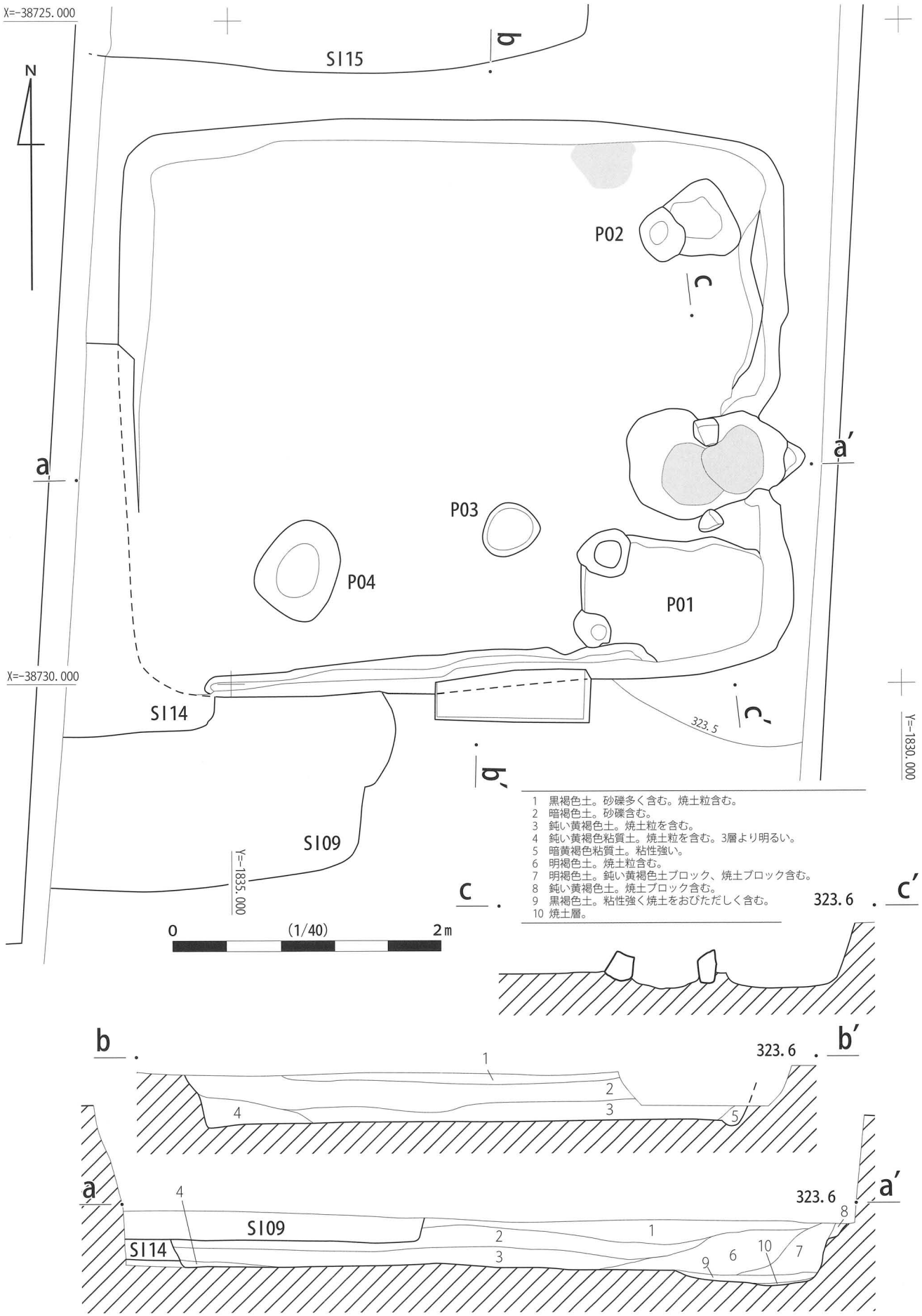


第12図　SI06・SK06・SK07・SK08測量図

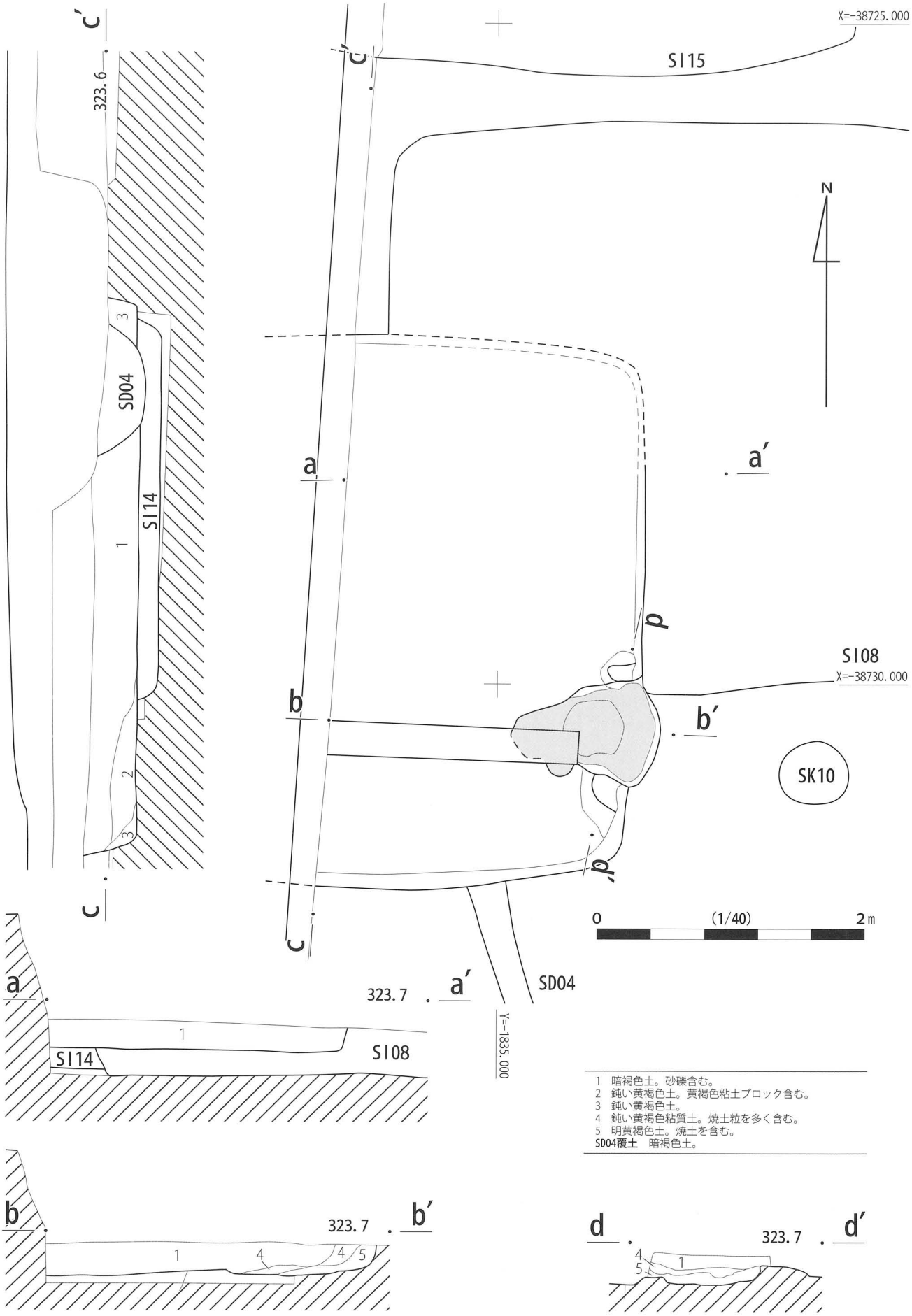


1 暗褐色土。しまりなく砂礫含む。
2 鈍い黄褐色粘質土。焼土粒を多く含む。
3 鈍い黄褐色粘質土。
4 鈍い黄褐色土。3層より明るい。
5 竈の覆土および構築土。
6 竈掘方。

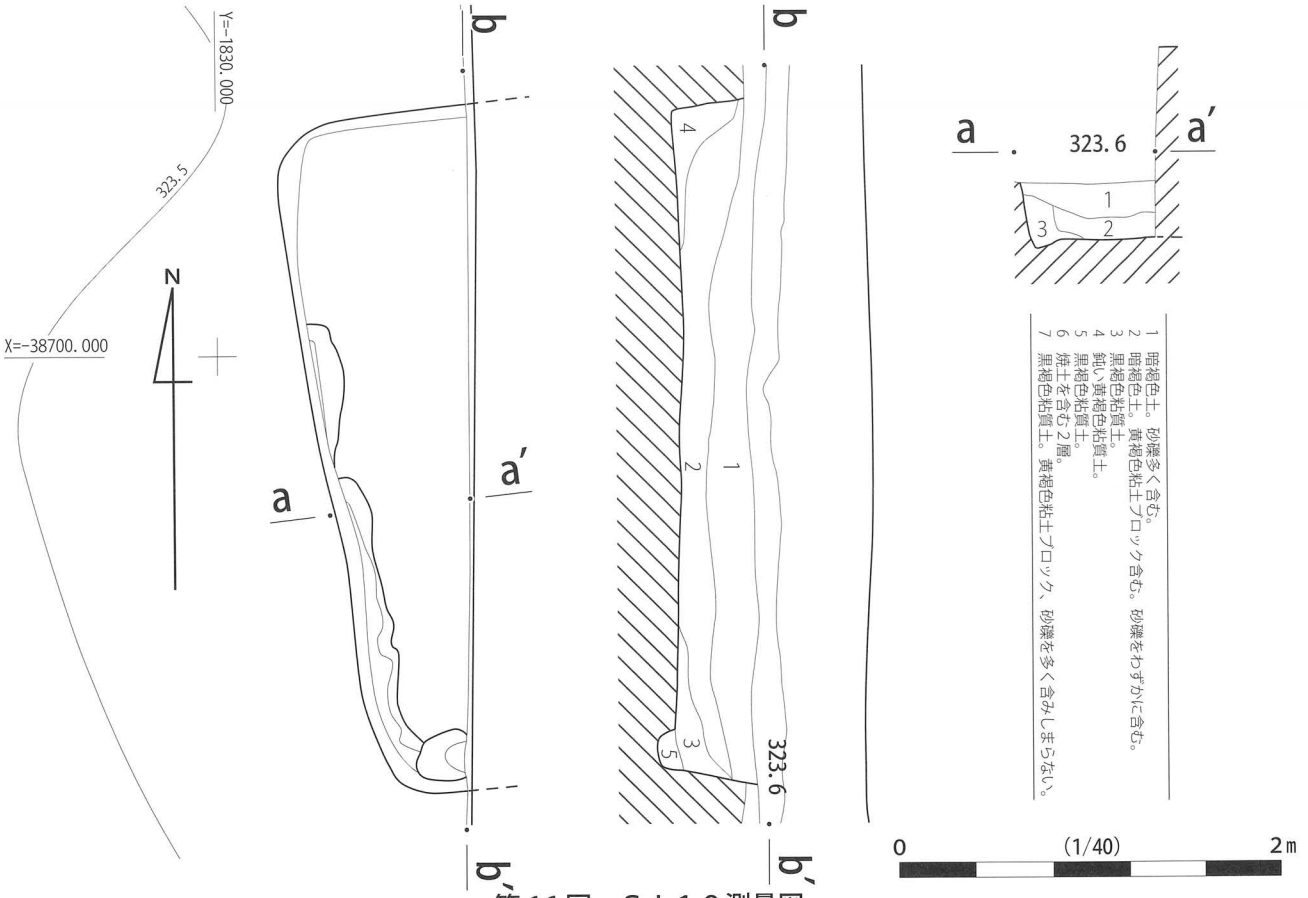
第13図　ＳＩ０７測量図



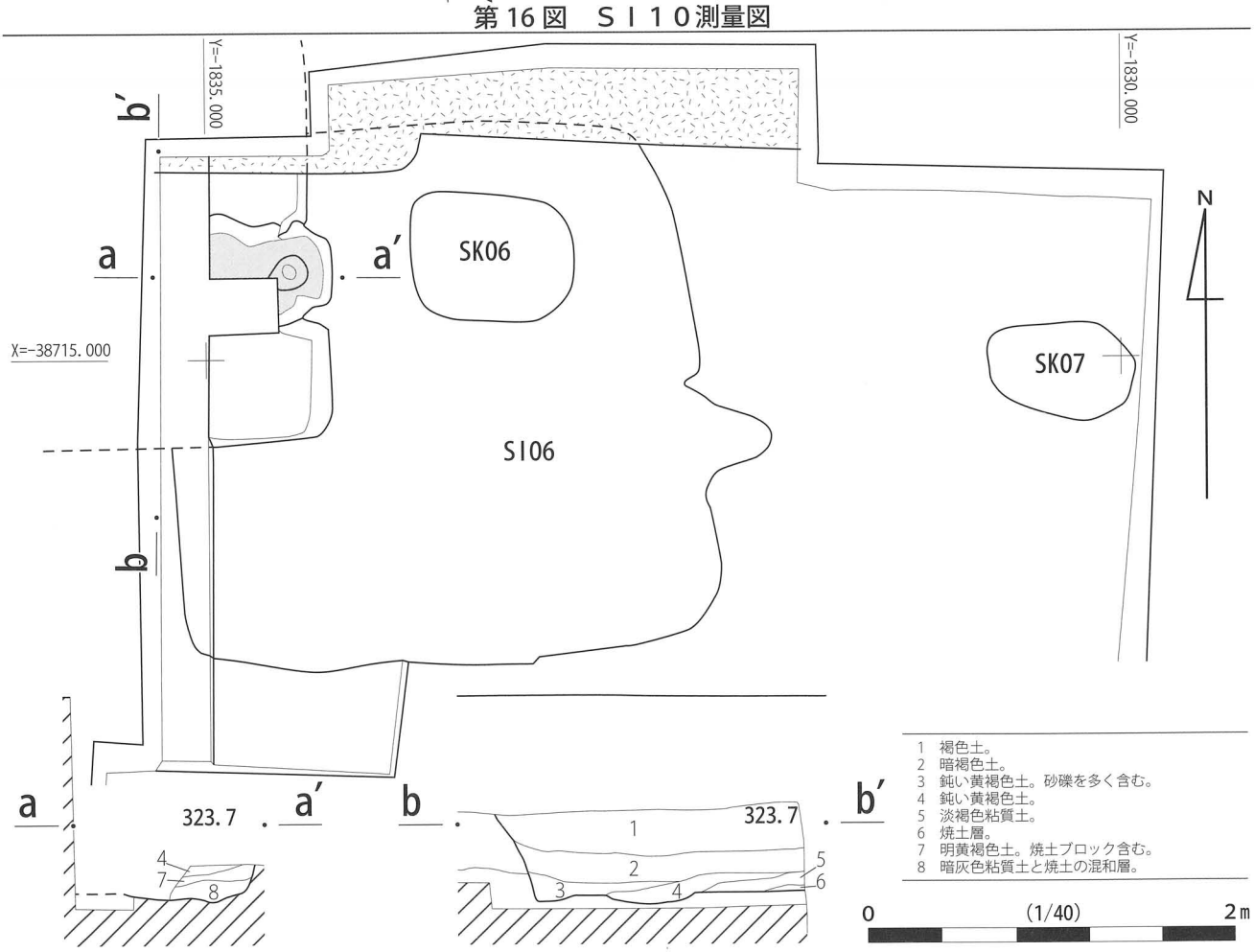
第14図　ＳＩ０８測量図



第15図 S I 0 9測量図

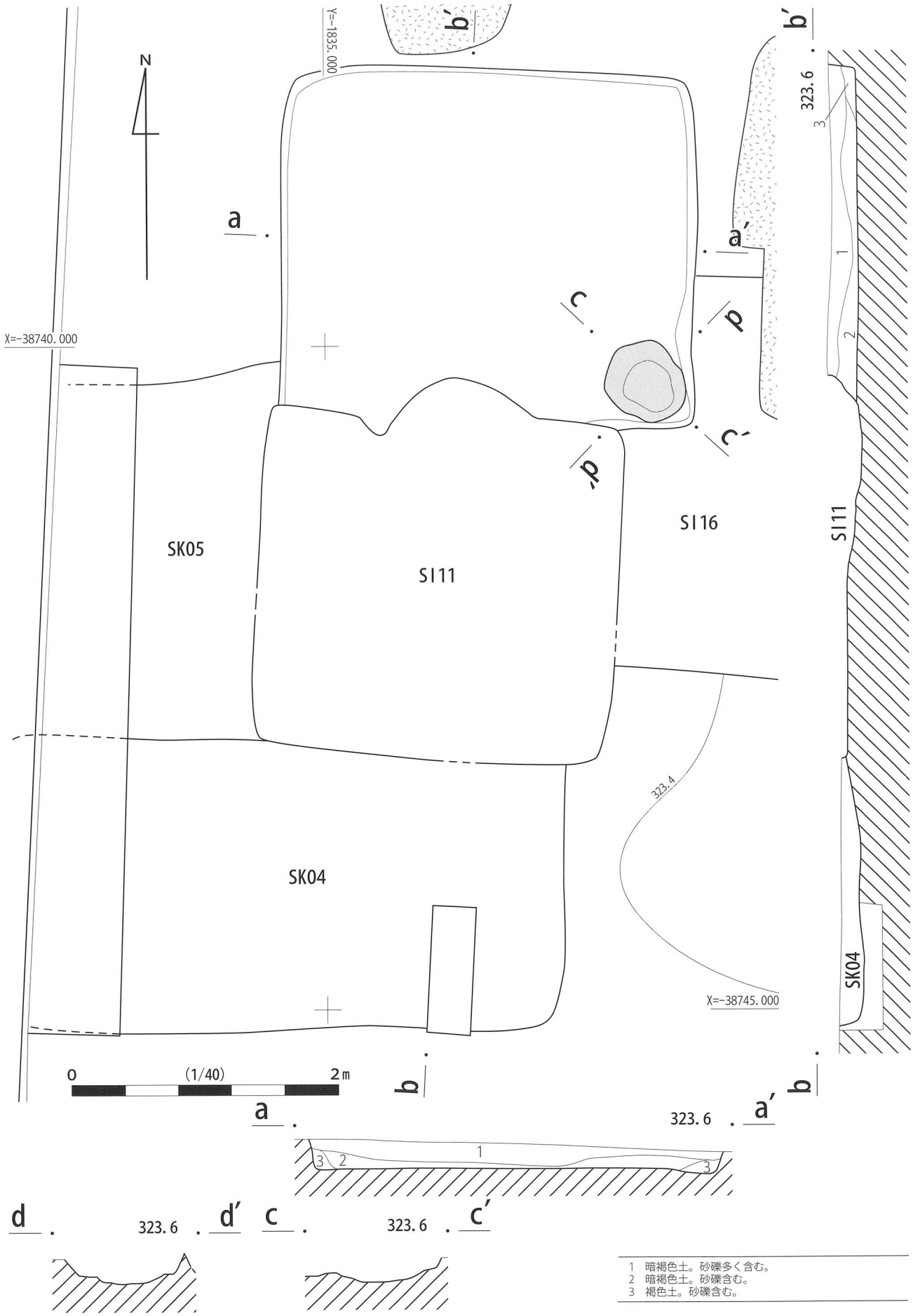


第16図　S110測量図



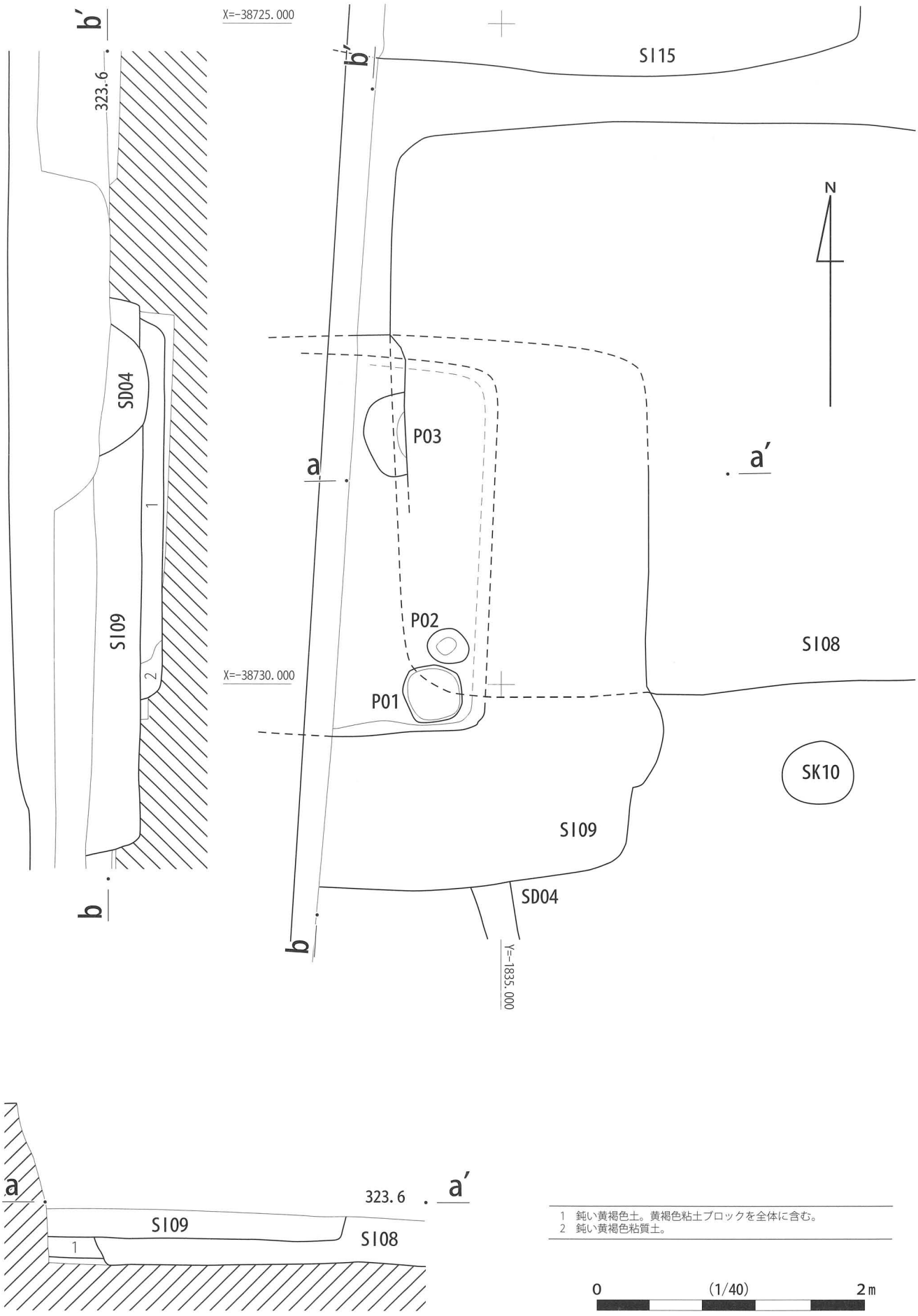
第17図　S113測量図

第18図　ＳＩ１１１測量図

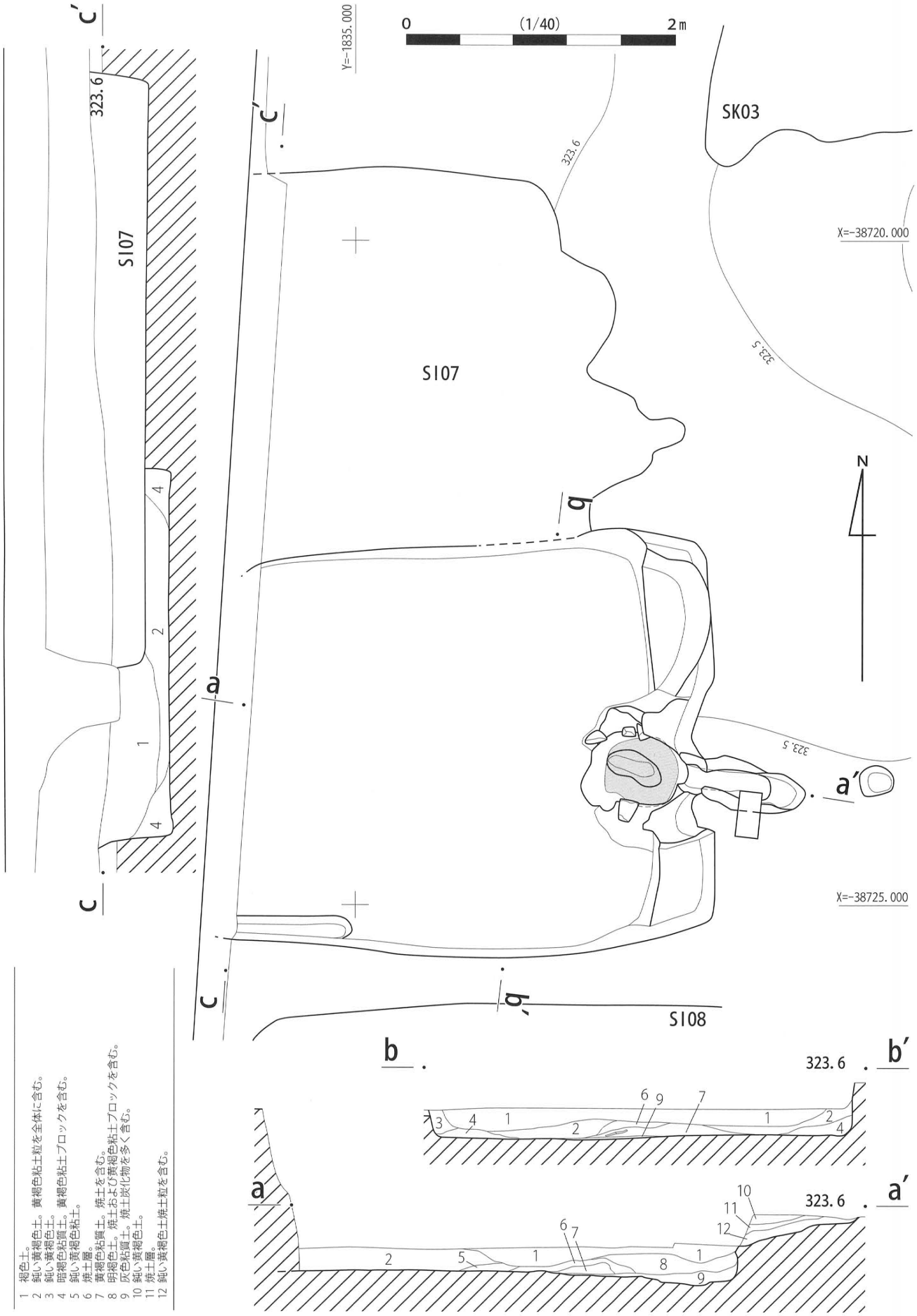


1 暗褐色土。砂礫多く含む。
2 暗褐色土。砂礫含む。
3 褐色土。砂礫含む。

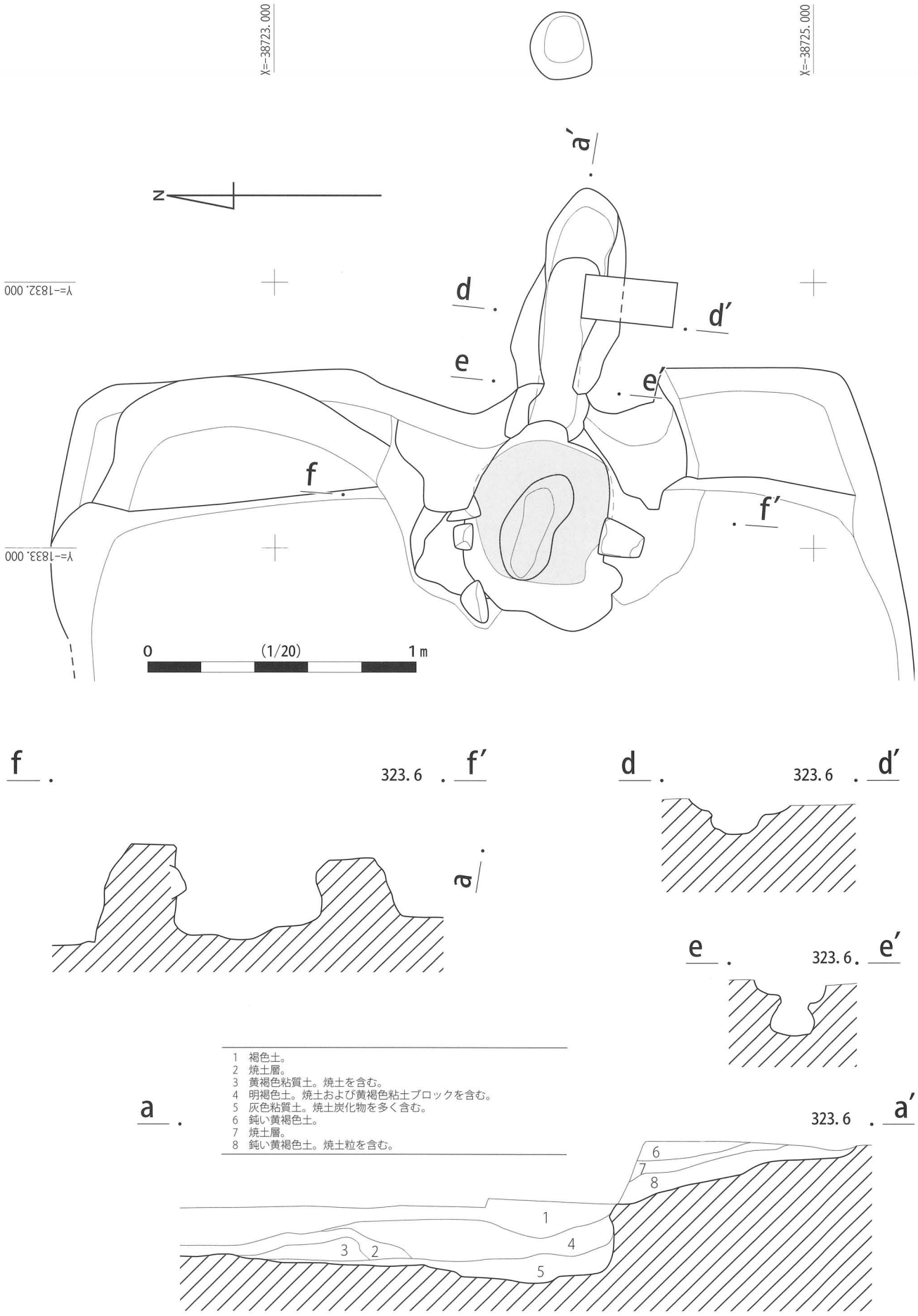
第19図　ＳＩ１２測量図



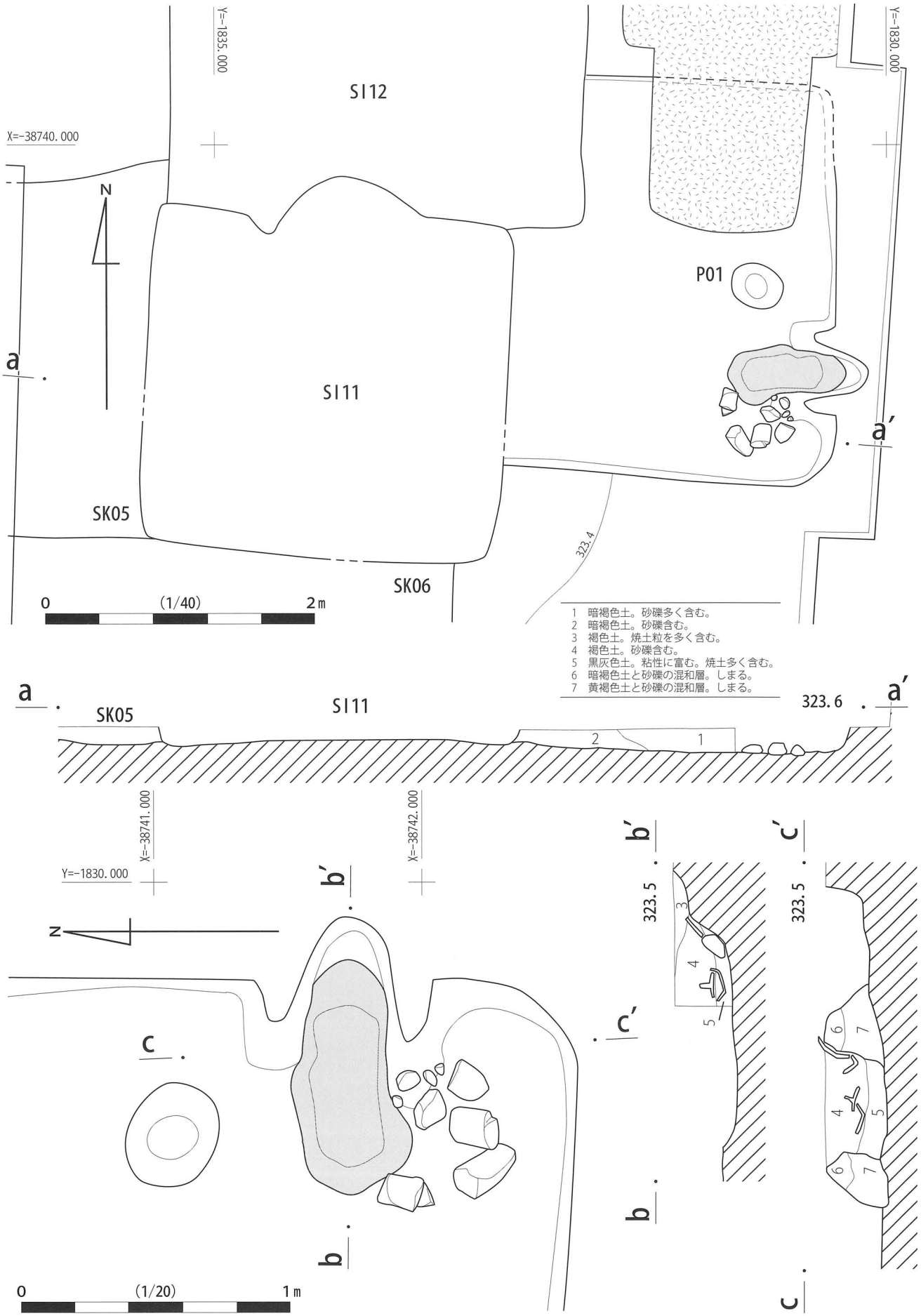
第20図　ＳＩ１４測量図



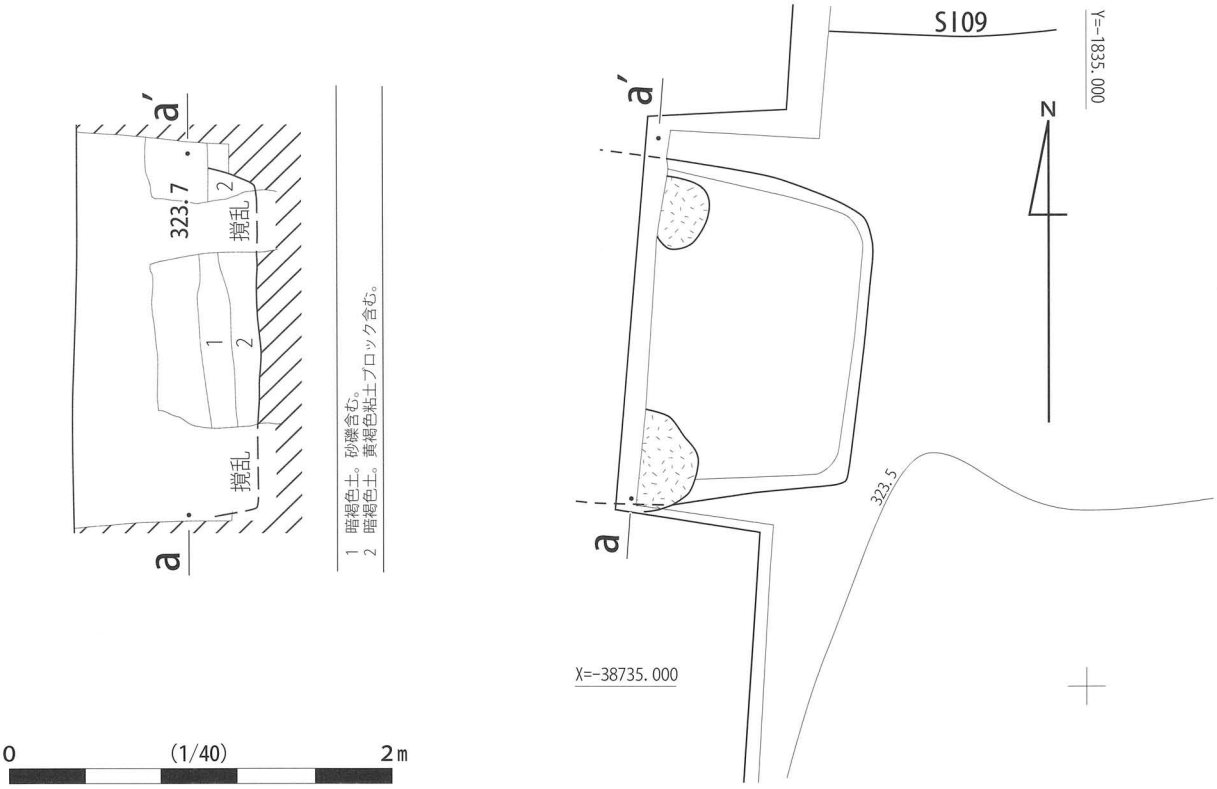
第21図　S I 1 5測量図（1）



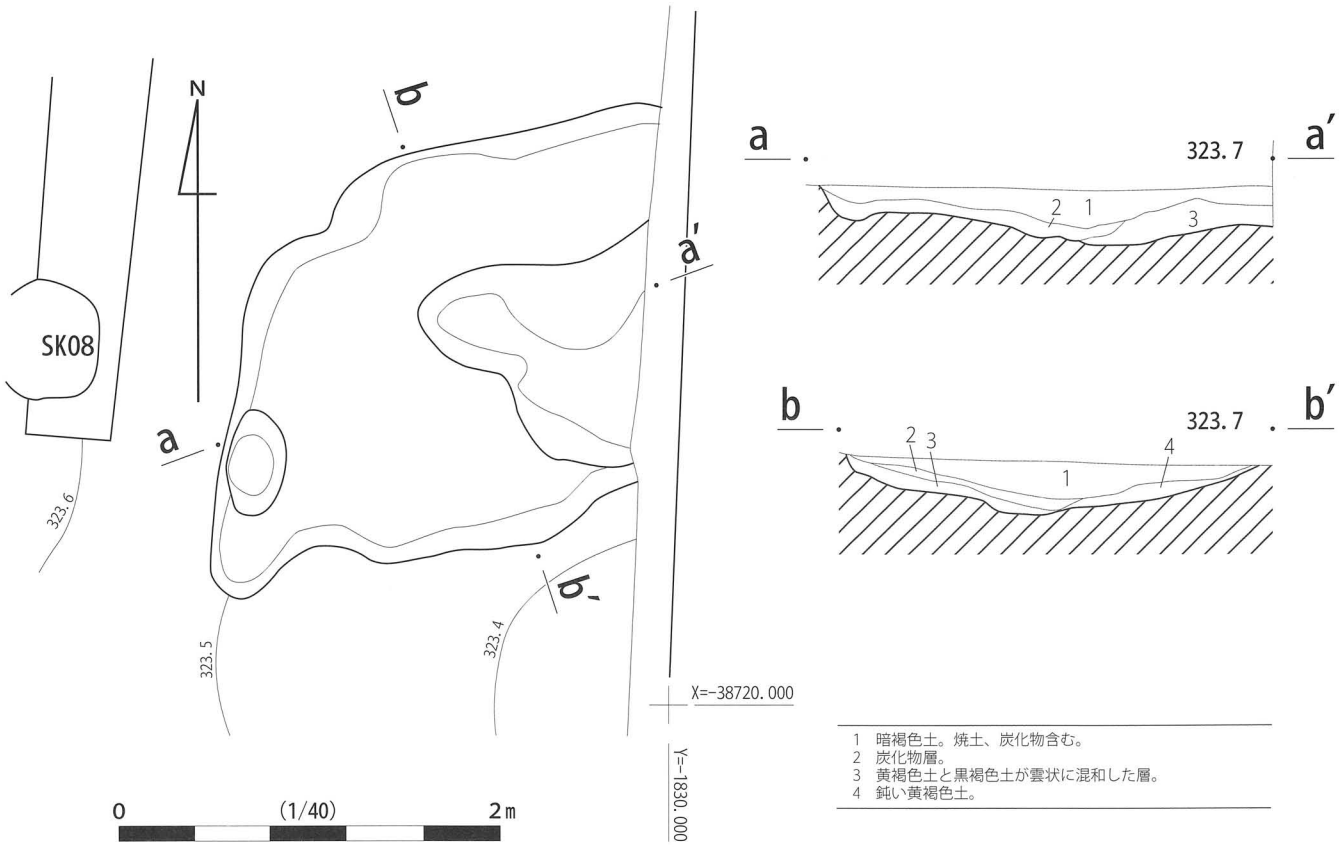
第22図　ＳＩ１５測量図（２）



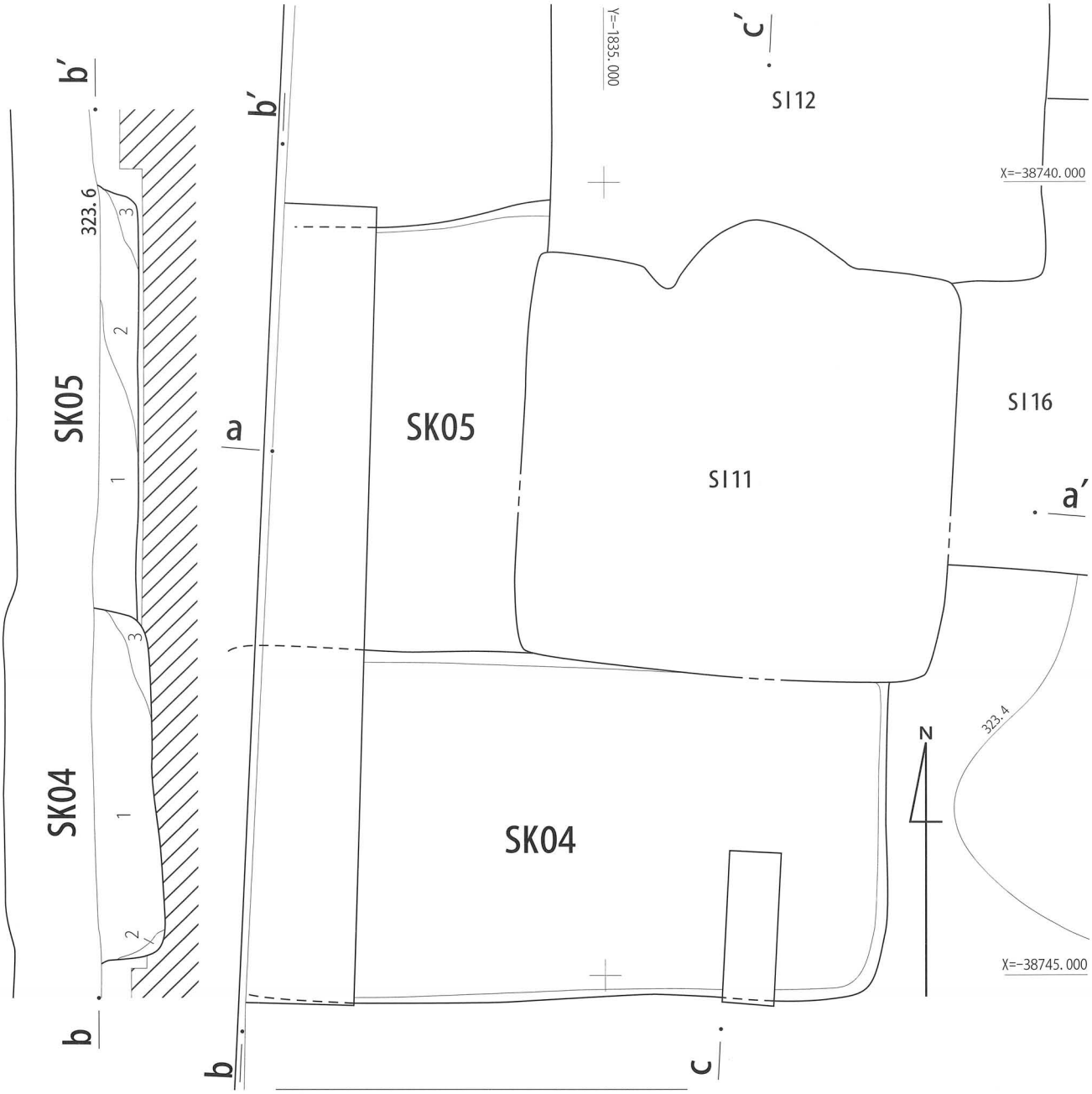
第23図　ＳＩ１６測量図



第24図　ＳＫ０２測量図



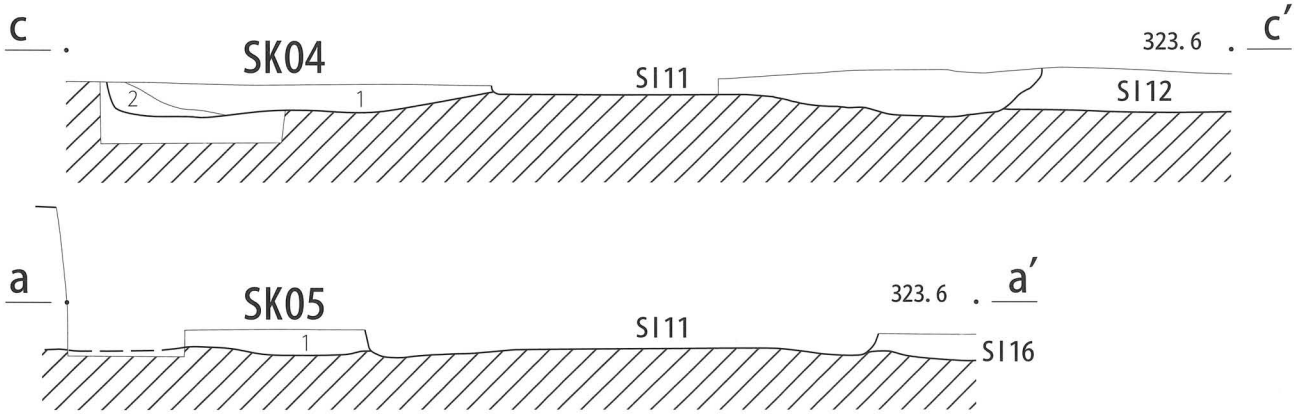
第25図　ＳＫ03測量図



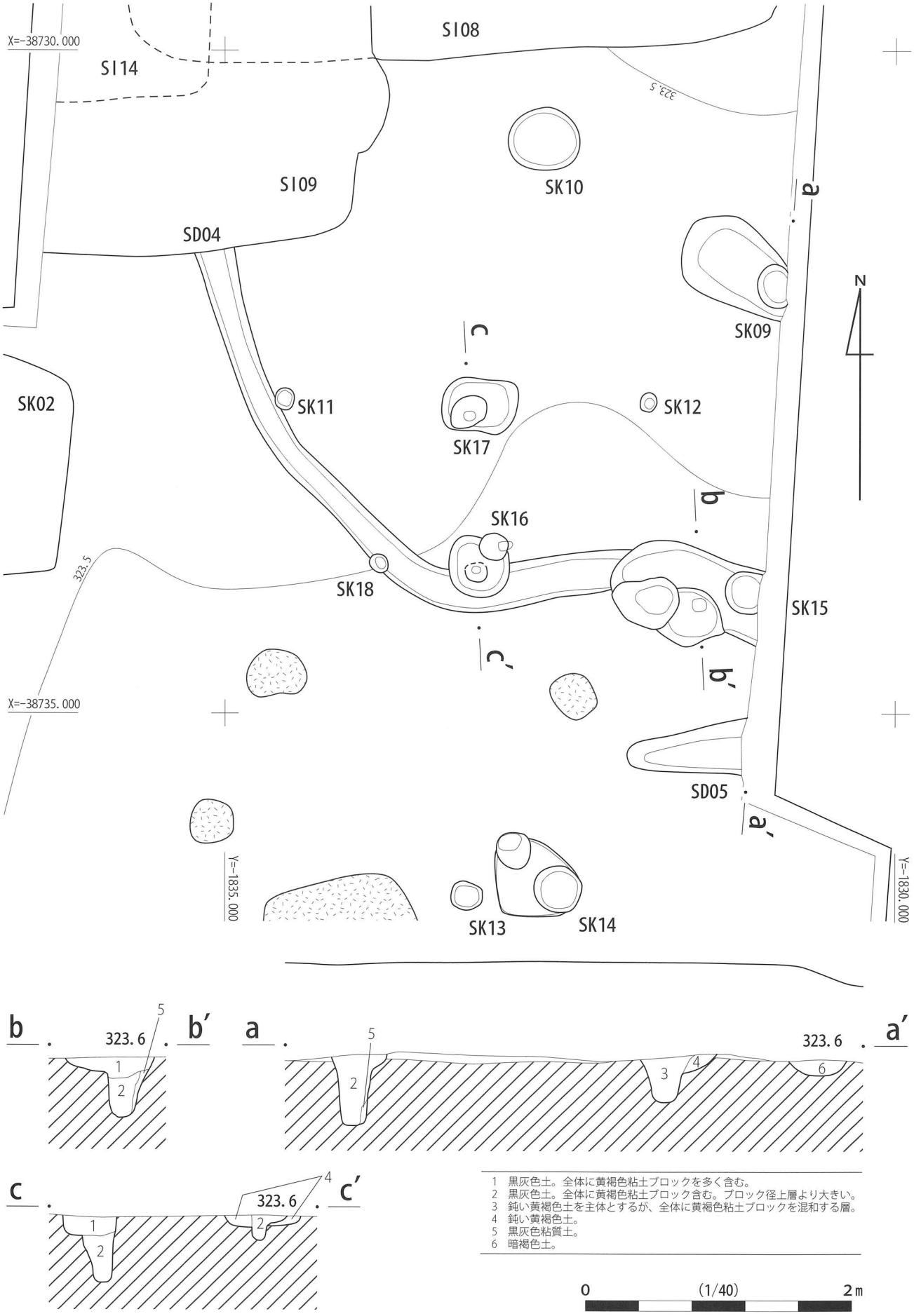
SK04
1　黒褐色土。砂礫含む。
2　鈍い黄褐色土。
3　黒褐色土。黄褐色土、砂礫を多く混入。

SK05
1　暗褐色土。砂礫含む。
2　暗褐色土。砂礫を多く含む。焼土粒を含む。
3　暗褐色土。砂礫をほとんど含まない。

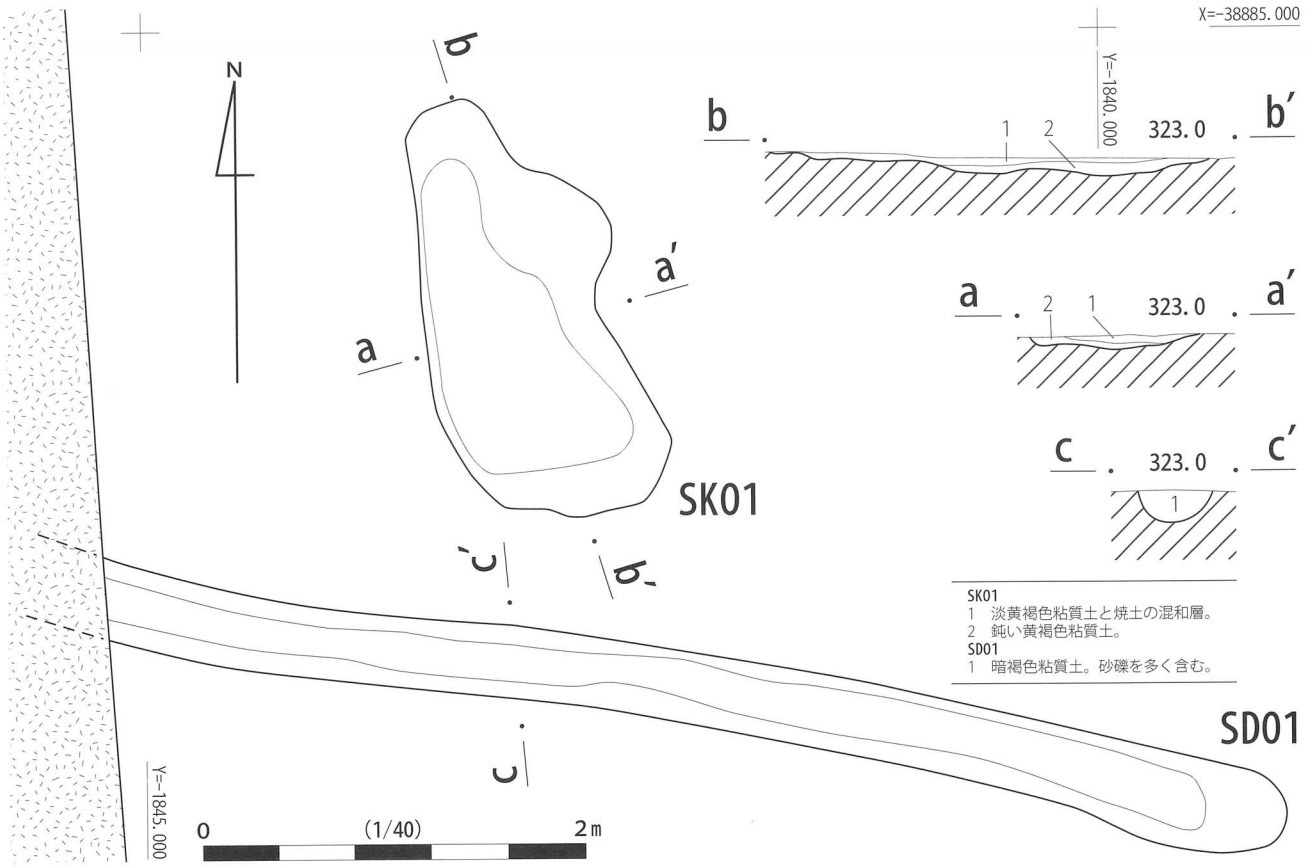
0　(1/40)　2m



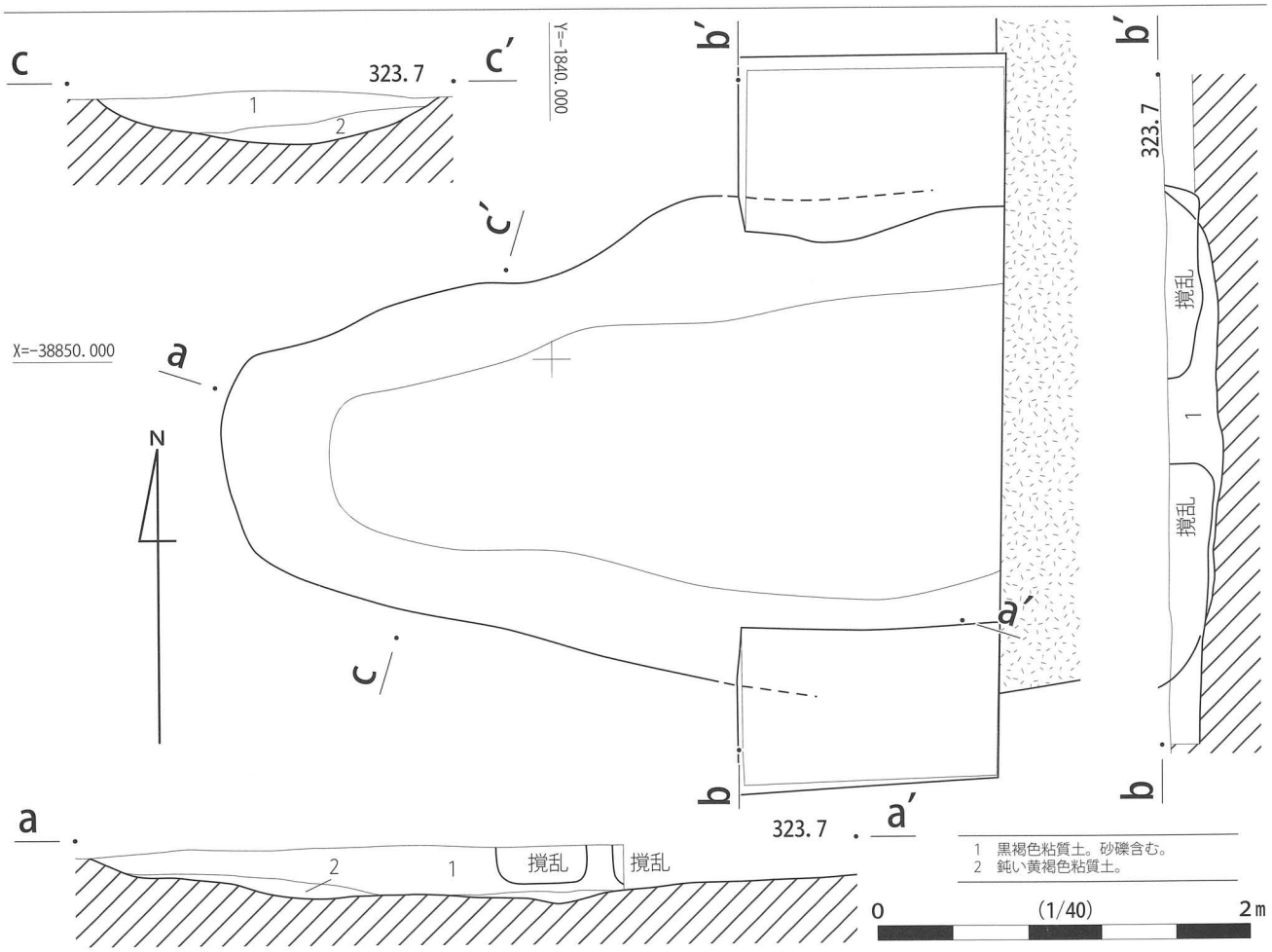
第26図　ＳＫ０４・０５測量図



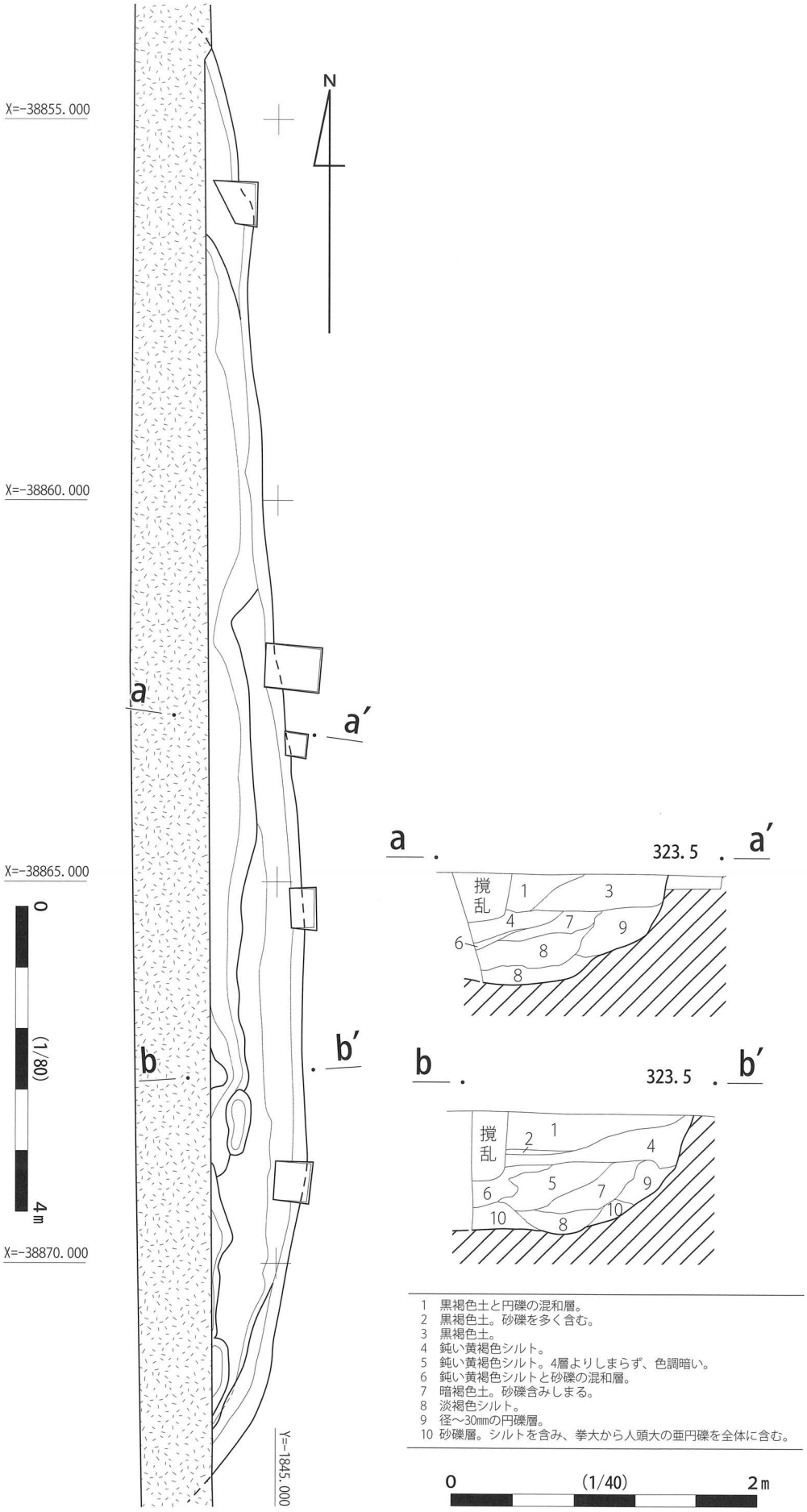
第27図　ＳＫ０９～１８・ＳＤ０４・ＳＤ０５測量図



第28図　ＳＫ０１・ＳＤ０１測量図

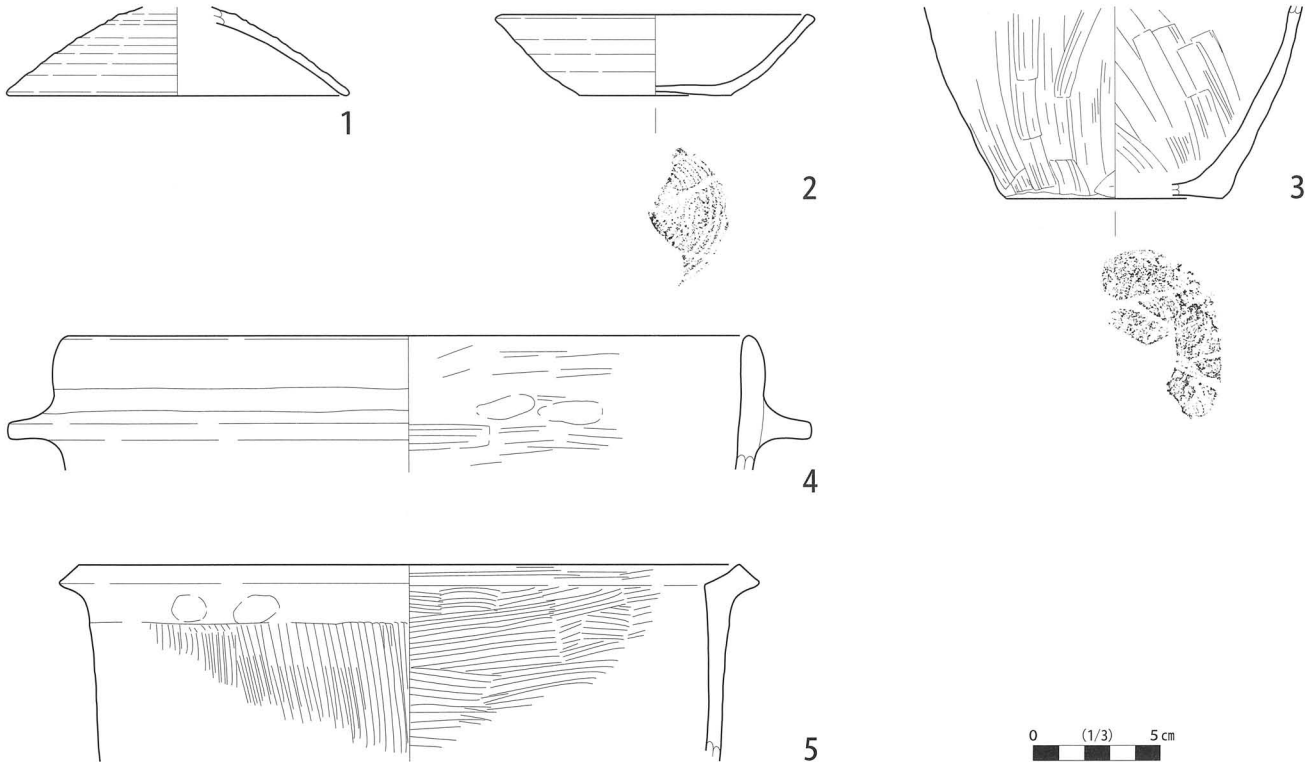


第29図　ＳＤ０２測量図

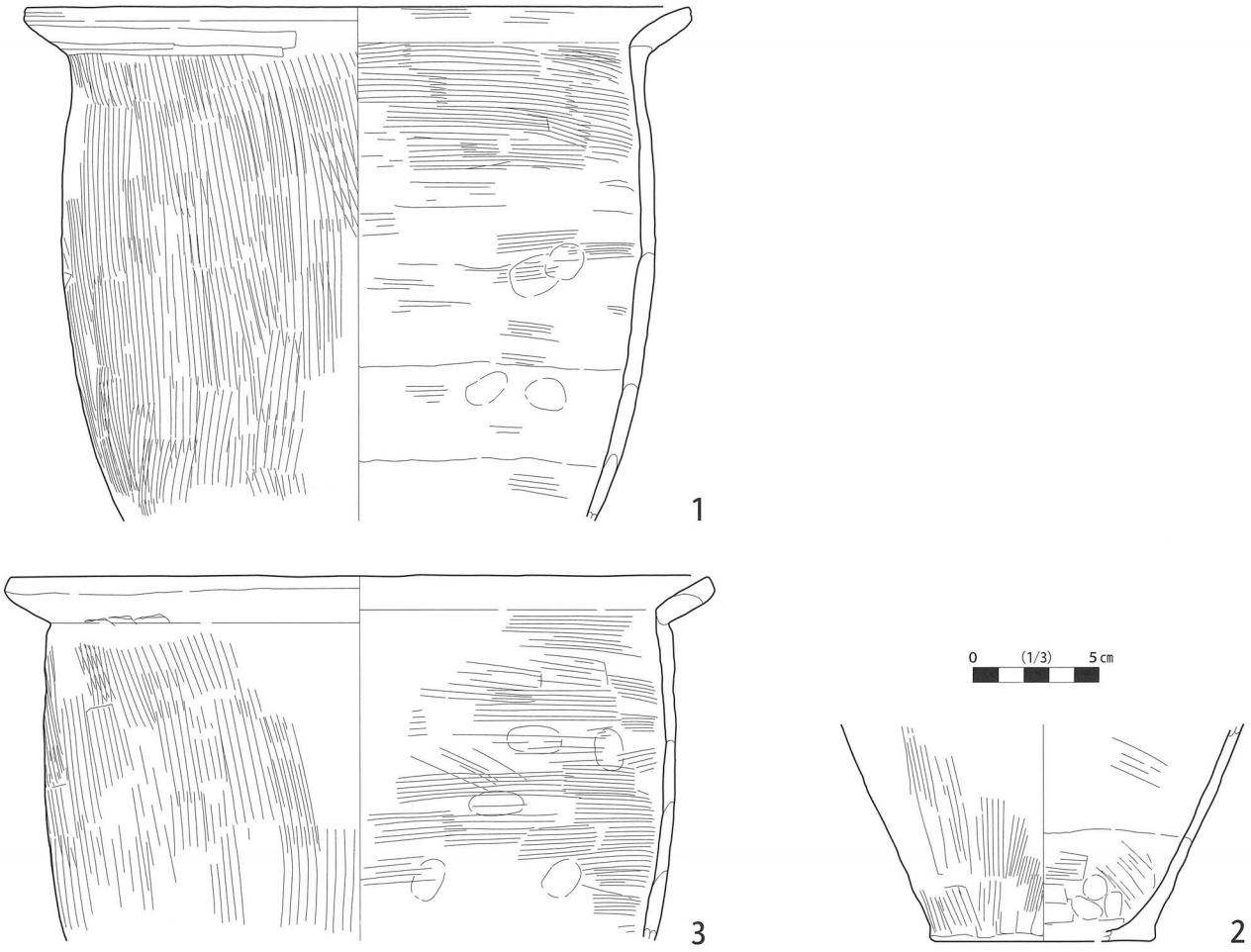


1 黒褐色土と円礫の混和層。
2 黒褐色土。砂礫を多く含む。
3 黒褐色土。
4 鈍い黄褐色シルト。
5 鈍い黄褐色シルト。4層よりしまらず、色調暗い。
6 鈍い黄褐色シルトと砂礫の混和層。
7 暗褐色土。砂礫含みしまる。
8 淡褐色シルト。
9 径～30mmの円礫層。
10 砂礫層。シルトを含み、拳大から人頭大の亜円礫を全体に含む。

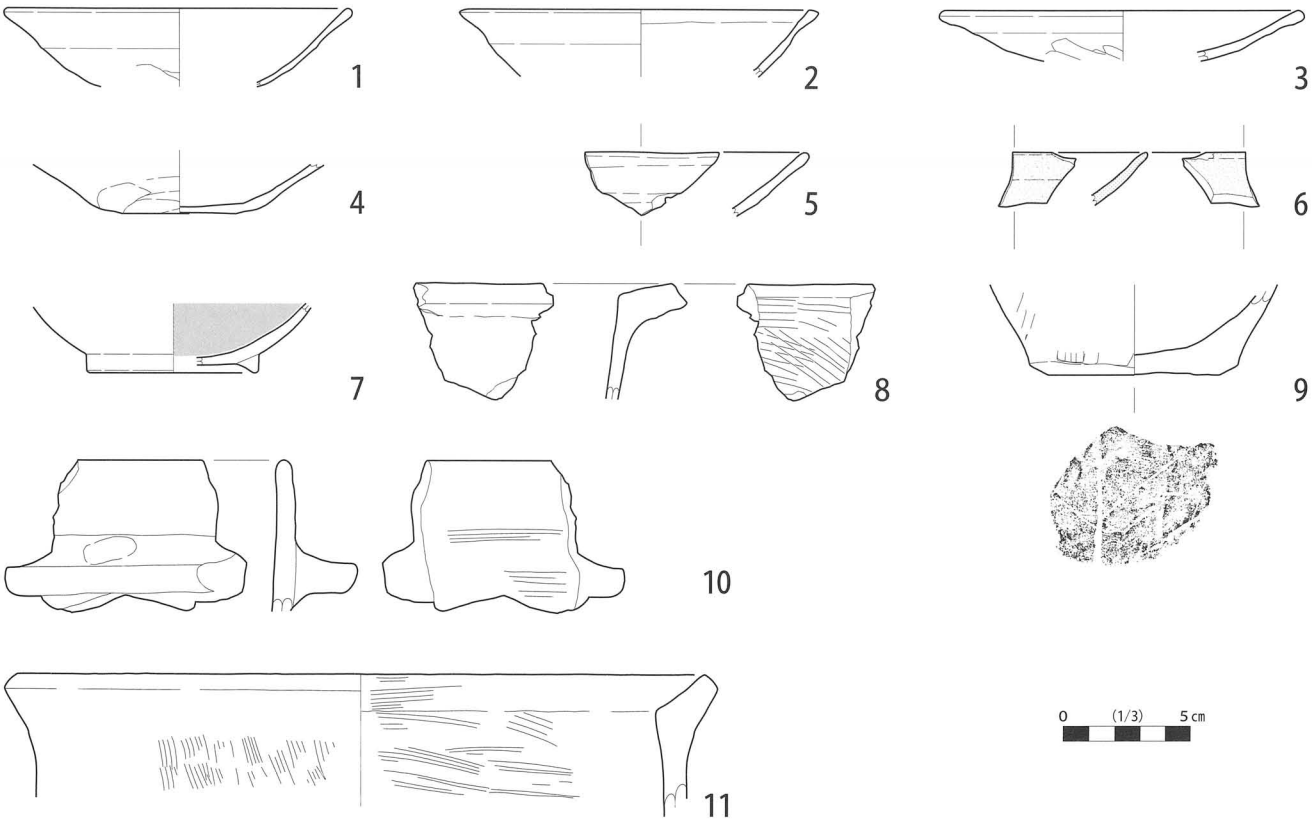
第30図　ＳＤ０３測量図



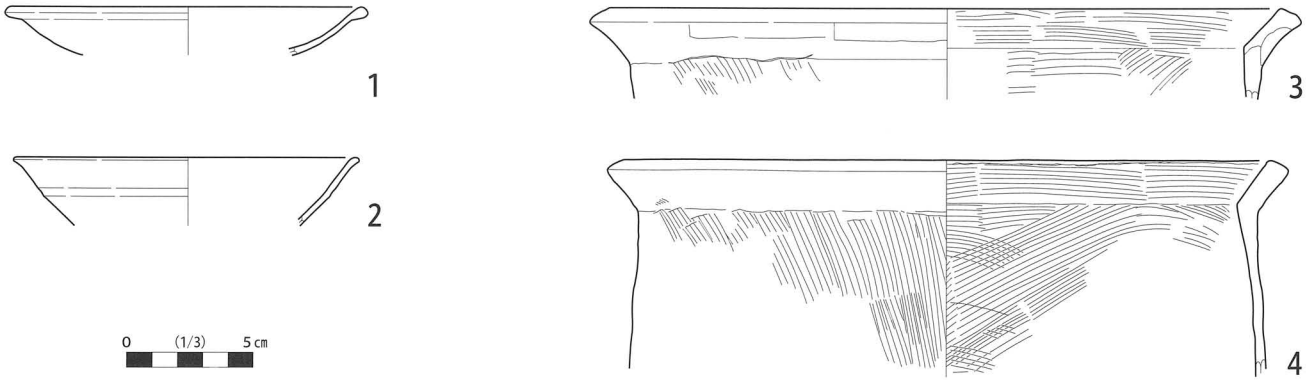
第31図　ＳＩ０１出土遺物



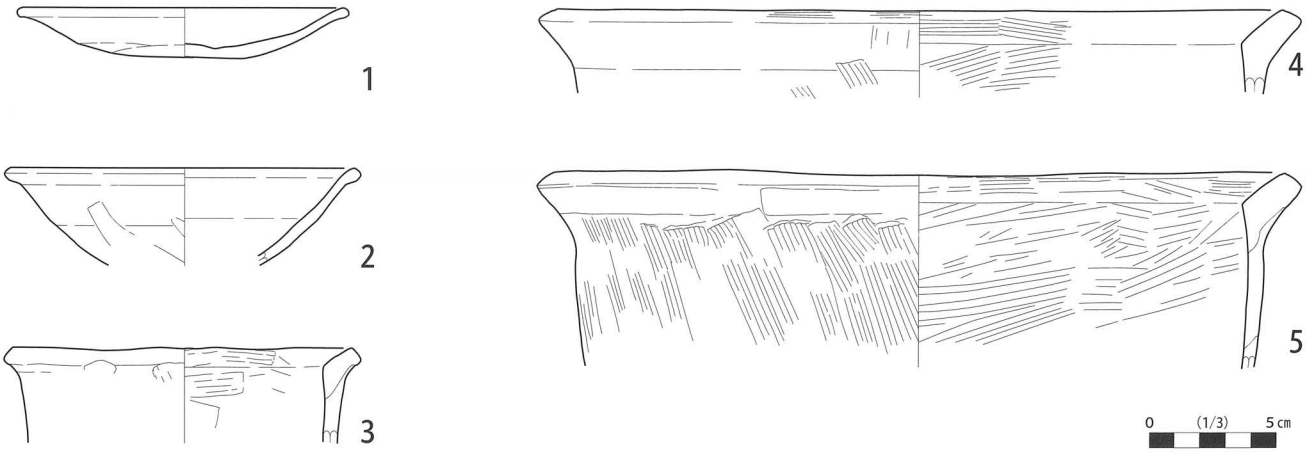
第32図　ＳＩ０２出土遺物



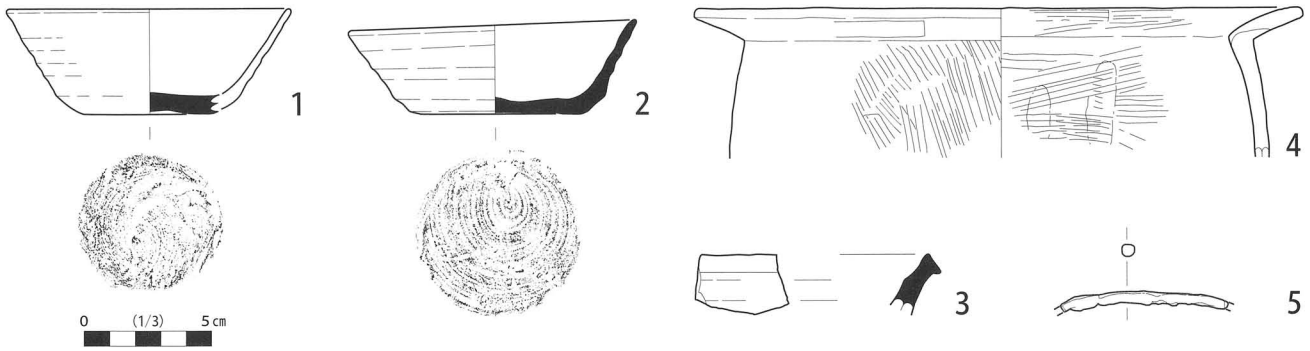
第33図　ＳＩ０３出土遺物



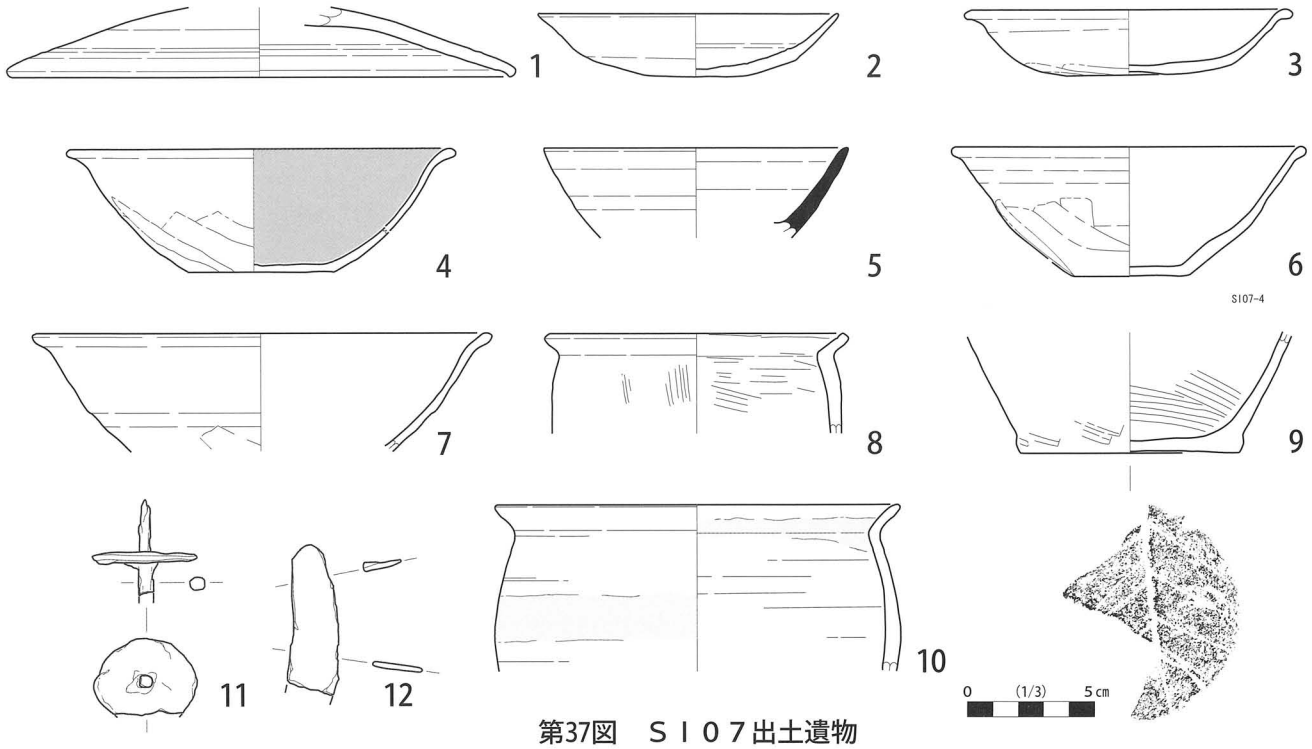
第34図　ＳＩ０４出土遺物



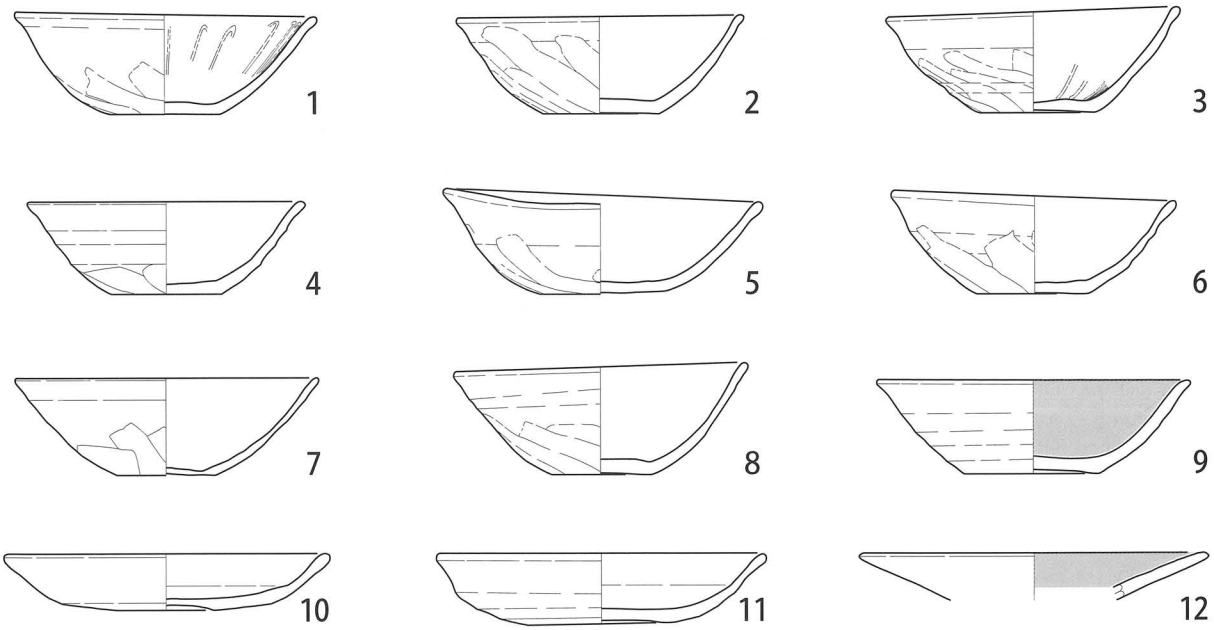
第35図　ＳＩ０５出土遺物



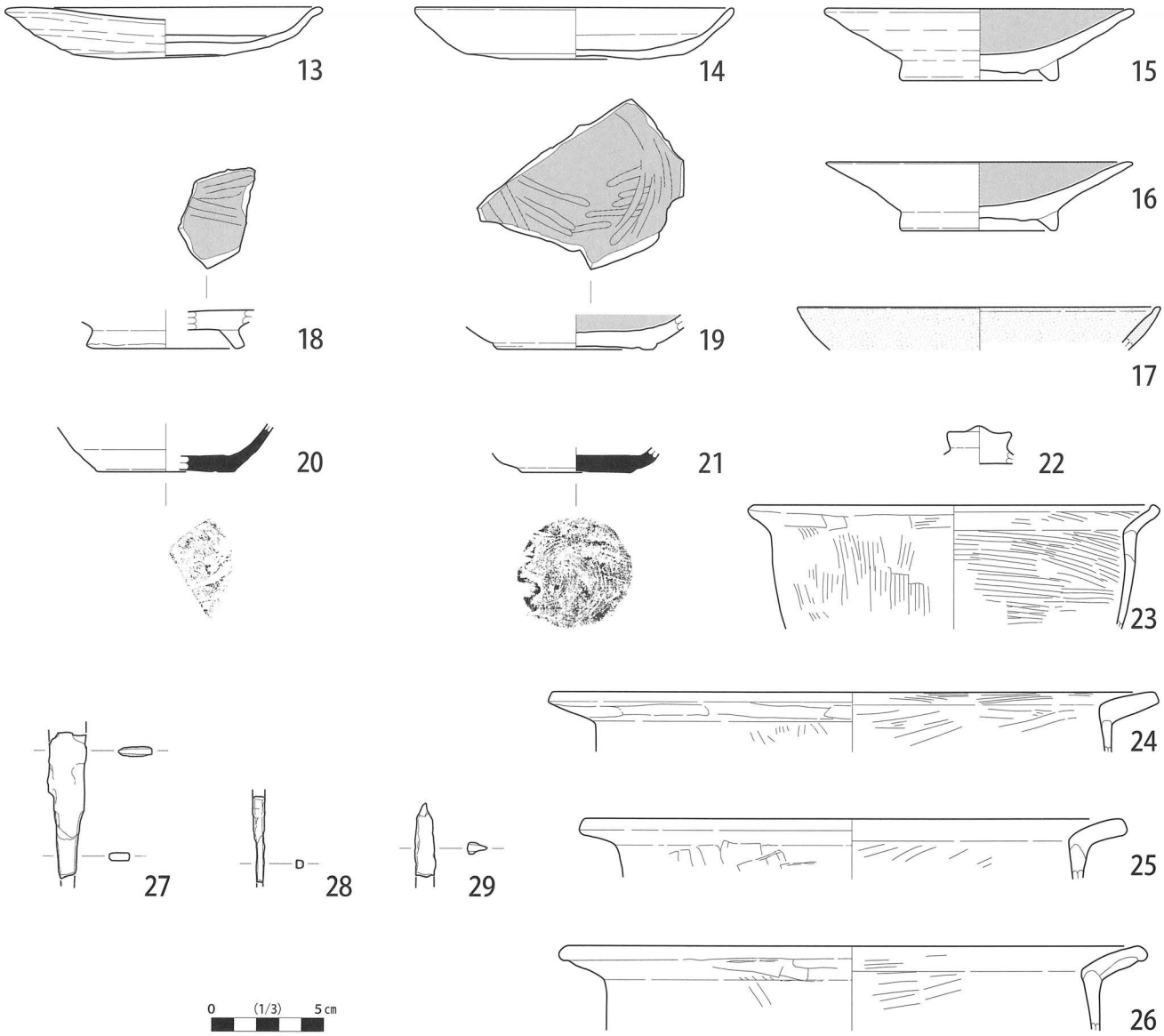
第36図　ＳＩ０６出土遺物



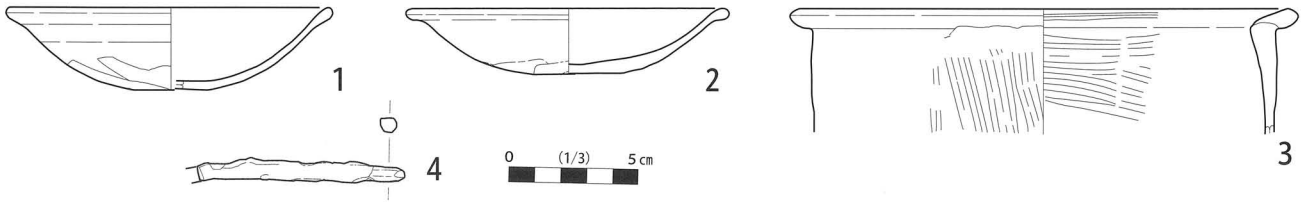
第37図　ＳＩ０７出土遺物



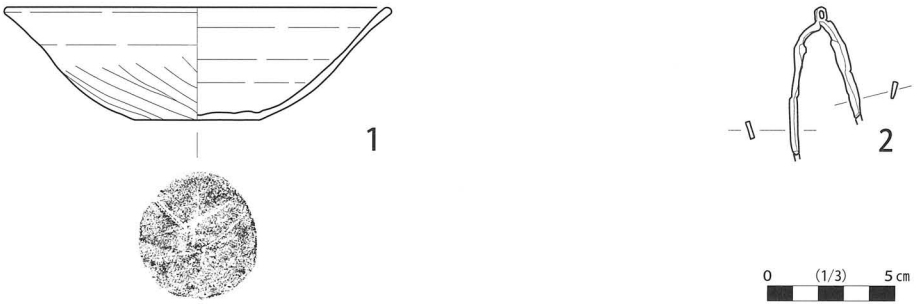
第38図　ＳＩ０８出土遺物（１）



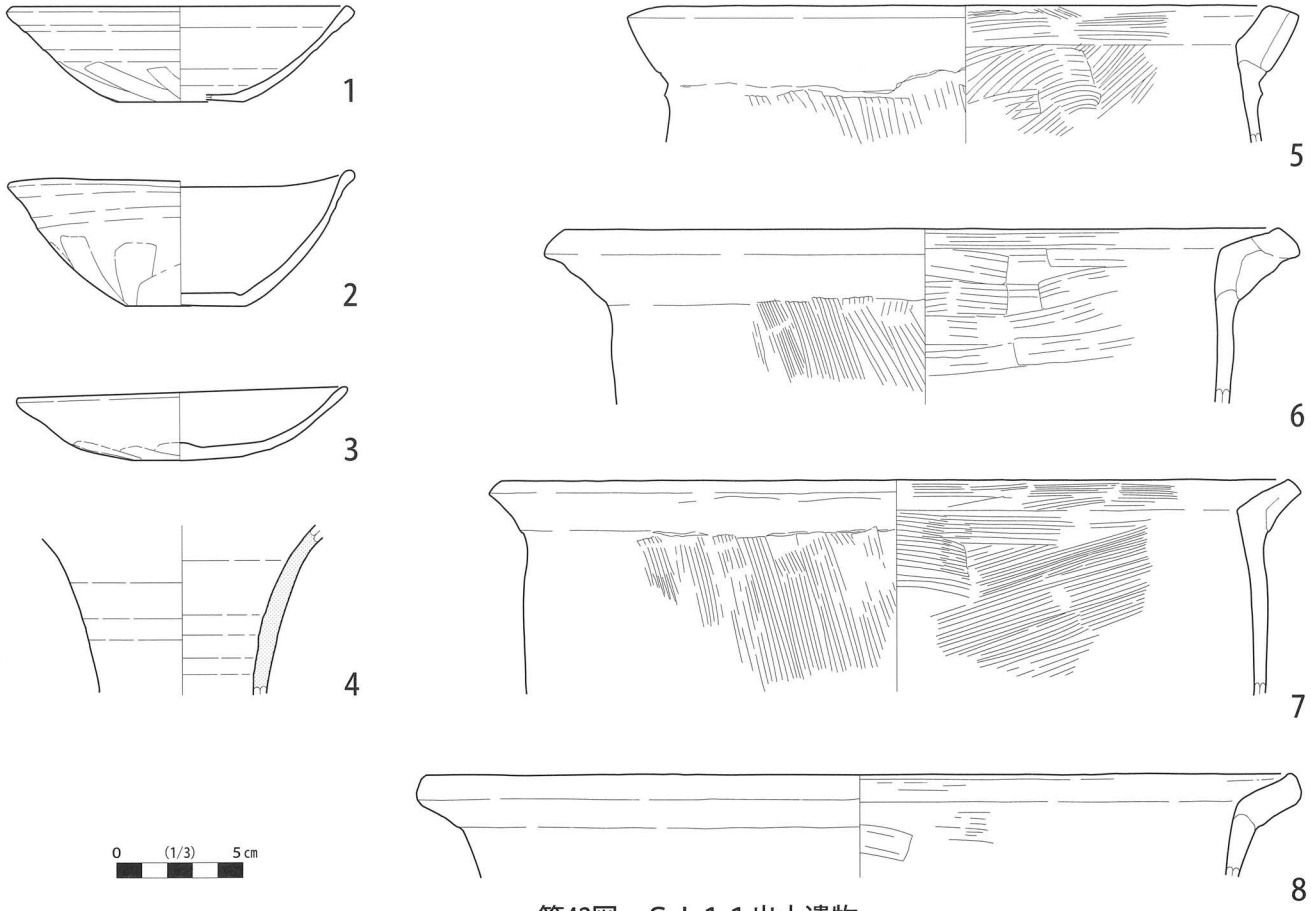
第39図　ＳＩ０８出土遺物（２）



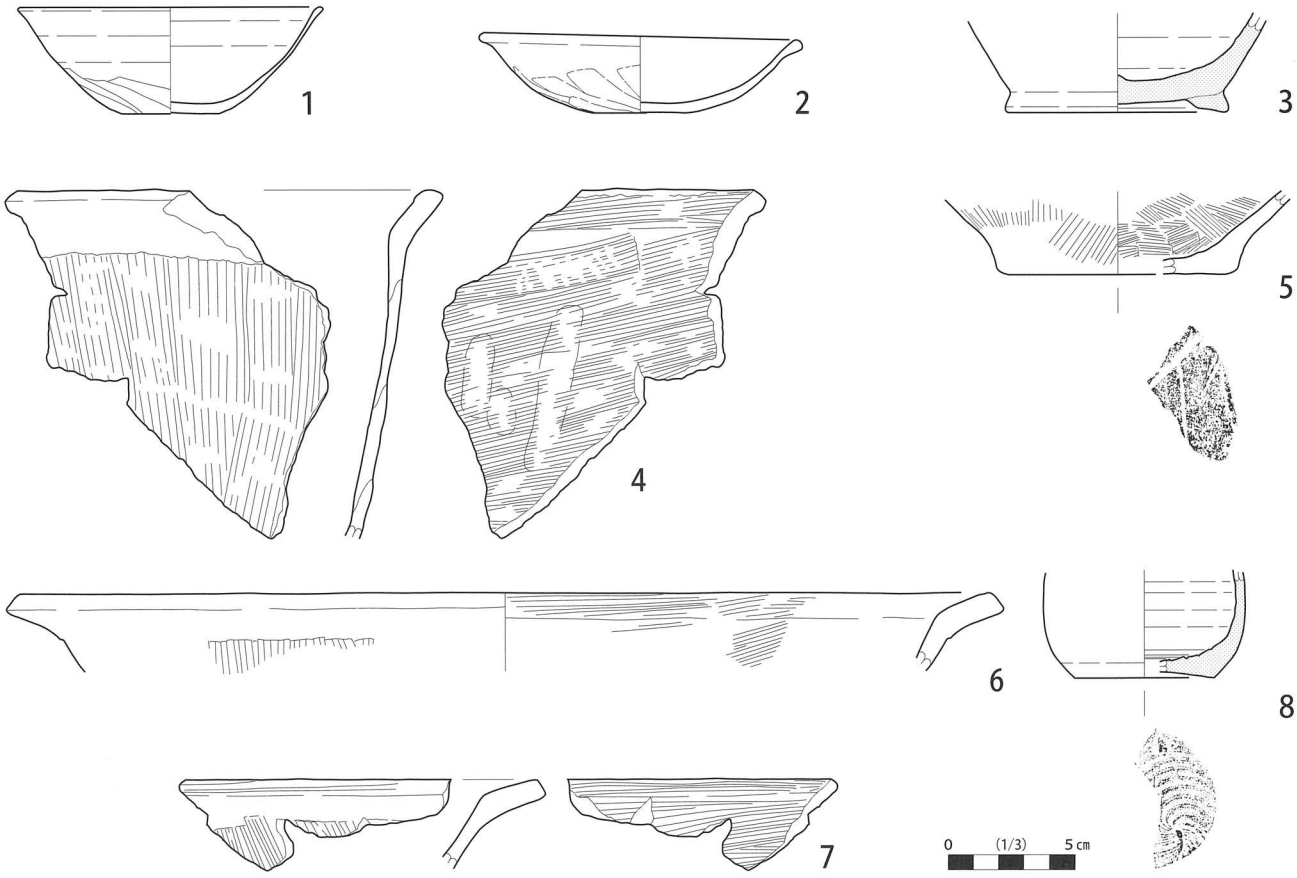
第40図　ＳＩ０９出土遺物



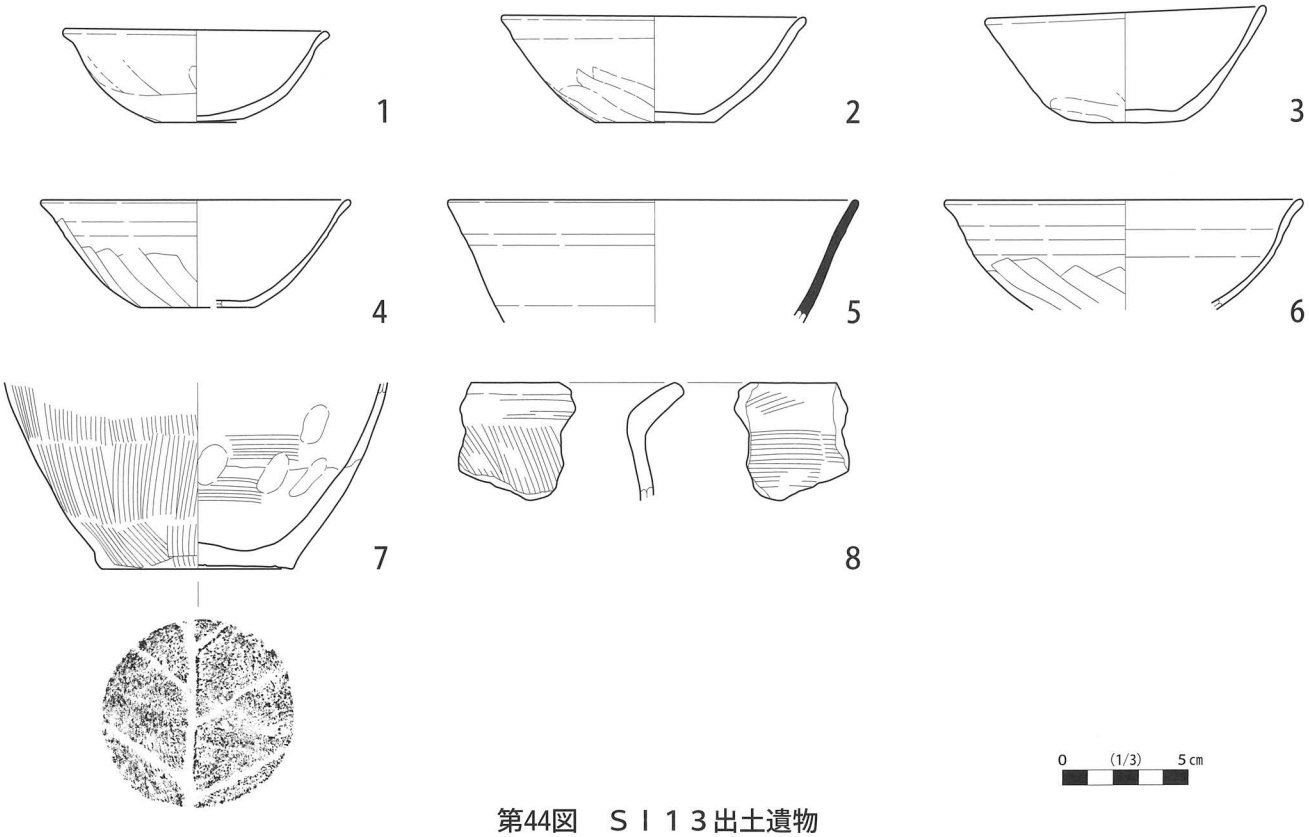
第41図　ＳＩ１０出土遺物



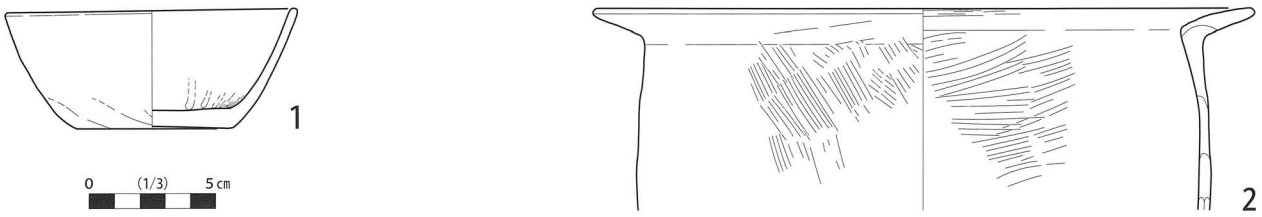
第42図　ＳＩ１１出土遺物



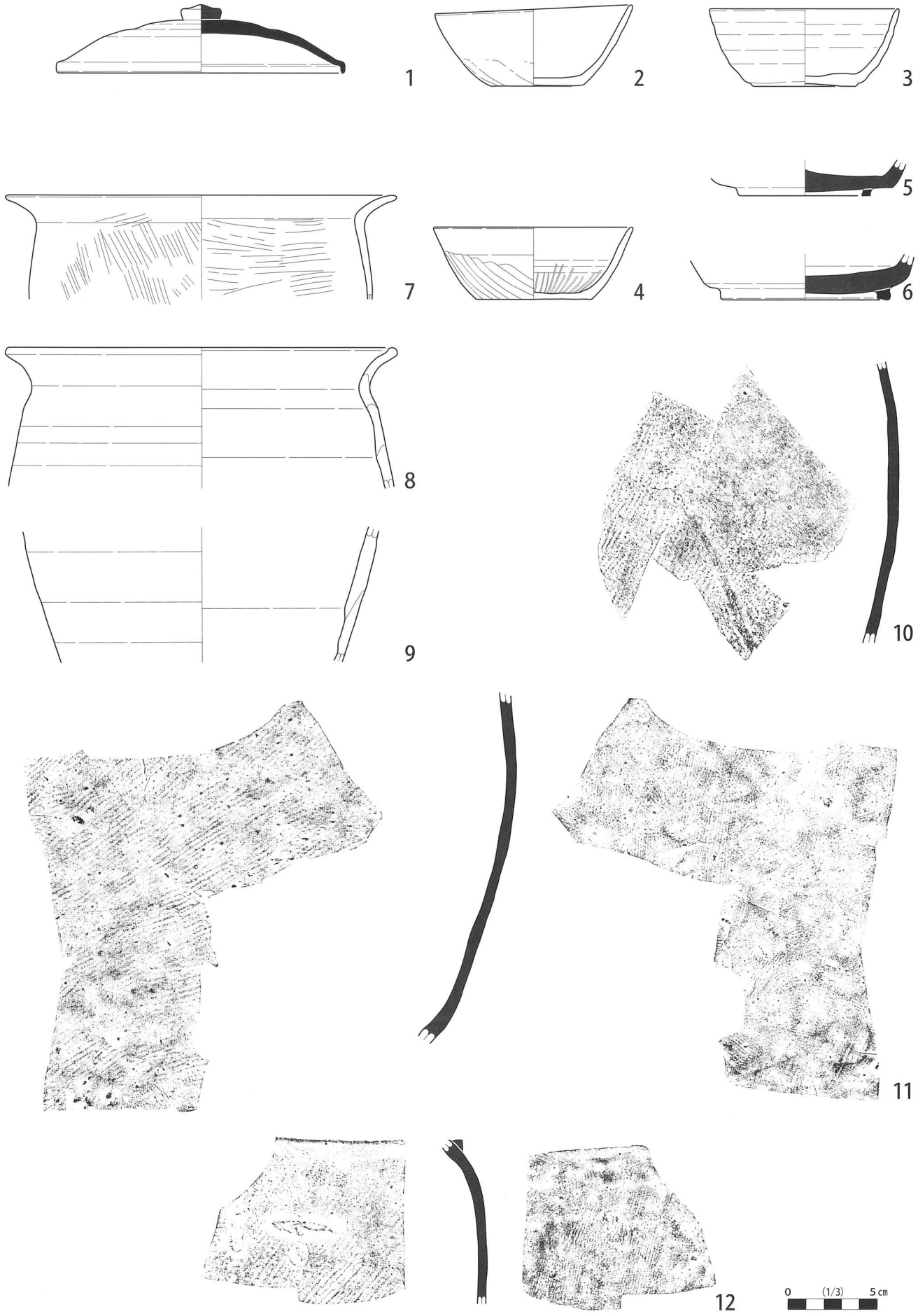
第43図　ＳＩ１２出土遺物



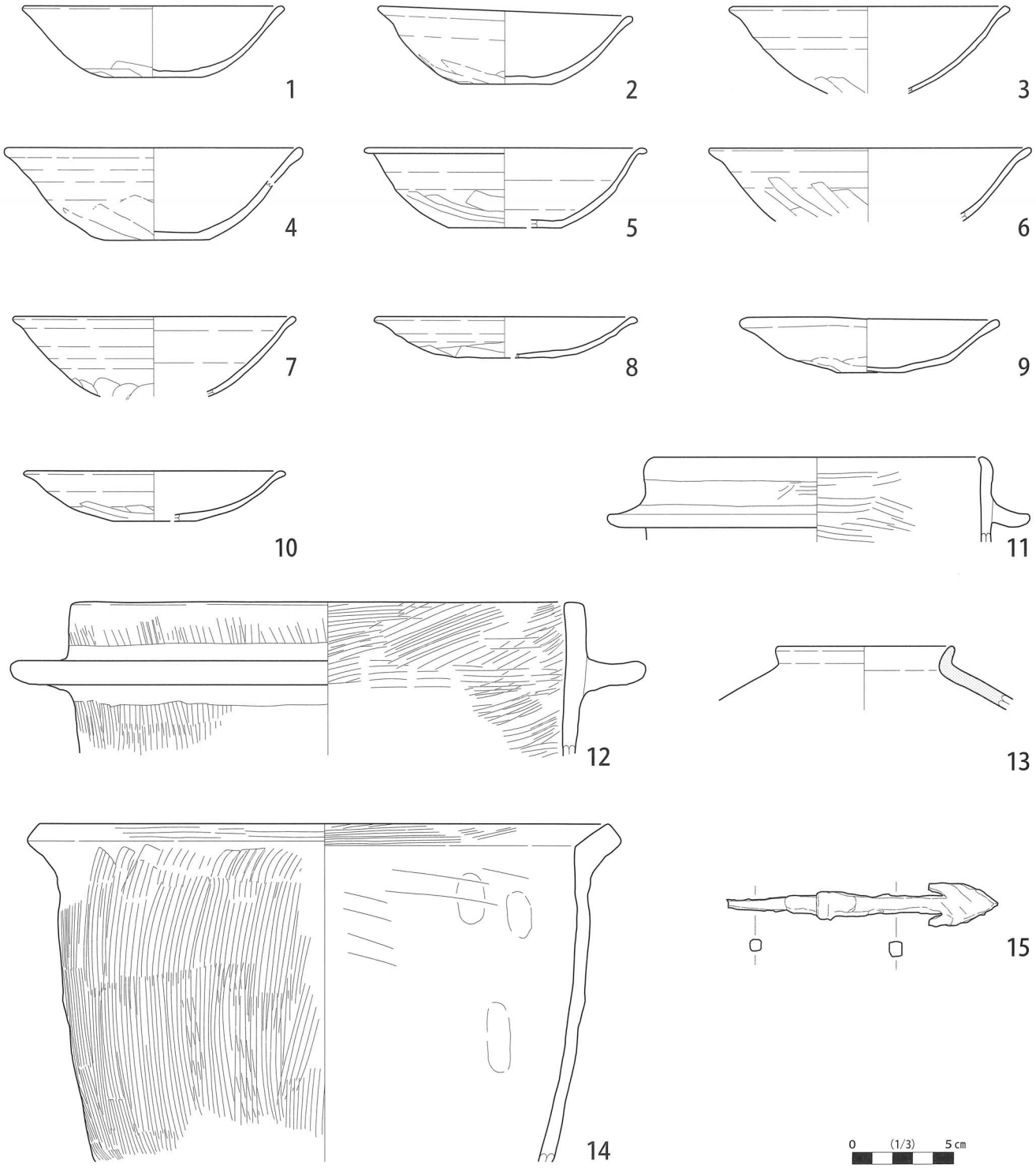
第44図　ＳＩ１３出土遺物



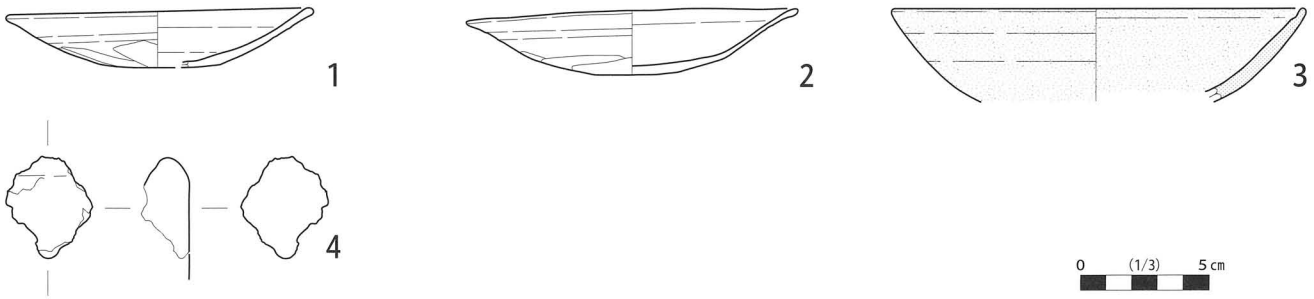
第45図　ＳＩ１４出土遺物



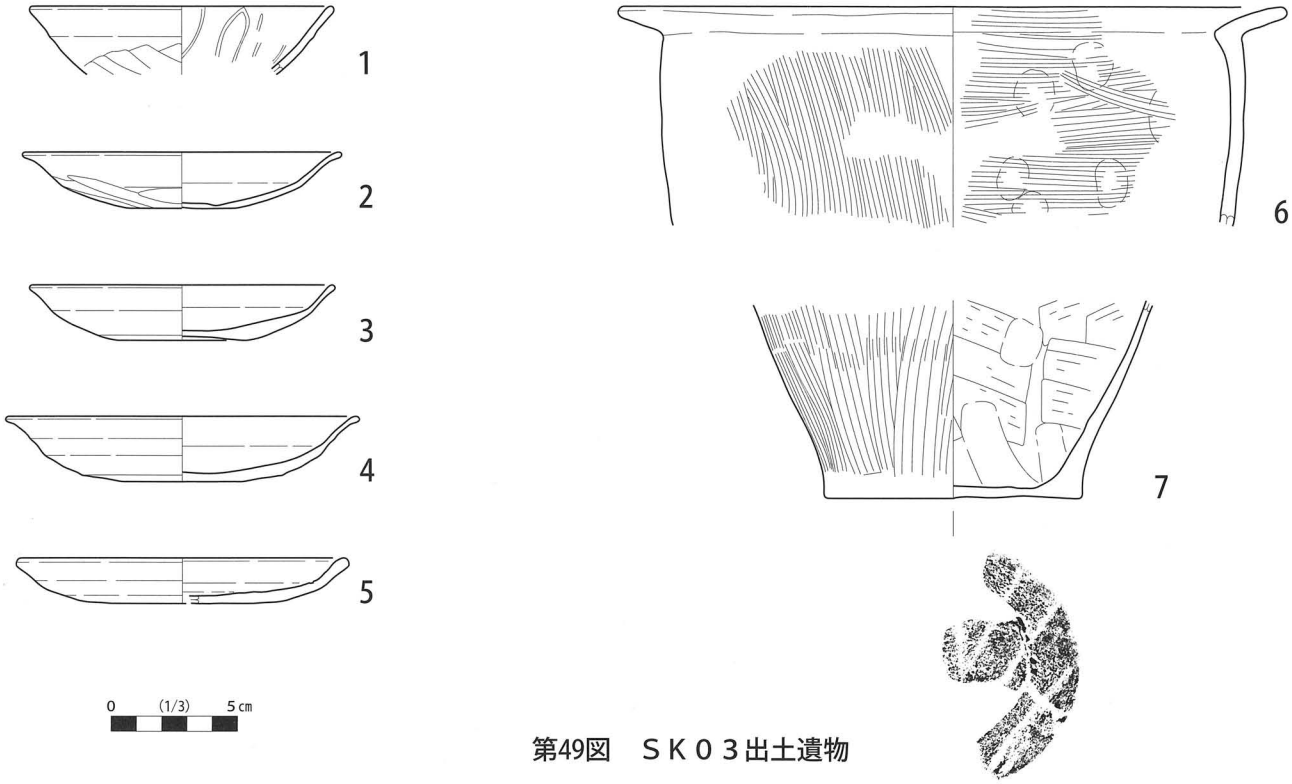
第46図　ＳＩ１５出土遺物



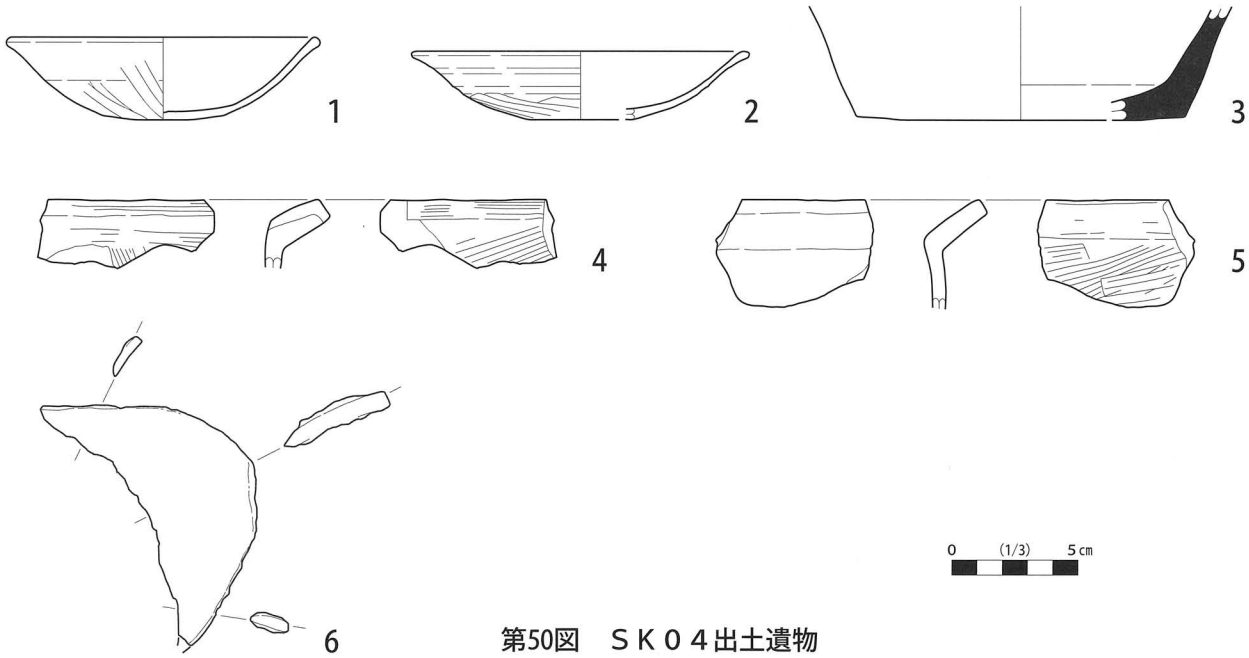
第●図　ＳＩ１６出土遺物



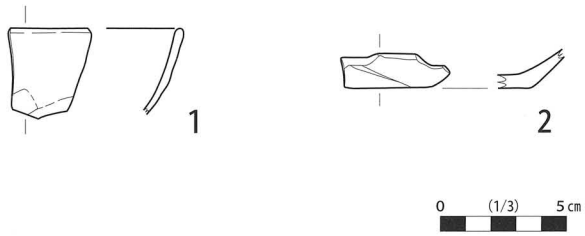
第●図　ＳＫ０２出土遺物



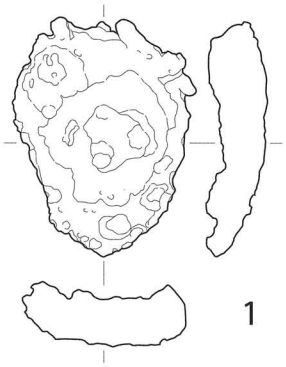
第49図　ＳＫ０３出土遺物



第50図　ＳＫ０４出土遺物



第51図　ＳＫ０５出土遺物



第52図　ＳＫ０６出土遺物

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI01	1	土師器	蓋	(13.0)	-	(3.6)	体部の1／4	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI01	2	土師器	杯	(12.0)	(5.9)	3.25	2／3	緻密・赤色粒子	良好	褐色	褐色	底部回転糸切り未調整
SI01	3	土師器	甕	-	(8.6)	(7.7)	底部の1／4	緻密	良好	にぶい赤褐色	褐色	底部木葉痕
SI01	4	土師器	羽釜	(26.4)	-	(5.4)	破片	緻密・砂粒多含	良好	暗灰黄色	赤色	
SI01	5	土師器	甕	(26.0)	-	(7.9)	口縁部の1／4	緻密	良好	褐色	褐色	
SI02	1	土師器	甕	(26.5)	-	(20.6)	口～体部の1／3	緻密	良好	明赤褐色	にぶい褐色	
SI02	2	土師器	甕	-	(8.5)	(8.7)	底部1／4	緻密	良好	にぶい赤褐色	赤褐色	底部木葉痕
SI02	3	土師器	甕	(27.8)	-	(14.6)	口～体部の1／4	やや粗	良好	橙色	明赤褐色	
SI03	1	土師器	杯	(13.2)	-	(3.1)	破片	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI03	2	土師器	杯	(14.0)	-	(2.7)	破片	緻密・赤色粒子	良好	にぶい橙色	にぶい黄橙色	
SI03	3	土師器	皿	(14.0)	-	(2.0)	破片	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI03	4	土師器	杯	-	(4.6)	(1.9)	破片	緻密・赤色粒子	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
SI03	5	土師器	杯	-	-	(2.5)	破片	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI03	6	灰釉陶器	碗	-	-	(2.1)	破片	緻密	良好	灰白色	灰オリーブ色	
SI03	7	土師器	高台付杯	-	(6.4)	(2.8)	破片	緻密・砂粒多含	良好	にぶい橙色	黒色	内黒・付高台
SI03	8	土師器	甕	-	-	(4.6)	破片	緻密	良好	赤褐色	赤褐色	
SI03	9	土師器	甕	-	(6.6)	(3.6)	破片	緻密・砂粒多含	やや軟	赤褐色	橙色	杯と同質の胎土・底部木葉痕
SI03	10	土師器	羽釜	-	-	(6.0)	破片	緻密・砂粒多含	良好	にぶい黄橙色	にぶい橙色	
SI03	11	土師器	甕	(27.2)	-	(5.7)	破片	緻密・砂粒多含	良好	にぶい橙色	黒褐色	
SI04	1	土師器	皿	(13.8)	-	(1.9)	口縁部の1／3	緻密・赤色粒子	良好	明赤褐色	にぶい赤褐色	
SI04	2	土師器	杯	(13.4)	-	(2.7)	破片	緻密・赤色粒子	良好	赤褐色	褐色	
SI04	3	土師器	甕	(26.4)	-	(3.6)	破片	緻密	良好	赤褐色	明赤褐色	
SI04	4	土師器	甕	(25.4)	-	(8.6)	口～体部の1／4	緻密	良好	赤褐色	褐色	

第２表　遺物観察表（１）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI05	1	土師器	杯	12.6	3.85	2.0	3／4	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI05	2	土師器	杯	(13.4)	-	(3.9)	口～体部の1／4	緻密・赤色粒子	良好	橙色	にぶい橙色	口縁部にカーボン吸着
SI05	3	土師器	甕	(13.2)	-	(3.8)	破片	緻密	良好	暗赤灰色	暗赤灰色	
SI05	4	土師器	甕	(28.4)	-	(3.4)	破片	緻密	良好	明赤褐色	褐色	
SI05	5	土師器	甕	(28.6)	-	(7.9)	口縁部1／3	緻密	良好	にぶい橙色	明赤褐色	
SI06	1	須恵器	杯	(10.5)	5.5	4.1	口～体部1／4・底部完存	緻密・白色粒子	良好	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI06	2	須恵器	杯	10.95	7.0	3.75	口～体部3／4・底部完存	緻密・白色粒子	良好	黄灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI06	3	須恵器	壺	-	-	(2.4)	破片	やや粗	良好	黄灰色	黄灰色	口唇～内面自然釉
SI06	4	土師器	甕	(23.5)	-	(6.0)	口縁部の1／4	緻密	良好	暗赤褐色	にぶい赤褐色	
SI06	5	鉄製品	不明	(5.7)	0.5	0.5	不明					
SI07	1	土師器	蓋	(19.6)	-	(2.8)	口～体部の1／3	緻密	良好	橙色	にぶい褐色	
SI07	2	土師器	皿	11.8	3.6	2.5	3／4	粗・赤色粒子含む・径～1㎜台大の砂粒を多く含む	軟質	橙色	橙色	
SI07	3	土師器	皿	12.3	3.15	2.6	口～体部3／4・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI07	4	土師器	杯	(14.4)	5.15	4.9	口～体1／3・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	黄橙色	赤色	内黒・底部全面ヘラケズリ
SI07	5	須恵器	杯	(11.8)	-	(3.6)	口～体部の1／3	緻密・赤色粒子・黒色粒子	良好	灰色	灰色	
SI07	6	土師器	杯	(13.8)	4.6	5.15	口～体部1／2・底部完存	やや粗・赤色粒子	良好	黄橙色	浅黄色	底部全面ヘラケズリ
SI07	7	土師器	杯	(17.7)	-	(4.7)	口～体部の1／3	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI07	8	土師器	甕	(11.6)	-	(14.0)	口～体部の1／4	緻密	良好	明赤褐色	灰褐色	
SI07	9	土師器	甕	-	(8.6)	(4.8)	底部2／3	緻密	良好	にぶい赤褐	黒褐色	底部木葉痕
SI07	10	土師器	甕	(15.8)	-	(6.6)	破片	緻密	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	ロクロ成形・口縁部内面及び外体部上半に帯状に炭化物付着
SI07	11	鉄製品	紡錘車	(3.8)	4.1	3.0	破片					
SI07	12	鉄製品	不明	(6.0)	2.0	0.3	破片					
SI08	1	土師器	杯	11.8	4.3	4.1	4／5	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ

第3表　遺物観察表（2）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI08	2	土師器	杯	11.2	4.5	3.85	口縁部の1／4欠	緻密・赤色粒子	良好	明黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	3	土師器	杯	11.35	4.5	4.15	口～体部3／4・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	にぶい黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	4	土師器	杯	(10.7)	4.4	3.7	口～体部1／3・底部完存	緻密・赤色粒子	軟質	橙色	浅黄橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	5	土師器	杯	12.3	5.0	4.15	2／3	やや粗・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI08	6	土師器	杯	10.9	4.3	4.1	ほぼ完存	緻密・赤色粒子	軟質	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	7	土師器	杯	(11.8)	(3.9)	3.85	1／3	緻密・赤色粒子	良好	黄橙色	にぶい黄褐色	底部全面ヘラケズリ
SI08	8	土師器	杯	11.4	4.0	4.4	口～体部2／3・底部完存	やや粗・赤色粒子・砂粒多含	良好	黄橙色	黄橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	9	土師器	杯	12.25	5.3	3.75	完存	粗・砂粒、赤色粒子多含	良好	淡黄色	オリーブ黒色	内黒・底部調整摩滅により不明
SI08	10	土師器	皿	(12.6)	(3.8)	2.3	1／3	緻密・赤色粒子	良好	橙色	黄橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	11	土師器	杯	(12.7)	5.6	2.8	口～体部1／3・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	12	土師器	皿	(13.5)	-	(1.9)	口～体部の1／3	粗・砂粒、赤色粒子多含	良好	浅黄橙色	灰色	内黒
SI08	13	土師器	皿	13.65	4.9	2.25	3／4	緻密・赤色粒子	良好	黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI08	14	土師器	皿	13.2	5.6	2.3	2／3	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	橙色	底部回転ヘラケズリ・口縁部にカーボン吸着
SI08	15	土師器	高台付皿	13.25	6.85	3.2	ほぼ完存	粗・砂粒、赤色粒子多含	良好	淡黄色	オリーブ黒色	内黒・付高台
SI08	16	土師器	高台付皿	(13.2)	6.7	3.1	口縁部の1／3欠	粗・砂粒、赤色粒子多含	良好	淡灰色	暗灰色	内黒・付高台
SI08	17	灰釉陶器	碗	(15.9)	-	(2.9)	破片	緻密	良好	オリーブ灰色	オリーブ灰色	
SI08	18	土師器	高台付杯	-	(6.2)	(1.7)	底部1／4	緻密・赤色粒子	良好	灰褐色	オリーブ黒色	内黒・付高台・見込みに不整方向のミガキ
SI08	19	土師器	高台付杯	-	(7.0)	(1.6)	底部1／2	緻密・赤色粒子	良好	橙色	黄灰色	内黒・削出し高台・見込みに不整方向のミガキ
SI08	20	須恵器	杯	-	(6.0)	(2.2)	底部1／3	緻密・白色粒子・黒色粒子	やや軟	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI08	21	須恵器	杯	-	4.8	(0.9)	底部完存	緻密・白色粒子・黒色粒子	良好	灰色	灰色	底部回転糸切り未調整
SI08	22	土師器	蓋	2.6	-	(1.7)	つまみ部完存	緻密・赤色粒子	やや軟	明赤褐色	にぶい褐色	計測値はつまみ部径
SI08	23	土師器	甕	(17.6)	-	(5.5)	破片	緻密	良好	褐色	褐色	
SI08	24	土師器	甕	(26.4)	-	(2.7)	破片	緻密	良好	赤褐色	明赤褐色	

第４表　遺物観察表（３）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI08	25	土師器	甕	(23.5)	-	(2.7)	破片	緻密	良好	橙色	褐色	
SI08	26	土師器	甕	(25.2)	-	(3.8)	破片	緻密	良好	橙色	にぶい橙色	
SI08	27	鉄製品	刀子か	(6.5)	1.6	0.6	破片					
SI08	28	鉄製品	不明	(3.7)	0.5	0.7	破片					
SI08	29	鉄製品	刀子か	(3.2)	0.9	0.6	破片					
SI09	1	土師器	杯	(12.4)	(3.3)	3.3	1／2	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI09	2	土師器	皿	12.1	3.5	2.6	口縁部の1／4欠	緻密・赤色粒子	良好	にぶい黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI09	3	土師器	甕	(19.2)	-	(4.9)	破片	緻密	良好	明赤褐色	明赤褐色	
SI09	4	鉄製品	不明	(8.2)	0.8	0.8	破片					
SI10	1	土師器	杯	(15.1)	5	4.5	口～体部1／3・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI10	2	鉄製品	毛抜き状	(5.9)	3.1	0.7	不明					
SI11	1	土師器	杯	(13.0)	(5.2)	3.8	1／3	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI11	2	土師器	杯	13.4	4.7	5.35	ほぼ完存	やや粗・赤色粒子・砂粒多含	良好	黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI11	3	土師器	皿	12.8	4.4	2.9	口縁部の1／3欠	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI11	4	灰釉陶器	壺	-	-	(6.8)	破片	緻密・黒色粒子	良好	灰白色	灰白色	
SI11	5	土師器	甕	(24.0)	-	(5.5)	破片	緻密	良好	明赤褐色	にぶい赤褐色	
SI11	6	土師器	甕	(28.0)	-	(7.0)	破片	粗	良好	暗褐色	橙色	
SI11	7	土師器	甕	(31.0)	-	(8.5)	破片	緻密	良好	にぶい褐色	橙色	
SI11	8	土師器	甕	(34.0)	-	(4.1)	破片	緻密	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
SI12	1	土師器	杯	11.8	4	4.2	口～体部1／4・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI12	2	土師器	皿	12.4	3.6	3.15	完存	緻密・赤色粒子	良好	褐灰色	にぶい橙色	底部全面ヘラケズリ
SI12	3	灰釉陶器	壺	-	8.5	(3.9)	底部完存	緻密	やや軟	灰白色	灰白色	付高台
SI12	4	土師器	甕	-	-	(14.0)	破片	緻密	良好	にぶい赤褐色	明赤褐色	

第5表　遺物観察表（4）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI12	5	土師器	甕	-	(8.6)	(3.3)	破片	緻密	良好	明赤褐色	にぶい橙色	底部木葉痕
SI12	6	土師器	鉢	(38.0)	-	(3.1)	破片	緻密	良好	明赤褐色	明赤褐色	
SI12	7	土師器	鉢	-	-	(3.6)	破片	緻密	良好	明褐色	橙色	
SI12	8	灰釉陶器	壺	-	(5.5)	(4.2)	底部１／２	緻密	良好	灰白色	灰白色	底部回転糸切り未調整
SI13	1	土師器	杯	10.25	3.5	3.75	口～体部１／２・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI13	2	土師器	杯	11.75	4.65	4.25	ほぼ完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	オリーブ黒色	底部全面ヘラケズリ
SI13	3	土師器	杯	10.7	4.15	4.6	口～体部１／４・底部完存	緻密・赤色粒子	軟質	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI13	4	土師器	杯	(11.8)	(4.5)	4.25	１／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	明赤褐色	底部全面ヘラケズリ
SI13	5	須恵器	杯	(15.6)	-	(4.8)	破片	緻密	良好	灰色	灰色	
SI13	6	土師器	杯	(13.7)	-	(4.5)	口～体部の１／３	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	橙色	
SI13	7	土師器	甕	-	7.5	(7.45	底部完存	緻密	良好	赤褐色	暗褐色	底部木葉痕
SI13	8	土師器	甕	-	-	(4.0)	破片	緻密	良好	暗褐色	黒褐色	
SI14	1	土師器	杯	11.3	6.5	4.75	口～体部１／３・底部完存	緻密	やや軟	明赤褐色	橙色	底部全面ヘラケズリ・口縁部の一部に炭化物付着
SI14	2	土師器	甕	(25.6)	-	(8.0)	破片	緻密	良好	にぶい赤褐色	明赤褐色	
SI15	1	須恵器	蓋	(16.0)	-	3.9	１／４	緻密・白色粒子	やや軟	灰色	黄灰色	
SI15	2	土師器	杯	11.0	5.25	5.6	口～体部３／４・底部完存	緻密・赤色粒子	軟質	橙色	明赤褐	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI15	3	土師器	杯	(10.5)	(4.3)	(5.7)	１／２	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部回転糸切り後外周をヘラケズリ
SI15	4	土師器	杯	(11.0)	6.4	4.1	１／３	緻密・赤色粒子	やや軟	橙色	明赤褐色	底部全面ヘラケズリ
SI15	5	須恵器	高台付杯	-	7.4	(2.0)	底部完存	緻密・白色粒子	良好	灰色	青灰色	付高台
SI15	6	須恵器	高台付杯	-	9.2	(2.6)	底部完存	緻密・白色粒子	やや軟	灰褐色	黄灰色	付高台
SI15	7	土師器	甕	21.4	-	(5.9)	破片	緻密	良好	赤褐色	赤褐色	
SI15	8	土師器	甕	(21.4)	-	(8.0)	破片	やや粗	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ロクロ成形
SI15	9	土師器	甕	-	-	(7.6)	破片	やや粗	良好	明赤褐色	明黄褐色	ロクロ成形

第６表　遺物観察表（５）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SI15	10	須恵器	甕	-	-	(16.0)	破片	緻密	良好	暗灰黄色	灰色	外面全面に自然釉
SI15	11	須恵器	甕	-	-	(19.6)	破片	緻密	良好	灰オリーブ色	灰色	外面全面に自然釉
SI15	12	須恵器	壺	-	-	(9.3)	破片	緻密	良好	灰オリーブ色	灰色	凸帯
SI16	1	土師器	杯	(12.8)	4.4	3.6	体下半から底部完存・口縁部の一部遺存	緻密・赤色粒子	良好	にぶい黄橙色	灰色	底部全面ヘラケズリ
SI16	2	土師器	杯	12.25	4.4	3.9	口～体の２／３・底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI16	3	土師器	杯	(13.7)	-	(4.4)	破片	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI16	4	土師器	杯	14.3	5.25	4.6	口縁部の１／２欠	緻密・赤色粒子	良好	にぶい黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI16	5	土師器	杯	(13.4)	(5.6)	4	破片	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	にぶい黄橙色	底部全面ヘラケズリ
SI16	6	土師器	杯	(15.7)	-	(3.7)	口～体部の１／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	浅黄橙色	
SI16	7	土師器	杯	(13.6)	-	(4.0)	口～体部の１／４	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SI16	8	土師器	皿	(12.6)	(4.5)	2.1	１／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SI16	9	土師器	皿	12.6	3.9	2.8	完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	にぶい赤褐色	底部回転糸切り後一部をヘラケズリ・内面に炭化物付着
SI16	10	土師器	皿	(12.4)	(4.0)	2.5	１／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	口縁部全周にカーボン吸着
SI16	11	土師器	羽釜	(16.2)	-	(4.3)	破片	緻密	良好	褐灰色	黒褐色	
SI16	12	土師器	羽釜	(23.8)	-	(7.8)	口縁部の１／３	やや粗	良好	赤褐色	褐色	
SI16	13	灰釉陶器	壷	(11.6)	-	(3.2)	破片	緻密	軟質	白色	淡黄色	
SI16	14	土師器	甕	(28.2)	-	(17.1)	口～体部の１／４	緻密	良好	明赤褐色	赤褐色	
SI16	15	鉄製品	鏃	13.5	2.2	1.3	ほぼ完存					
SK02	1	土師器	皿	11.5	1.8	2.4	２／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SK02	2	土師器	皿	12.75	2.5	2.65	１／２	緻密	良好	橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ・口縁部全周にカーボン吸着
SK02	3	灰釉陶器	碗	(16.0)	-	(3.7)	破片	緻密	良好	灰白色	灰オリーブ色	
SK02	4	土器	鞴羽口	-	-	(4.0)	破片	やや粗	良好	灰色	橙色	
SK03	1	土師器	杯	(11.8)	-	(2.7)	口縁部の１／３	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	内面に炭化物付着

第７表　遺物観察表（６）

遺構名	番号	種別	器種	計測値（cm）			残存率	胎土	焼成	色調		整形／その他
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）				外側	内側	
SK03	1	土師器	杯	(11.8)	-	(2.7)	口縁部の1／3	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	内面に炭化物付着
SK03	2	土師器	皿	(12.3)	(4.4)	2.25	1／3	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SK03	3	土師器	皿	(11.8)	5.1	2.2	口縁部1／3・体部下半から底部完存	緻密・赤色粒子	良好	橙色	褐色	底部回転ヘラケズリ
SK03	4	土師器	皿	(13.6)	(4.8)	2.6	1／3	緻密・赤色粒子	良好	にぶい褐色	灰褐色	底部全面ヘラケズリ
SK03	5	土師器	皿	(13.0)	(5.6)	1.8	1／2	緻密・赤色粒子	良好	明黄褐色	橙色	底部全面ヘラケズリ
SK03	6	土師器	甕	(26.0)	-	(8.8)	破片	緻密	良好	赤褐色	にぶい赤褐色	
SK03	7	土師器	甕	-	(10.0)	(7.9)	底部1／2	緻密	良好	にぶい赤褐色	にぶい褐色	底部木葉痕
SK04	1	土師器	杯	(12.2)	4.8	3.3	口～体部1／3・底部完存	やや粗・赤色粒子	良好	橙色	にぶい褐色	底部全面ヘラケズリ
SK04	2	土師器	皿	(13.0)	(4.0)	2.7	口～体部の1／3	緻密・赤色粒子	良好	橙色	明赤褐色	
SK04	3	須恵器	甕	-	(9.6)	(4.5)	破片	やや粗・黒色粒子	良好	オリーブ黄色	灰色	底部未調整
SK04	4	土師器	甕	-	-	(2.8)	破片	緻密	良好	灰褐色	にぶい褐色	
SK04	5	土師器	甕	-	-	(4.3)	破片	緻密	良好	明赤褐色	明赤褐色	
SK04	6	鉄製品	不明	(9.6)	4.0	1.2	ほぼ完存					
SK05	1	土師器	杯	-	-	(3.6)	破片	緻密・赤色粒子	良好	橙色	橙色	
SK05	2	土師器	杯	-	-	(1.4)	破片	緻密・赤色粒子	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
SK06	1	鉄滓	-	9.3	7.0	3.3	完存					

第８表　遺物観察表（７）

第4章　総　括

今回の調査は、その調査原因が農道建設に伴うことから6.0～10.5 mという狭小な幅に限定された調査であったにもかかわらず、先に示したとおり平安時代の竪穴住居址16軒、溝5条、土坑19基といった数多くの遺構および該期の遺物を検出するに至った。遺跡の分布は、5区に分けた調査区の内、北寄りに位置する4区に集中して発見されており、ここでは遺構の多くに切り合い関係が認められ、遺構の分布が局所的にではあるが濃密であったことがうかがえた。

山梨県において、平安時代の土器の段階区分や年代観は、1980年代以降、検討が繰り返され精緻さを加えているが、今回の調査において検出された遺構のうち、その時期をある程度明らかにし得る遺物を得た遺構の変遷を、南アルプス市に隣接する韮崎市の宮ノ前遺跡の土器編年観（櫛原1992）をもとに示せば、9世紀前半から半ば頃の遺構として、SI14・SI15。9世紀後半代にSI02・SI06・SI08・SI13・SK03・SK05。10世紀前半から半ば頃としてSI03・SI04・SI05・SI07・SI09・SI10・SI11・SI12・SI16・SK02・SK04。10世紀後半代としてSI01を挙げることができる。

なお、今回の調査では、遺構覆土はもちろん包含層おいても、検出された遺構群の時期を遡る遺物や、検出された遺構の時期以降の時代の遺物は全く検出されなかった。したがって、今回の調査地点においては、9世紀前半から半ば頃に突如として集落の展開がはじまり、10世紀前半から半ば頃に最も盛行し、10世紀後半代には急速に衰えていったことが看取される。

本調査地点の西側に位置し、南北840 mにわたって遺構の検出が見られた本遺跡の甲西バイパス地点（県名称：百々遺跡）においては、その調査の結果から10世紀前半頃の水害によりその南半が放棄され、これ以後その部分に集落が展開しないことが明らかにされており、遺跡領域の南半に位置する今回の調査地点の様相も、これと機を一にした事象と捉えられる可能性があるが、一方で10世紀後半の集落の縮小傾向は、汎甲斐国的に見られる現象でもあり検討を要す。

また、集落の萌芽がみられる9世紀の中頃は、八ヶ岳南麓地域をはじめとして、汎甲斐国的に集落の飛躍的増加（＝開拓志向）がみられる時期として指摘されている（萩原1986・保坂1997）。御勅使川扇状地の他の地域においても、扇端の湧水線に沿って連綿と続いてきた遺跡から、新たなフロンティアとしての扇央地域への開拓志向が一気に高まる時期であり（田中2002・保坂1990）、本調査地点の集落の成因を考える上でも考慮したい。

◆

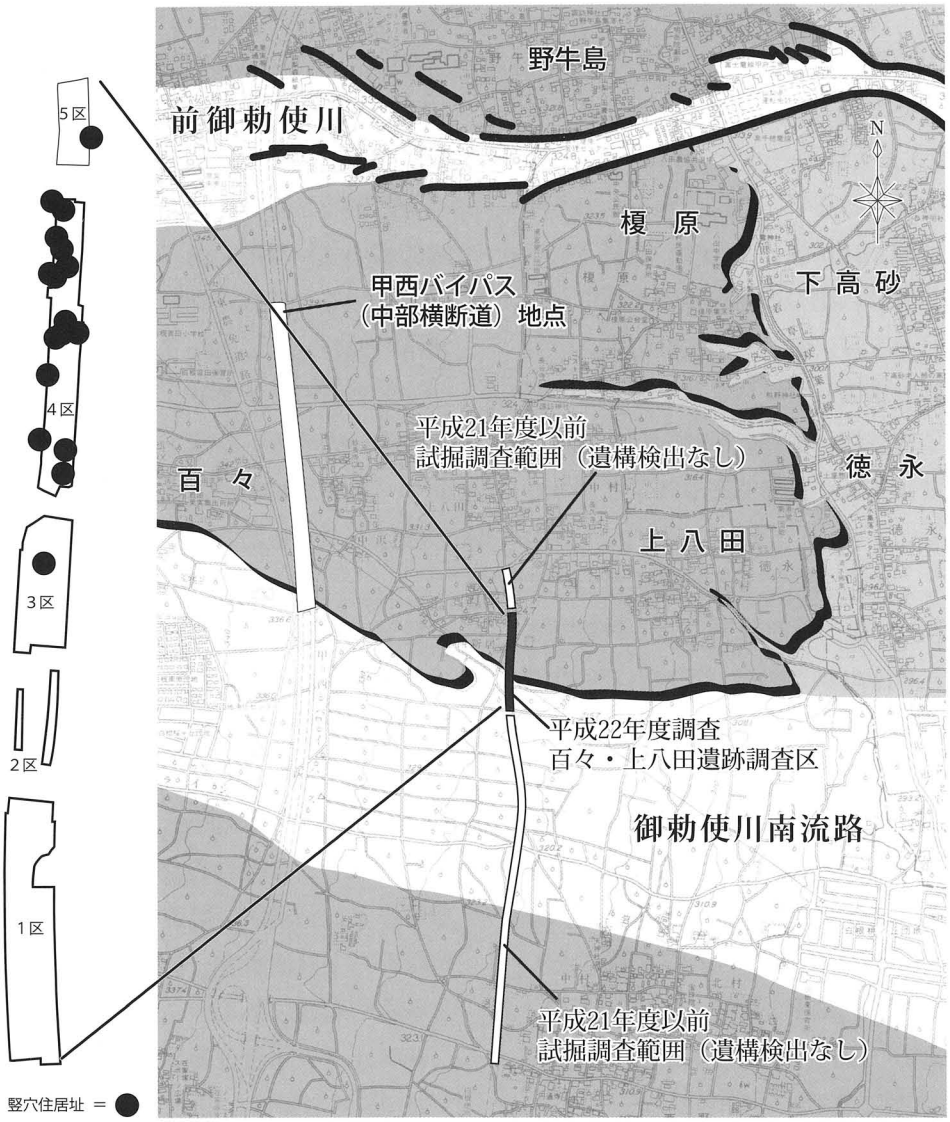
前記のとおり、今回調査対象とした範囲において、検出された遺構の分布は均一ではなく、特に人間生活の拠点となる住居址については、調査区北半にその分布が限られ、遺構分布に偏りがあることが明らかとなった（第53図）。

ところで、今回調査の原因となった、畑地帯総合整備事業白根地区の農道1号線は、南アルプス市在家塚から上八田まで、御勅使川扇状地上を南北に貫く新設の農道である。

南アルプス市教育委員会では、その建設に先立ち、平成17年度から、建設事業の進捗に伴い断続的に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施してきた。農道建設に伴う調査範囲は、前記のとおり極めて限定的な幅に限られる反面、長い延長を調査するため、平成17年度から断続的に実施されてきたこの試掘確認調査によって、御勅使川扇状地扇央部を切り開く長大なトレンチが入れられたという見方もでき、当該地域における遺跡の分布を探る上で重要なデータが蓄積された。

実施してきた試掘調査では、御勅使川南流路推定範囲の左岸側においては、これまで古代の遺跡が発見されていないことから、その有無確認を、御勅使川南流路の両岸では古代の護岸、治水関連遺構などの検出を念頭に調査を実施してきたが、遺構・遺物とも検出にいたらず、遺跡の成立を阻む御勅使川南流路の右岸側への影響を強く看取する結果となった。

一方御勅使川南流路右岸側においては、百々・上



第 53 図　発見された遺構の分布

八田遺跡の甲西バイパス地点において、南北 840 mにわたり、非常に大規模に遺構が検出されている状況に鑑み、今回の農道計画地内においても、全域で途切れなく遺構の検出を見るものと推察された。

しかし、これに反して結果は、今回調査を実施した範囲内においても遺構の分布は濃密だが局所的であり、平成 20 年度に計画範囲北端部分で実施した試掘調査によって、今回発掘調査を実施した範囲以北に遺跡の領域が広がらず、少なくとも北側約 90 m以上は遺跡が分布しないことも明らかとなった。

したがって、今回の調査では、上八田領域内のひとつの古代集落単位の南北の規模が確認されるとともに、集落が古代に御勅使川の本流であった御勅使川南流路の河岸に沿って帯状に展開していた可能性が明らかとなったことに加え、本調査地点が、遺跡の性格として、マクロに見ればこの領域の古代集落の一角としてみることができるものの、領域としては、甲西バイパス地点の調査成果が予想させる広汎な遺跡領域の一部に含まれるものではなく、空閑地を挟み領域を異にすることが明らかとなった（第 54 図）。

この領域から広範に発見される該期の遺構が、しかしこのようにこの領域全域にその分布があるわけではないことが近年の小規模な調査の蓄積によって明らかになりつつある。今後とも、このような調査の積み重ねによって、古代の人々のこの領域における生活空間のとりかたの様子がより鮮明に浮かび上がってくることが期待される。遺跡のひろがりと共に、遺構の存在しない空閑地を明らかにすることは、古代の環境や、ひいては遺跡集落を支えた生業のあ

り方などを考えるヒントともなろう。

◆

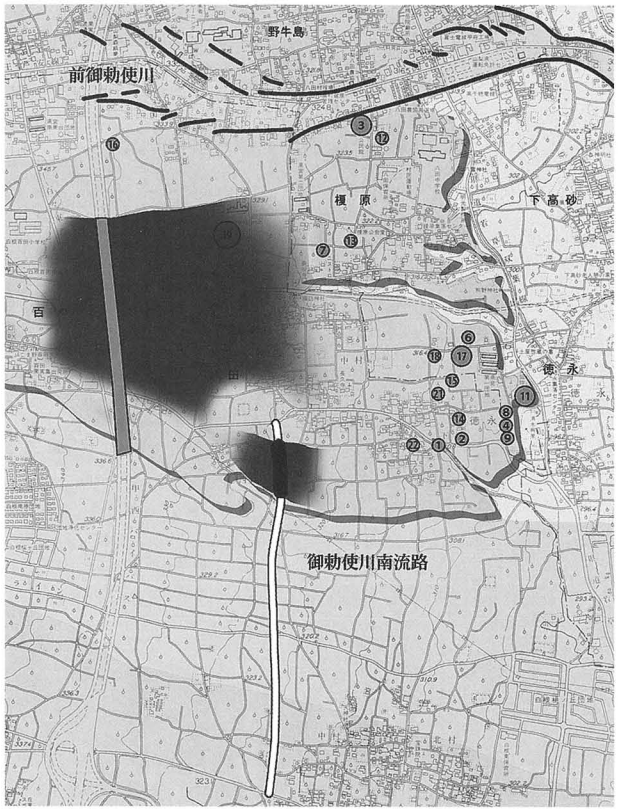
今回の調査地点の占地する、南アルプス市上八田において、平安時代の遺構確認面の土質は粘土質であることから、古代上八田は旱魃地帯ではなく、その後の水害による砂礫の堆積により、旱魃地帯となったという見方もあるが、御勅使川扇状地扇央では、近世〜近代を通じて、灌漑問題（そもそもいかにして、ここまで引水してくるか）を解決できなかった。御勅使川扇状地では、たとえ水田耕作が可能な土壌であっても、近世の用水開削をまたなければ、一定規模の水田開発が不可能であったし、また近世を通じて扇状地上の全域への灌漑というソリューションは見つけられず、その抜本的な解決は戦後スプリンクラー網の敷設を待たなければならなかった。

たとえ、近くに川があっても、御勅使川からは安定して水を得ることはできない。近代の用水堰もそこからの取水を避けているとおり※、川幅は広くとも扇状地河川である御勅使川は、水田等の灌漑に用いるような安定した水量を計算できる河川ではない。したがって古代、本調査区が南面する御勅使川南流路に本流があっても、そこからこの地域を豊かな水田景観に転化するだけの安定した水量はやはり望めなかったものと推察される。

しかし、甲西バイパス地点や今回の調査区を含む平安時代の大規模遺跡「百々・上八田遺跡」は維持された。

ところで、近世の上八田村は一人あたりの生産石高が、0.5石以下と、巨麻郡西郡筋で一人当たりの石高が最も低い村のひとつであり、水田皆無の畑作村でありながら、村落の規模は他の西郡諸村と比して決して小さくなかったことが知られている。水田村落にくらべて、土地生産性が低く、村落の存立基盤が決して充分とはいえないにもかかわらず、大規模な村落が立地し、しかも近世後半にかなりの戸口の増加が認められた。

近世を通じこの旱魃地域を支えたのは農業ではなく実は、活発な商業活動であったことが近年明らかにされているが（溝口2002）、近世と環境の変わらない古代御勅使川扇状地における大規模な集落経営についても、やはり農業以外の生業を想定したい。



第54図　想定される遺跡のひろがり

甲西バイパス地点において大規模な集落跡から、100頭を越すと推定される牛馬骨が発見されたことをはじめ、この地域に遅くとも中世には「八田牧」と呼称された「牧」が設けられていたことが知られることに鑑みれば、やはり当該地域における主要な生業として「牧」という存在を想起せざるを得ない。

このような立地下で古代大規模な集落が維持された。このことは逆に、古代の「牧」が、これだけの集落を支え得る装置であったことを暗示する。

◆

前記のとおり、9世紀中頃に始まる遺跡分布のインフレーション（＝開拓志向）は、八ヶ岳南麓をはじめとして汎甲斐国的にとらえ得る事象ということができる。その中で、御勅使川南流路と前御勅使川に挟まれたこの領域における9世紀の開発志向の現れ方が「八田牧」への萌芽であり、今回検出された集落址は9世紀中頃以降の遺跡の拡大過程で、域内に派生した集落と総括したい。

※　江戸時代前期寛文10年（1670）開削され、御勅使川扇状地に多くの新田を拓いた疎水「徳島堰」も、御勅使川からの引水を避け、御勅使川の下を暗渠によってパスし、その北側の釜無川から引水する。

参考引用文献

今福利恵　2004a 「御勅使川流路の変遷と地域の様相」『信玄堤の再評価　資料集』

今福利恵　2004b 「甲斐国巨麻郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』20　山梨県埋蔵文化財センター

櫛原功一　1992 「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』韮崎市教育委員会ほか

韮崎市教育委員会ほか　1992 『宮ノ前遺跡』

田中大輔　2002 「第Ⅳ章　総括」『溝呂木道上第５遺跡（第Ⅱ地点）』若草町教育委員会

萩原三雄　1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨県考古論集』Ⅰ　山梨県考古学協会

八田村教育委員会　2001 「榎原・天神遺跡」『八田村文化財調査報告書』第３集

八田村教育委員会　2002 「徳永・御崎遺跡」『八田村文化財調査報告書』第４集

保坂康夫　1990 「第Ⅲ編　第１章原始・古代の遺跡」『若草町誌』　若草町

保坂康夫　1997 「山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解」『研究紀要』13　山梨県埋蔵文化財センター

溝口常俊　2002 『日本近世・近代の畑作地域史研究』名古屋大学出版会

南アルプス市教育委員会　2005 「平成 15・16 年度埋蔵文化財試掘調査報告書／百々・上八田遺跡」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』 第 10 集

南アルプス市教育委員会　2011 「坂ノ上姥神遺跡　第２地点」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第 27 集

山梨県埋蔵文化財センター　2002 「百々遺跡１」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』 第 201 集

山梨県埋蔵文化財センター　2004 「百々遺跡２・４」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 212 集

山梨県埋蔵文化財センター　2004 「百々遺跡３・５」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 213 集

若草町教育委員会　1998 「角力場第２遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第１集

若草町教育委員会　2002 「向第１遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第３集

若草町教育委員会　2003 「溝呂木道上第５遺跡（第Ⅱ地点）」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第４集

調査地点遠景（南より）

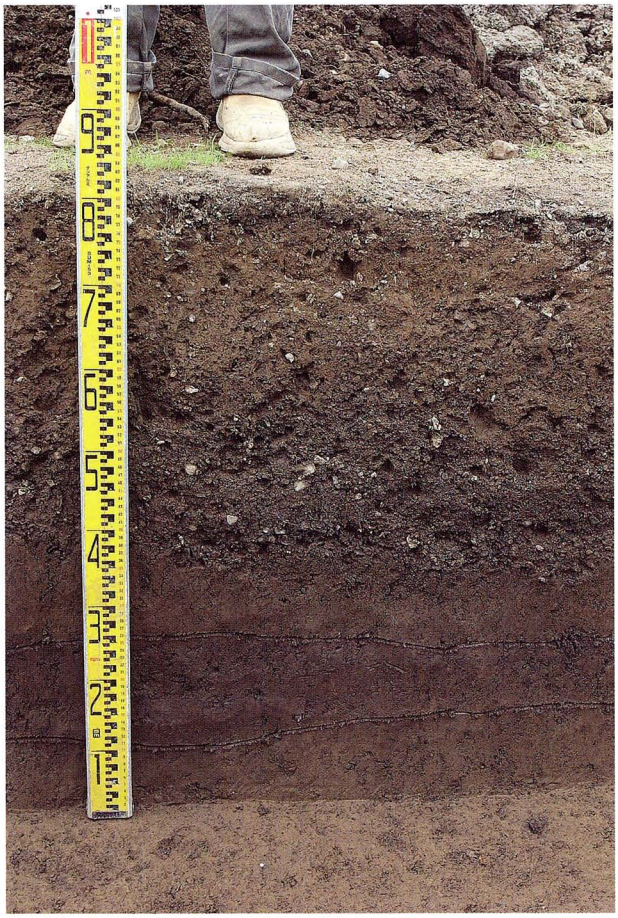
調査区遠景（南より）

図版２

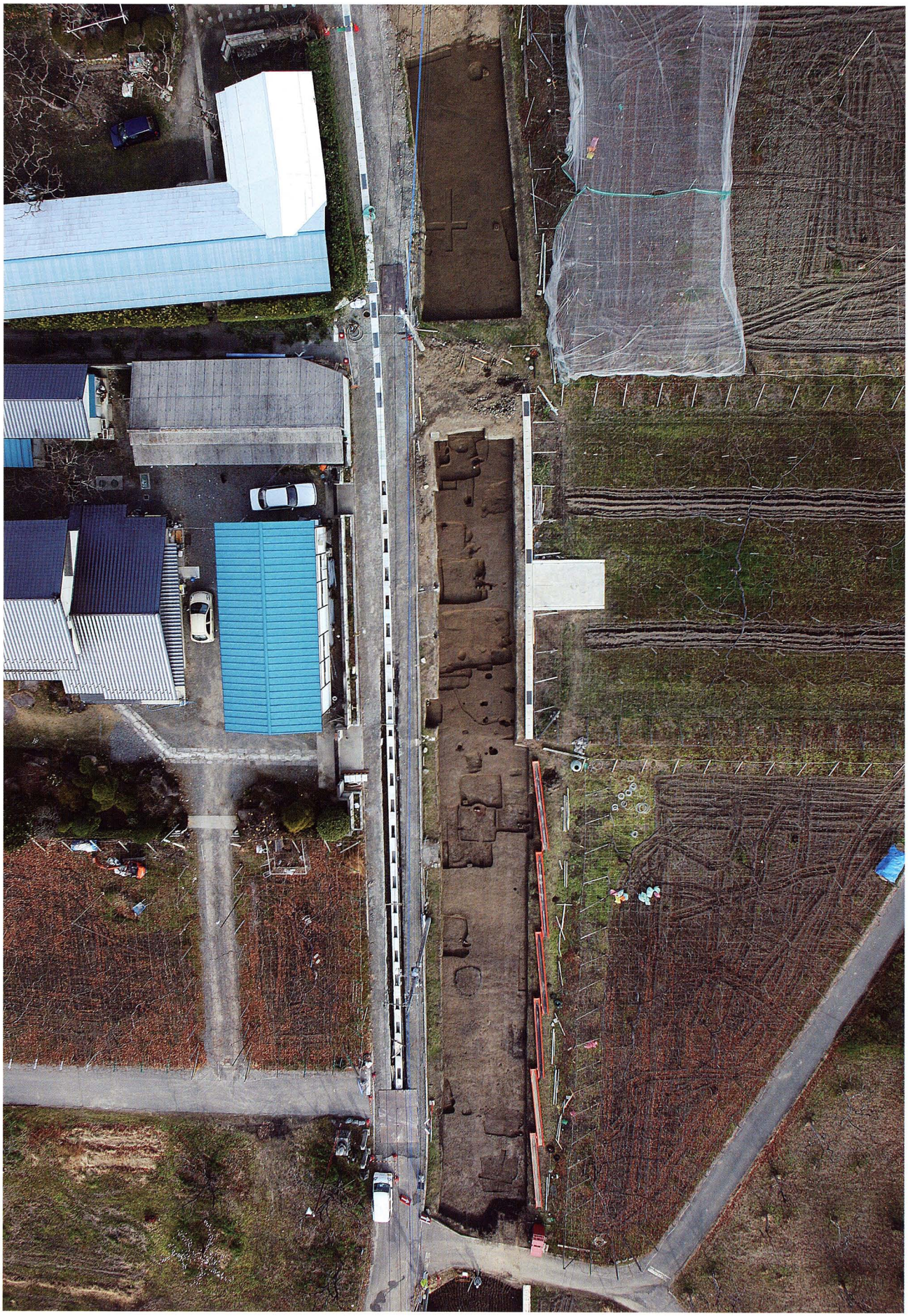
調査区１区全景（南より）

調査区３区全景（南より）

調査区２区　東側トレンチ調査状況（北より）



調査区２区　東側トレンチ土層堆積状況



調査区４区・５区全景（上方が北）

図版４

ＳＩ０１（西より）

ＳＩ０１竈（北西より）

ＳＩ０２（西より）

ＳＩ０２遺物出土状況（西より）

図版６

ＳＩ０３（西より）

ＳＩ０３竈（西より）

Ｓ１０４（西より）

図版８

ＳＩ０５（西より）

ＳＩ０５竈（西より）

ＳＩ０６・ＳＫ０６（西より）

ＳＩ０６竈（西より）

図版 10

Ｓ１０７（北より）

Ｓ１０７竈（西より）

ＳＩ０８（北より）

ＳＩ０８竈（西より）

図版 12

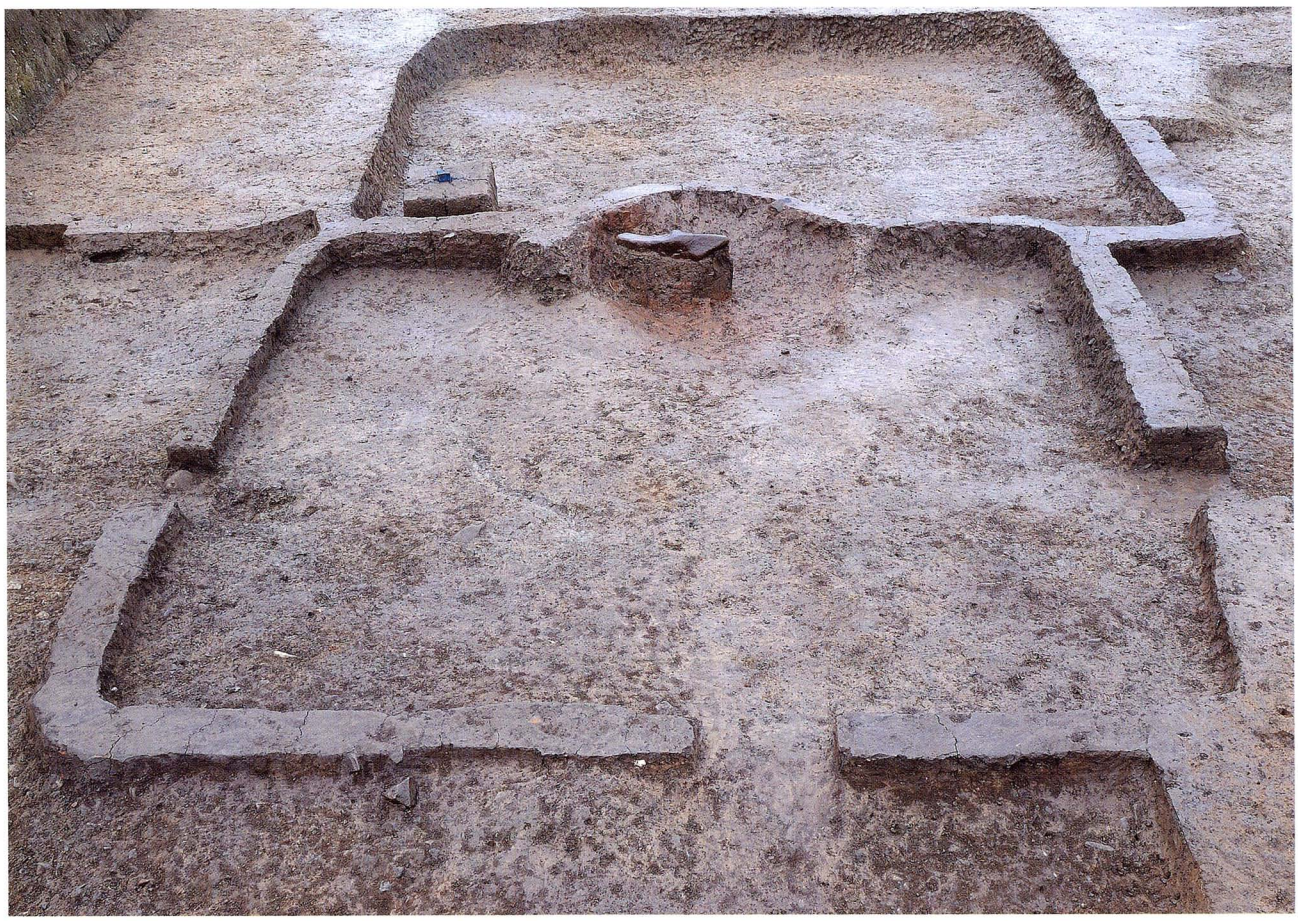
ＳＩ０８遺物出土状況（北西より）

ＳＩ０８遺物出土状況（北西より）

ＳＩ０９（西より）

ＳＩ１０（北より）

図版 14



ＳＩ１１（南より）

ＳＩ１１竈（南より）

ＳＩ１２（西より）

ＳＩ１２竈（北西より）

ＳＩ１３（北より）

ＳＩ１４（西より）

ＳＩ１４遺物出土状況（西より）

ＳＩ１５（西より）

図版 18

ＳＩ１５竈（西より）

ＳＩ１６（西より）

ＳＩ１６竈（西より）

図版 20

ＳＫ０２（東より）

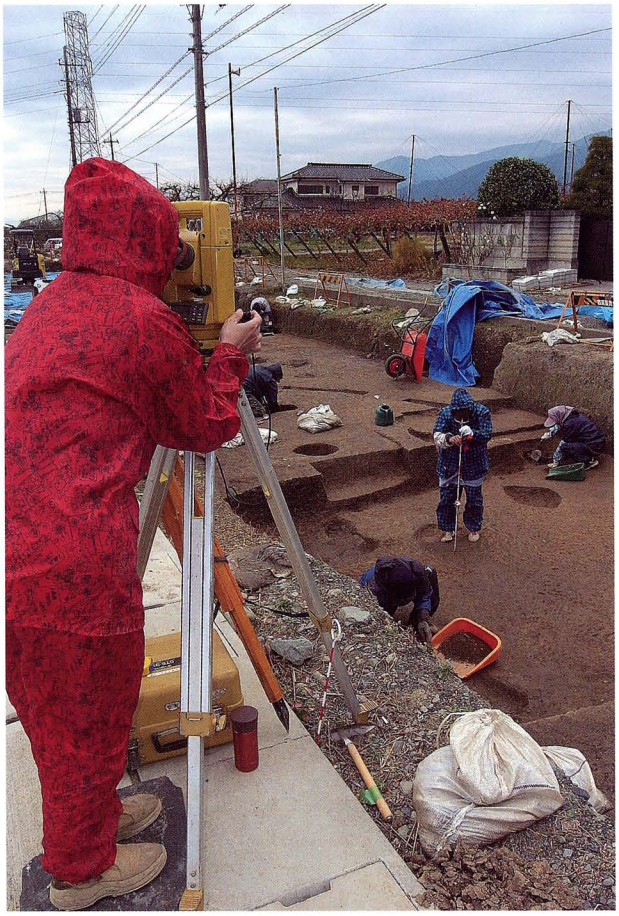
ＳＫ０３竈（東より）

SK04・SK05（北より）

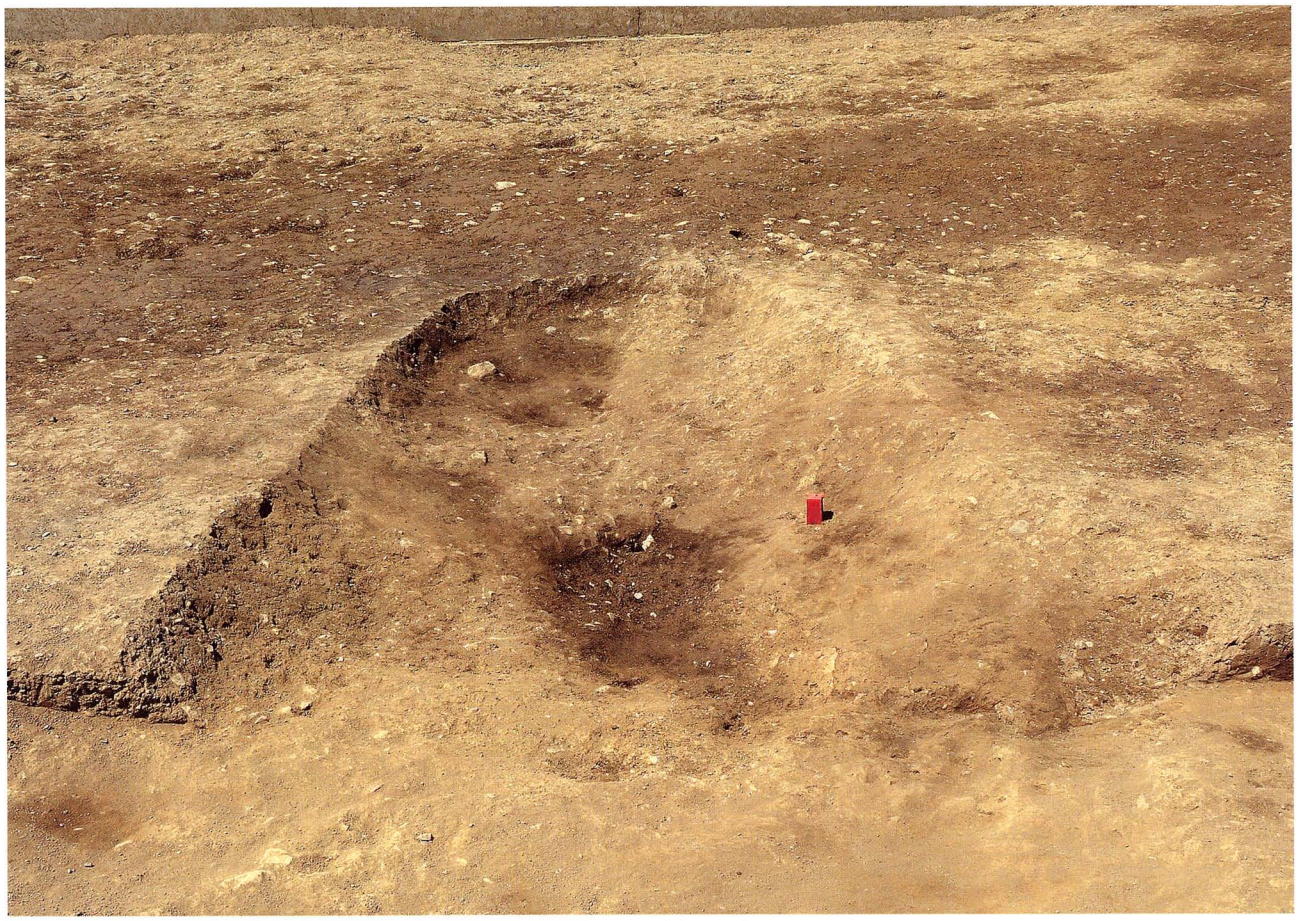
SD04・05／SK09～12・15～16（西より）

図版 22

ＳＫ０９（西より）

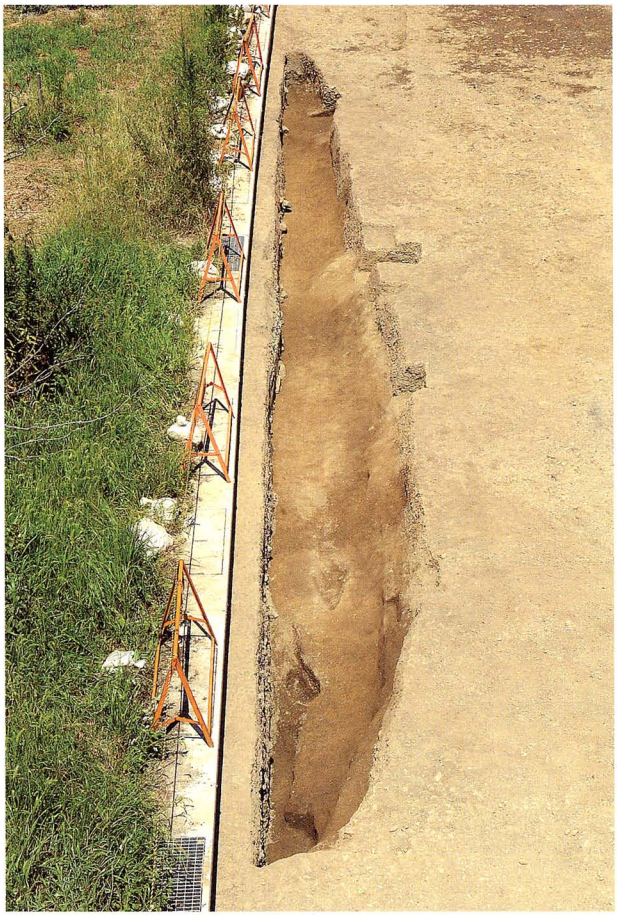


調査風景



ＳＤ０２（東より）

ＳＤ０１（西より）



ＳＤ０３（南より）

ＳＤ０３土層堆積状況（南より）

SI01-2

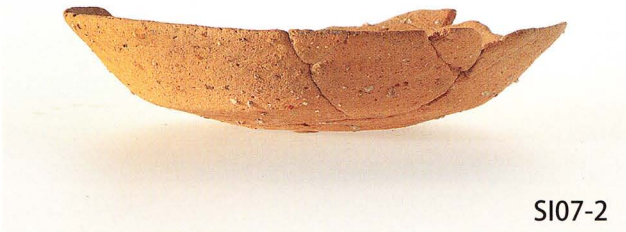
SI05-1

SI05-5

SI06-1

SI06-2

SI07-1


SI07-2

SI07-3

SI07-4

SI07-6

SI08-1

SI08-2

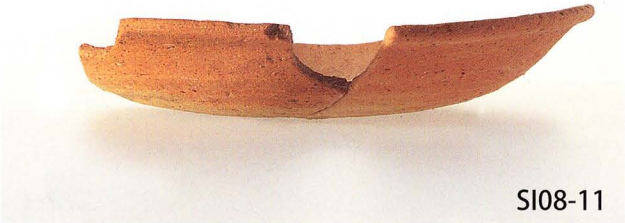
SI08-3

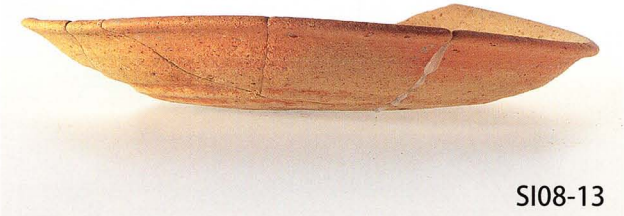
SI08-4

SI08-6

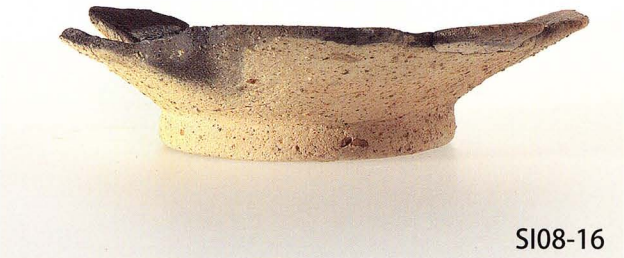
SI08-8

SI08-9


SI08-11


SI08-13

SI08-15


SI08-16

SI09-2

SI11-2

SI11-3

SI12-2

SI12-3

SI12-8

SI13-1

SI13-2

SI13-3

SI13-7

図版 28

SI14-1

SI15-1

SI15-2

SI15-5

SI15-6

SI16-2

SI16-4

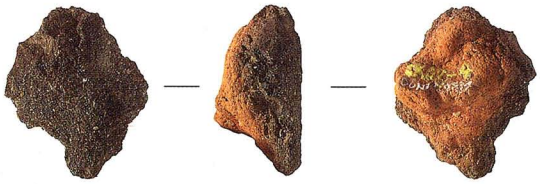
SI16-9

SI16-12

SI16-10

SK02-1

SK02-2

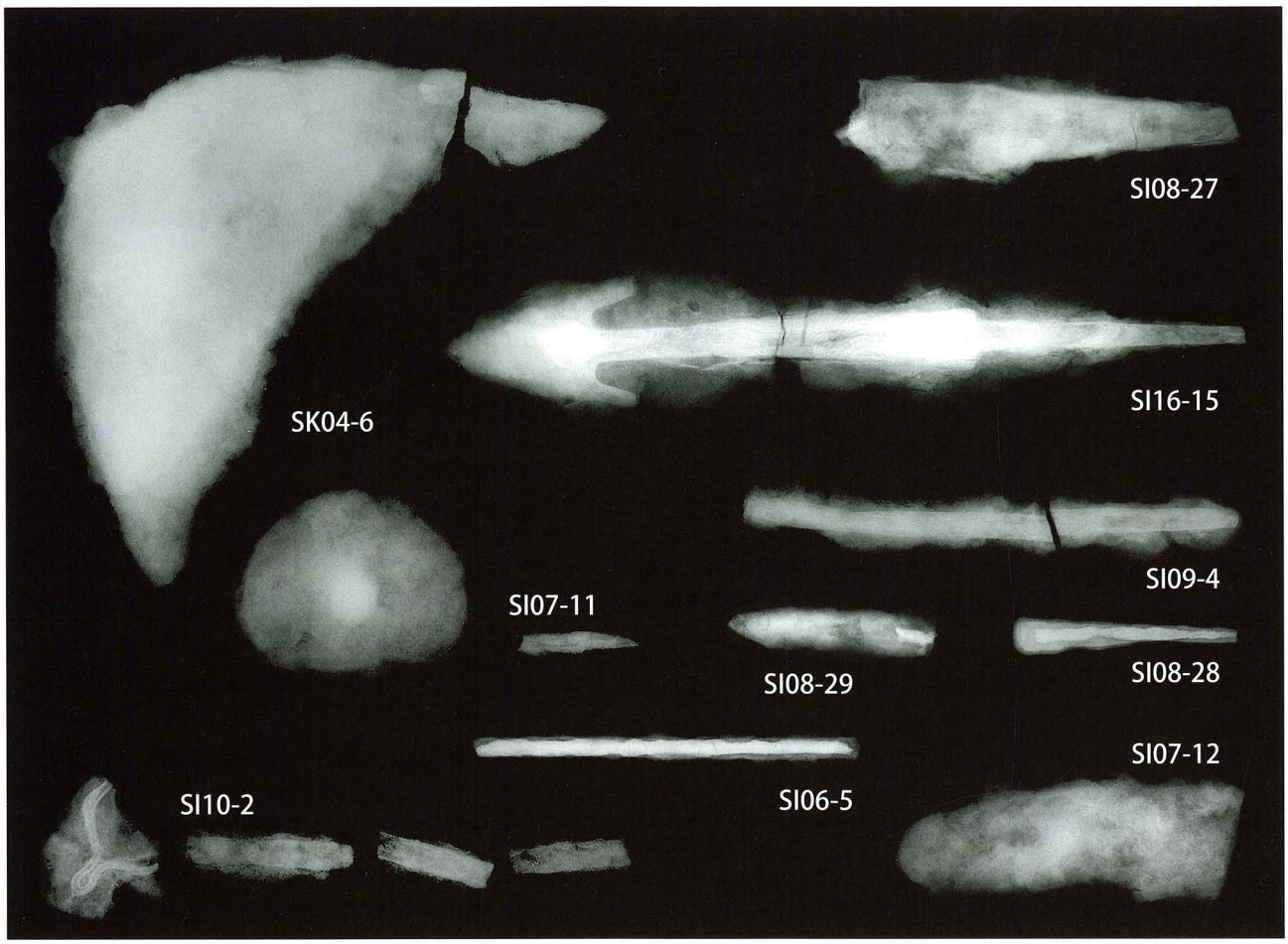


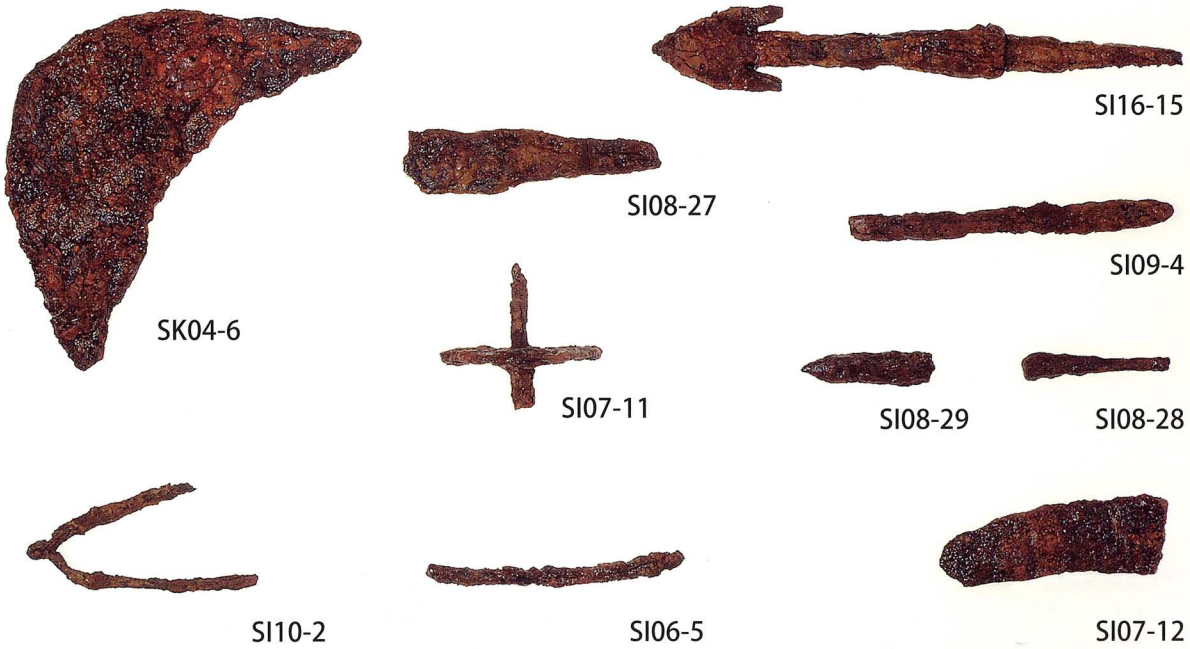
SK02-4

SK03-3

SK03-7

図版 30


SI08-27
SK04-6
SI16-15
SI09-4
SI07-11
SI08-29
SI08-28
SI07-12
SI10-2
SI06-5


SI16-15
SI08-27
SI09-4
SK04-6
SI07-11
SI08-29
SI08-28
SI10-2
SI06-5
SI07-12

報　告　書　抄　録

ふりがな	どうどう・うえはったいせき
書名	百々・上八田遺跡
副書名	畑地帯総合整備事業白根地区農道１号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第32集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400－0492　山梨県南アルプス市鮎沢1212　TEL055－282－7777
発行年月日	西暦2012年3月30日

ふりがな		どうどう・うえはったいせき
所収遺跡		百々・上八田遺跡
ふりがな		やまなしけんみなみあるぷすしうえはったちない
所在地		山梨県南アルプス市上八田地内
コード	市町村	19208
	遺跡	SN-3
1/25000地図名		小笠原
位置	北緯	北緯　35°39′08″（Japanese Geodetic Datum2000）
	東経	東経　138°28′46″（Japanese Geodetic Datum2000）
標高		324 m
調査期間		20100802~20100904 / 20101018~20101224
調査面積		1360㎡
調査原因		農道建設
種別		集落址
主な時代		平安時代
主な遺構		竪穴住居址16軒　土坑19基　溝5条
主な遺物		土師器　須恵器　灰釉陶器　鉄製品（紡錘車・鏃・刀子等）
特記事項		御勅使川扇状地上に占地した平安時代の集落址。古代、御勅使川の流路であった所謂御勅使川南流路に沿って遺構が分布することが明らかになった。

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第 32 集

百々・上八田遺跡

畑地帯総合整備事業　白根地区農道 1 号線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月 30 日　発行

編集発行　南アルプス市教育委員会
〒 400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢 1212
電話　055-282-7777

印　　刷　株式会社サンニチ印刷
〒 400-0058 山梨県甲府市宮原町 608-1
電話　055-241-1111